東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター開設10周年記念報告書

画像史料解析センターの成果と課題

東京大学史料編纂所

2007年6月

表紙：東京大学史編纂所所蔵『古写経断片襍』（小杉榲邨氏旧蔵）から

目　次

1. はじめに　1

2. 研究プロジェクト報告　3

第 1 分野　絵画史料分野

1　肖像画プロジェクト（肖像画模本・肖像情報データベース構築）　3
2　肖像画プロジェクト（歴史絵引データベース構築）　10
3　荘園絵図プロジェクト　14
4　南葵文庫国絵図プロジェクト　20
5　洛中洛外図屏風プロジェクト　23
6　内務省引継地図および関連史料についての研究プロジェクト　27
7　玉ものまへプロジェクト　31
8　大規模開発新田絵図プロジェクト　33
9　『一遍聖絵』画像データベースプロジェクト　35
10　赤水図デジタルアーカイブプロジェクト　38
11　油日神社プロジェクト　39
12　荘園絵図と荘園内遺跡の一体的認識の試みプロジェクト　41

第 2 分野　画像史料分野

13　錦絵・摺物プロジェクト　43
14　風説留中画像史料プロジェクト　45
15　古写真研究プロジェクト　47
16　幕末維新画像史料研究プロジェクト　53
17　画像史料による近世儀礼の空間構造と時間的遷移に関する研究プロジェクト　56
18　南島関係画像史料の研究プロジェクト　60
19　萩野家旧蔵古写真資料の調査研究・整理プロジェクト　63

第 3 分野　古文書画像分野

20　万寿寺地蔵菩薩坐像胎内文書画像解析プロジェクト　65
21　入来院家文書 CD-ROM 版の制作プロジェクト　67
22　史料編纂所所蔵貴重書のデジタル化・公開プロジェクト　70
23　『花押彙纂』の画像データベース構築プロジェクト　73
24　台明寺文書フルテキストデータベース化プロジェクト　79
25　金石文拓本史料の整理と公開プロジェクト　81
26　院宣・綸旨画像のデジタル化プロジェクト　85
27　本所所蔵益田家文書の古文書画像公開プロジェクト　87
28　本所所蔵文書等の料紙分析プロジェクト　89
29　特別展中間生成物転用検討プロジェクト　91
30　所内デジタル素材に関する実験プロジェクト　93
31　崩し字データベース開発プロジェクト　96
32　教養学部美術博物館所蔵装束類図版目録プロジェクト　99
33　中国档案プロジェクト　101

3. 資料集

研究組織・研究成果・外部資金　104

1. はじめに

画像史料解析センター開設10周年記念事業実行委員会

東京大学史料編纂所附属画像史料解析センターは、「日本史に関する各種画像史料及び画像史料情報を収集・整理して系統的に蓄積するとともに、電子計算機等による画像情報処理方法を生かして解析・研究を行い、その成果を学内外に公開すること」を目的として（センター規則第2条）、すなわち、コンピュータによる画像処理の飛躍的発展を前提として、絵画・絵図史料や古写真等の各種画像史料の歴史学的な解析・研究という近年の日本史研究の課題を実現するため、1997（平成9）年度に附属施設として設置され、2007（平成19）年度に開設10周年を迎えました。これも偏に関係各位のご指導・ご尽力の賜物と深謝申し上げる次第です。

史料編纂所では、これを記念し、

本年6月29日（金）午後1時より、東京大学山上会館にて、本所主催の研究集会を開催すること、

センターに関わりのあるプロジェクト34件全てに対して、その活動の到達点と今後の課題について詳細に記した報告書のダイジェスト版として、『画像史料解析センター通信』（以下、本書においては『センター通信』と略称）38号を特別号として編集すること、

を決定し、それを受け、センター所属教員・元センター専任教員・センター運営委員長・センター長の計13名からなる記念事業実行委員会が組織され、それらの準備を担当いたしました。

研究集会は、別添の開催要領のように、センターに所縁のある国内外研究者3名による記念講演、センター活動の主力である各プロジェクトグループによる活動報告、並びに、これまでの10年間の活動を総括し現状における課題と今後の展望についてのセンター長報告「画像史料解析センターの成果と課題」を予定しております。研究集会においては、これまでに関わりのあった全てのプロジェクトが報告を行うべきですが、種々の制約により、それを断念し、それに代わるものとして、全プロジェクトに対して、その活動の到達点と今後の課題について詳細に記した報告の提出を依頼し、それらをまとめた報告書を作成いたしました。本日配布した本報告書が、それに当たります。

各プロジェクト毎に活動年数等の多少に応じて、執筆頁数を割り振り、その内容は、以下の項目を盛り込んで詳細な説明を加えるものといたしました。

○プロジェクト名称、○プロジェクト担当者、○プロジェクト開始年度（終了年度）、○プロジェクトの基礎となる史料・対象、○プロジェクトの概要、○プロジェクト遂行の目的・意義、○遂行作業に関わる内容、①成果の公開方法および開始年度、②遂行経費の概要、③作業実施の主体およびその支援体制、④作業の流れ、○対象史料総量に対する現状データの量・位置付け、○残された課題・問題点、○今後の展望・終了の見通し・要望、○関係する研究報告・参考文献など、○ WEBによる成果公開①第3回外部評価

以後の取り組み、② 2006 年度リプレイスへの対応、

これらの項目について、各プロジェクトの現状を、所内外にわかりやすく説明する（該当事項のない場合は省略に従う）とともに、『自己点検評価報告書　東京大学史料編纂所歴史情報データベースシステムの現状と課題 2003〈第 3 回外部評価資料〉』(2003 年 10 月）第 2 章、及び『第 3 回外部評価の指摘』を踏まえていること、『センター通信』24 号（2004 年 2 月）「特集　画像史料解析センターの七年」における各種提言に対応していること、に留意して、自己点検・自己評価に資する性格をもたせるようにしました。

上述しましたように、報告の対象は、開設以来、センター活動の主力を担ってきた全てのプロジェクト 33 件であり、そのなかには、当初に活動を開始し今日まで継続して進行している基幹的で大型のものもあれば、経費を伴わずに単年度で終了したもの、またプロジェクトの代表者が現在本所に在職していないものなど、その大小や経緯がさまざまであり、一律にまとめること、全ての原稿を期限内に集めて編集すること、などについては、当初から困難が予想されておりました。残念ながら、編集作業上、担当者が直接執筆することができなかったプロジェクト報告がありますが、全て収載することができたことは、実行委員会として、誠に幸いでありました。

なお、本報告書は大部であり、多くの方の目に触れることが難しいと予想されましたので、いわば、そのダイジェスト版を作成し、『センター通信』38 号を特別号として、それに充て、多くの方に郵送・配布しております。

ところで、これらの報告を通覧いたしますと、データベースの構築・公開、出版物・ニュースレターの刊行、国際・国内研究会の開催などの各種活動を通じて、画像史料研究やその収集・公開に関して、本センターが担った役割の功績とともに、抱えている課題に想いを馳せざるを得ません。本所において培われてきた伝統的・正統的な歴史研究・史料研究の場において、新たな研究方法を開拓し、歴史学・史料学の広がりをもたらした功績は大きい、というべきであり、センターの持つ重要な意義は十分に理解されるであろうと自負しております。しかし、その一方、個性的な研究者によって開始・維持されてきた事業を、どのように継続・発展・収束させていくのか、という開設当初からの課題は、ある意味で現実化していると考えております。幸いにも、センター事業は、所員をはじめ所外の共同研究員や国外研究機関のご協力・ご参加を得て活況を呈しております。このような時期であるからこそ、これらを明確な意識と方法とに収斂して再編し、画像史料研究の真の「センター」に展開していく仕組みを考える必要があると認識している次第です。

これまでのセンターの活動に関して、ある種の自負というべきものを持ってはいるものの、どのような評価が下されるのかについては、本報告をお読みいただいた皆様に委ねるしかありません。どうか忌諱のないご意見・ご批判をお寄せいただき、今後の活動の糧にしたいと考えるとともに、更なるご支援・ご協力をお願いする次第であります。

2．研究プロジェクト報告

1，肖像画プロジェクト（肖像画模本・肖像情報データベース構築）

⑴プロジェクト担当者

（代表）高橋典幸

（メンバー）藤原重雄

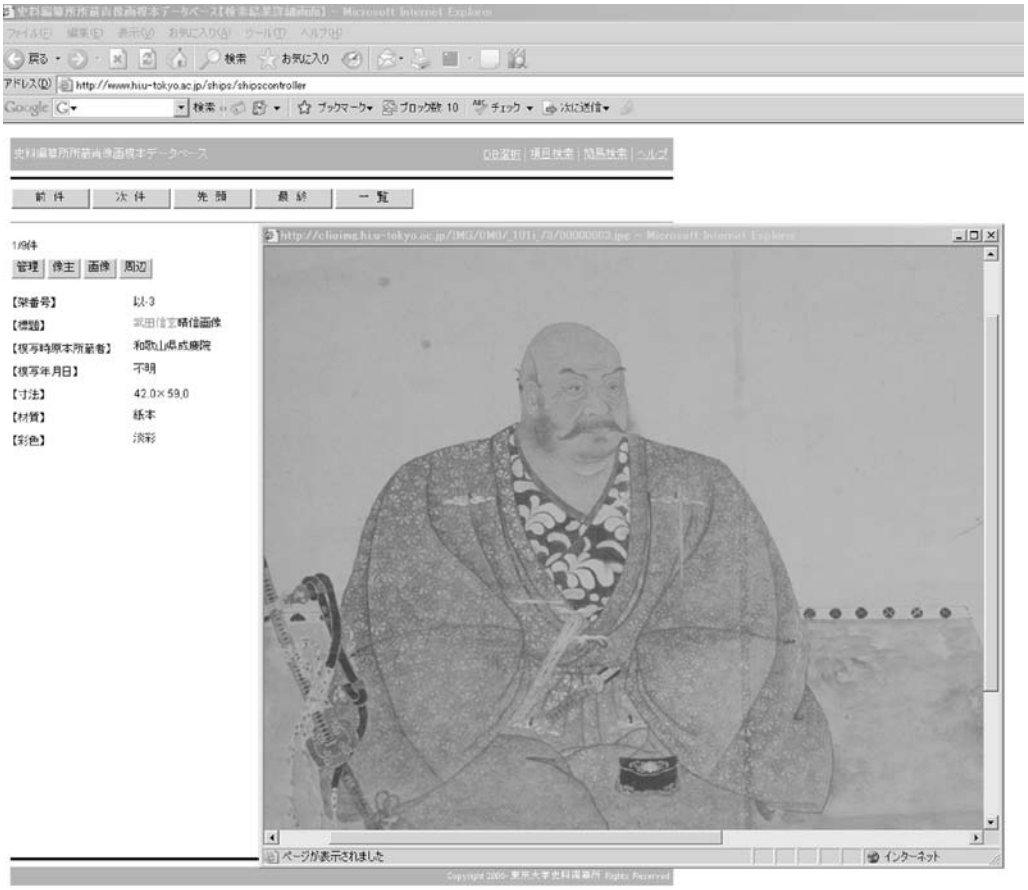
⑵プロジェクト開始年度（終了年度）

1997 年度～（継続中）

⑶プロジェクトの基礎となる史料・対象

〔史料編纂所所蔵肖像画模本データベース〕

本所所蔵模写のうち肖像画。



〔肖像画情報データベース〕

科学研究費一般研究（A）「中世・近世肖像画の調査・データベース化と歴史図像学的研究」（研究代表者黒田日出男、1992 ～ 1995 年度、以下「黒田科研」と略称）により蓄積された肖像画カード。

⑷プロジェクトの概要

〔史料編纂所所蔵肖像画模本データベース〕

本所所蔵模本のうち、肖像画模本についてデータベースを作成する。その際、単なる目録・書誌データベースではなく、画像情報のデータベース化を研究する。

〔肖像情報データベース〕

「黒田科研」により蓄積された肖像画カードをデータベース化する。

⑸プロジェクト遂行の目的・意義

〔史料編纂所所蔵肖像画模本データベース〕

本所所蔵肖像画模本を対象として、画面情報の文字列検索方法を研究・提示する。

〔肖像情報データベース〕

「黒田科研」の成果を公開して、肖像画等の掲載情報の探索を容易にする。また、肖像画の名付けの変遷を探る基礎資料を提示する。

⑹作業遂行に関わる内容

①成果の公開方法および開始年度

〔史料編纂所所蔵肖像画模本データベース〕

1999 年 4 月からインターネット公開。

〔肖像情報データベース〕

2000 年 3 月からインターネット公開。

②遂行経費の概要

〔史料編纂所所蔵肖像画模本データベース〕

1997 年度：なし（東大 120 周年企画（総合研究博物館）で肖像画模本約 350 点の ProPhotoCD を作ってもらった）

1998 年度：史料編纂所所蔵肖像画模本データベース開発費は、他データベース作成と合算して供与を受けた。

2000 年度：23 万円　備品購入など

2001 年度：87 万円　肖像画模本（残り 600 点）ProPhoto CD 作成経費

2004 年度：77 万円　肖像画賛等入力経費

2005 年度：34 万円　イメージファイル作成費・カード作成費

2006 年度：43 万円　カード作成費・焼付購入費・デジタル処理費

〔肖像情報データベース〕

1999 年度：画像史料解析センター経費（389 万円）　肖像カード入力経費・肖像情報データベース開発経費

③作業実施の主体およびその支援体制

肖像画プロジェクト：黒田日出男（1997 ～ 2003 年度）、米倉迪夫（1997・1998 年度、客員教授）、高橋典幸（1997 年度～）、藤原重雄（2004 年度～）

研究支援推進員（1999 ～ 2002 年度）・学術支援員（2003 年度）・センター共同研究員・非常勤職員　とくに、近藤好和・佐多芳彦・三戸信恵の三氏には多大な尽力を仰いだ。

④作業の流れ

〔史料編纂所所蔵肖像画模本データベース〕

１)すでに「黒田科研」により肖像画模本(約900点)の模本群全体からのピックアップ・基礎的調査･撮影等は完了していた。このうち、1997年度には東大120周年企画として、戦国大名を中心に350点ほどを肖像画ギャラリーに提供した(総合研究博物館によりデジタルミュージアムとして出陳された)。そこで、1998年度から、これら約350点を対象としてデータベース化に着手した。

２)データベース化に際しては、「管理情報」「像主情報」「画面情報」「周辺情報」の4種類の情報群を付加することとした。

３)「管理情報」は肖像画模本そのものの書誌情報である。その主要なものはすでに「黒田科研」によって作成されていたものを利用した。

４)「像主情報」は、肖像画像主の略歴である。東大120周年記念に肖像画ギャラリーとして提供した際に作成したものを基礎とした。

５)「画面情報」は、本データベース最大の特色とするもので、画面に書かれているモノや描写法などをテキストとして記述したもの。すなわち、画面をテキストに「変換」することによって、画面情報をテキスト検索の対象としたのである。画面情報の読み取り・記述には、美術史学・有職故実の専門家に全面的に依頼した。

６)「周辺情報」は、当該肖像画についての研究文献や参考文献などをリストアップするものである。

７)以上の情報を対象として得られた検索結果に対して、イメージファイルをリンクした。ここで工夫したことは、検索結果そのものをイメージで表示できるようにしたことである。サムネイルファイルを配列したので、ここのイメージが小さいという難点はあるが、複数の肖像画の概要を比較できるというメリットを期待した。

８)「画面情報」の記述に際しては、特殊な用語が使われることもあり、そもそも画面をテキスト化するという初めての試みゆえ、どのような文字列を検索すればよいかわからないという不具合が予想された。そこで、キーワードを抽出・分類した検索ガイドを設けて、検索の便を図ることにした。これらは、きわめて素朴な形ではあるが、一種のシソーラスとして機能するものである。

９)2004年度から新たに画賛テキストの公開を企画し、既登録分の模本については、テキスト化は完了し、校正をかけている段階にある。肖像画に付された画賛類も有力な史料であり、これらが検索対象となるメリットは大きいと考えている。

〔肖像情報データベース〕

１)「黒田科研」は肖像画の全国的遺存状況の悉皆調査を目標とし、具体的には都道府県史や市町村史といった地方史記述、日本史の通史叙述、さらには各地の博物館や美術館などの図録類から肖像画の所在情報をカードに取る作業を進めた。具体的には「○○の肖像の図版ないし言及が△△の本の＊＊頁に載っている。そこでは□□という情報が記録されている」といったことが一点ずつカードに記録されており、その数は25,000件以

上に達している。 そこで「○○○○の肖像は××××の本の何頁にある」という掲載誌情報の提供を基本コンセプトとし、掲載誌から知られる限りでの肖像情報の提供を目的としてデータベース化することとした。

２)作業は 1999 年度に集中して行なった。まずカードを全て電子ファイルに入力することとした(外注)。その際、カードそのものもイメージファイル化した。カードには図版のコピーなども添付されており、文字以外の情報も貴重と考えられたからである。

３)カードの入力と並行して、データベースの開発に取り組んだ。これはきわめて単純な目録型のデータベースである。

４)同一人物の肖像が複数存在することはごく普通にありうる。例えば、後醍醐天皇の肖像画であれば、大徳寺にも所蔵されているし、清浄光寺にも所蔵されている。また「天子摂関御影」にもその肖像が描かれている、といった具合である。これらをデータベース上で区別できるよう、作品ごとに名寄せする修整作業に着手したが、あまりにも膨大な作業で、担当者の手には負えなくなったため、途中で作業を中止(中断)している。ちなみに、これまで所外公開は名寄せ作業の修整済みデータに限定してきたが、近々全件オープンにする予定である。

⑺対象史料総量に対する現状データの量・位置づけ

〔史料編纂所所蔵肖像画模本データベース〕

約 4 割(350 ／ 900)

〔肖像情報データベース〕

「黒田科研」の肖像画カードは登録済み。

⑻残された課題・問題点

〔史料編纂所所蔵肖像画模本データベース〕

①最大の問題点として、1998 年度当初に作成して以来、データの更新・追加がじゅうぶん行なわれていなかったことを挙げざるをえない。ただし、近年になって作業が再開されつつある。

② 2005 年度には残りの肖像画模本約 650 点のイメージデータの生成を完了し、全て画像サーバに登録した。これらについては所蔵史料目録データベースとのリンクが実現している。

③ 2006 年度からはこれら 650 点についての「管理情報」の作成を進めている。その過程で「黒田科研」によって作成された調査台帳の一部が紛失していることが判明した。物品管理が徹底していなかったことを痛感させられる。

④肝心の「画面情報」の作成がネックになっている。偶然、各種の専門家が揃っている時期に、彼らに依拠して「作ってもらった」かっこうであり、とても我々の現在の「力量」では同じレベルのものを用意できない。将来のデータベース更新について、当初の見通しが甘かったと言わざるを得ない。

⑤「像主情報」は、そもそも 1997 年度に総合研究博物館の東大 120 周年企画・肖像画ギャラリーに提供したものである。一般の利用者に対する展示解説用に作成したものであり、

史料編纂所所蔵肖像画模本データベースの性格・質という点で疑問を感じている。時期を見て削ることも考えている。

〔肖像情報データベース〕

①データの範囲が、二つの意味で不明確という問題がある。

②一つは典拠を辿りえないという「不明確」さである。たしかに肖像画カードには出典である本の書名・刊行年・頁数などが明記されているが、本所における架番号が記録されていない。今にして思えば、架番号も記録してデータベースに登録すべきであったが、カードの量の膨大さを考えると、簡単にはできない作業である。

③もう一つは、何がどこまでカード化されているのかが「不明確」である。いちおう「黒田科研」段階で本所に架蔵されていた図書(地方史誌類)をカバーしているのだが、その範囲(どの県がカバーされているのか、どの年の刊行物までカバーされているのか)に明確さを欠くのである。収められているデータの範囲が不明確ということは、データベースとしての正確さ・厳密さに関わる問題と言えよう。

④また、今後このカードを取り続けていくのかどうか、という問題もある。幸か不幸か、肖像情報データベース作成以後、新たな肖像画カード作成は中断しており、2006年度から試験的に再開している(県別に採録対象の確認と新規カードの作成)。もし今後恒常的に肖像画カード作成続けていくとして、上記したデータの採録範囲いう問題とともに、恒常的に作業を行なう体制(人員・予算)を整える必要があろう。担当者の個人的な努力ではもたないと思われる。

(9)今後の展望・終了の見通し・要望

〔史料編纂所所蔵肖像画模本データベース〕

①対象の範囲は見えているので、ゴールは目指さなければならない。少なくとも書誌・目録データベースとしての完結が当面の目標となる。

②その場合でも問題になるのは「画面情報」の扱いである。これまでの「画面情報」のレベルを維持するべく美術史学や有職故実の専門家との協業を模索する方法もあるが、実現度は低いだろう。あくまで私見であるけれども、最初から文章化するのではなく、検索ガイド用に準備したキーワード分類に沿って、単語レベルで画面情報を記述(抜書き)していくこと(私たちのレベルでできること)から始めてはどうだろうかと考えている。そうした作業の中から、画面情報の記述方法について一定のスタイルを「開発」することができれば、画像史料解析という研究課題を果たすことができると考えている。

③問題はそのための資源。必ずしも大規模な装置を必要とするわけではないから、必要なのはヒトである。もちろん、他に編纂を抱えた所員(肖像画に精通している者ばかりでもない)のみではよくなしうるものではないので、研究員などの支援を仰ぎたい。ただ「お任せ」になってしまってはこれまでと同じ轍を踏むことになるので、所内メンバーを交えた共同作業とすることが望ましい。史料編纂所という人的環境下で維持することができるスタイルの開発を常に意識しなければならない。

④もう一つの問題は時間。対象とする範囲が見えているとはいえ、なお600点以上の肖

像画模本が残されている。時間にメリハリをつける工夫が必要であろう。そのためには、これまでのようにセンタープロジェクトとしてセンター経費の中でやっていくべきなのか、それとも、たとえば科研費を申請し、その範囲内で成果を出す努力をするのがいいのか、検討に値しよう。

〔肖像情報データベース〕

①どの範囲のデータを対象とするのか、明確な方針を定める必要があろう。

②方針を定めた上で、今後恒常的にデータ採取を続けていくとする場合、そのための手段・体制を整える必要がある。恒常的な作業となれば、個々のプロジェクトチームでそれを保障することは難しいので、画像史料解析センターとして支援してもらいたいところである。

③データ採取そのものは実務作業的性格が強く、それによって肖像情報データベースのコンテンツが豊かになっていくことはけっこうなことではあるが、研究的性格は希薄であることは、正直認めざるを得ない(この作業が進行しても、学問的な評価は受けにくいだろう)。

④しかし、肖像情報データベースの眼目は基礎的情報の(恒常的な？)蒐集という点にあり、その学術的価値は高いものと信じる。また、こうした作業を行ないうる機関・組織は史料編纂所以外にはあまり考えられないだろう。②の問題とも関わるが、こうした作業を画像史料解析センターの事業ないしプロジェクトとして、しかるべく位置づける議論が必要であろう。

⑤個人的な感想であるが、肖像情報データベースは人名インデックスとしても使えると思う(「○○の肖像はどの本で見ることができるか？」という使い方から、「○○に触れている文献はどれだ？」として使うこともできる)。本所には他にも人名を対象とするデータベースがある(個人史データベース・中世記録人名索引データベース・花押カードデータベース・花押彙纂データベース・大日本史料索引データベースなどなど)。それらは同じく人名を対象としているとはいえ、人名に対するアプローチの仕方はそれぞれ異なっているので、これらをうまく連携させることができれば多角的な人名辞書となろう。肖像情報データの収集も、そうしたデータベース連携の一環となることで、その価値をより高めることができるように思われる。

⑽関係する研究報告・参考文献など

高橋典幸「肖像画データベースの試み」『人文学と情報処理』22号、1999年7月

高橋典幸「東京大学史料編纂所肖像画データベースの試み」全国文献・情報センター人文社会科学学術情報セミナーシリーズ10『アジア情報学のフロンティア』予稿集、2000年11月

黒田日出男「肖像画模本データベースの読み方①～⑤」『センター通信』10～14号(2000年7月～2001年7月)

⑾ WEB による成果公開

①第 3 回外部評価以後の取り組み

〔肖像情報データベース〕でデータの採取を再開しているが、データベースに登録する段階には至っていない。

2，肖像画プロジェクト(歴史絵引データベース構築)

⑴プロジェクト担当者

(代表)黒田日出男(2000 ～ 2002 年度)、加藤友康(2003 年度～)

(メンバー)松澤克行(2006 年度～)・高橋典幸・谷昭佳(2006 年度～)・中村尚暁(2006 年度～)・藤原重雄・安達千鶴子(2002 年度～・非常勤)・大田まり子(2000 年度～・非常勤)、このほか佐多芳彦・黒田智・斉藤研一・川島慶子・永井久美子・長谷川裕子・加藤裕美子・大澤泉が各種研究員として参加した。

⑵プロジェクト開始年度(終了年度)

2000 年度～（継続中）

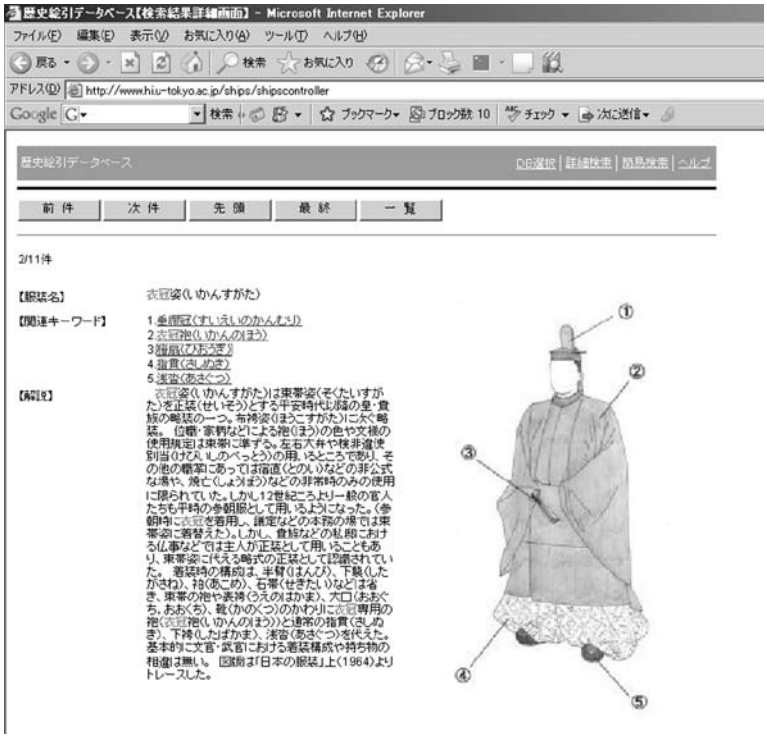
⑶プロジェクトの基礎となる史料・対象

『伴大納言絵巻』・『一遍聖絵』・『春日権現験記絵』などの絵巻物、『洛中洛外図屏風』・『江戸図屏風』などの屏風絵をはじめとする各種の絵画史料。なお加藤貞次郎著・関根正直補『増訂有職故実辞典』、服飾史図絵編集委員会編『服飾史図絵』、小泉和子著『家具と室内意匠の文化史』、『仏具大事典』、丹野郁著『南蛮服飾の研究』、鈴木敬三編『有識大事典』などを参照して詳細検索・簡易検索用のメタデータを作成している。

⑷プロジェクトの概要

日本史(とくに前近代史)研究・教育のための「知識型データベース」の一種として、絵画史料に描かれたモノ・道具・などの名称や機能など知るための『絵引』（Pictionary，絵を調べる一種の辞書)として歴史絵引データベースの構築をすすめている。

『絵巻物による日本常民生活絵引』に対して、歴史学的な絵引を作成してインターネット版の知識型画像データベース構築を目的とするところにその特徴がある。本データベースが第 1 に目指すところは、日本史・日本文化と不可分なモノやコトについての良質なトレース図版を作成・蓄積して、それをネットワーク上で公開していくことである。



第 2 は、これらのトレース画像にモノやコトの名称を付して歴史のイメージについての語彙を提示していくことを目的としている。本データベースを検索して

いくことによって、歴史の具体的な場面を構成するモノやコトについてのさまざまな知識が得られるようになることをめざしている。

第3には、本データベースでは、それらのイメージについての語彙だけでなくて、その意味・機能の解説とリンクされており、それらのモノやコトのイメージ図版と連動して文献のリストが示されている。したがって、研究者のみならず、歴史教育で、あるいは市民にとっても、極めて有用な検索手段として活用されることを期待している。

⑸プロジェクト遂行の目的・意義

本プロジェクトは、日本史･日本文化の研究者による歴史のイメージ研究のための辞書･手段・道具の構築とその公開を目的としている。デジタル画像処理技術などの飛躍的発展という条件のもとで、歴史のイメージ研究のための辞書・道具を構築し、データベースとして公開していくことは、文献史料を中心とした従来の日本史･日本文化の研究に対して、新たな研究基盤を提供するものとなっていくであろう。また、歴史教育においても、歴史上のモノやコトのイメージとそれらについての語彙を学習できる環境を生み出していくことも期待される。現状では、入力データが服装・交通・職能などまだ一部の分野に限定されており、史料集の編纂・研究に十分に役立っているとは必ずしも言えないが、対象分野を順次拡大していくことによって、編纂や前近代史研究にも不可欠の道具となっていくと思われる。このような目的･意義をもつ「歴史絵引データベース」は、画像史料解析センターの設置目的と研究事業にふさわしい知識型画像データベースの一つであると考えている。

⑹作業遂行に関わる内容

①成果の公開方法および開始年度

歴史絵引データベース(2001年度公開)

②遂行経費の概要

歴史絵引データベース開発にあたり6年間にわたり供与を受けた総額は7,002千円である。内訳は下記のとおりである。

2001年度　2,790千円(歴史絵引データベースシステム開発費)
2002年度　2,714千円(歴史絵引データベースシステム改良費)
2003年度　898千円(トレース図作成費)
2004年度　300千円(入力経費)
2005年度　300千円(入力経費)

2006年度は、画像史料解析センター非常勤職員によるデータ入力のみ。

③作業実施の主体およびその支援体制

⑴に示したメンバーを主体とし、トレース画作成につき木下千春(日本画家)のご支援をいただいた。

④作業の流れ

〔画像データの生成〕

日本画家によるトレース画の作成。→研究支援推進員による画像のスキャン。
→データベースへの登載。

〔詳細検索・簡易検索用のメタデータの作成〕

非常勤職員による各種文字データの入力。→研究支援推進員によるデータベースへの登載。

⑺対象史料総量に対する現状データの量・位置づけ

歴史絵引データベースで構築しているデータは、詳細検索用文字データ約 29,300 件、画像データ 450 件となっている。この分量は、想定全総量のうちようやく 8 分の 1 程度ができあがった程度に過ぎないと判断している。

⑻残された課題・問題点

本データベースの構築には、モノやコトについての専門的知識が必要であり、そうした能力を有する画像史料を研究対象としている研究者は極めて限られているのが現状である。今後は、本研究所のスタッフだけでなく、外部の研究者との共同研究と共同作業を進めていく必要があり、そのための方策を考えていく必要がある。画像史料解析センターに置かれる共同研究員の制度は、こうした課題を遂行していく方策の一つでもあるが、全国的にも人材は限られているといわざるを得ない。そのため、全国的にも各種研究プロジェクトで組織化されてしまい、適任者を確保することも困難が伴う。本プロジェクトにおいても 2004 年度以降、この共同研究員を組織し得ていないのが現状である。今後は、広く関連分野の研究動向に目を配り、力量ある研究者を共同研究員として積極的に本プロジェクトに招聘することを目的意識的に追究する必要があると考える。

また、対象とする分野を逐次増やし、データの集積を進めるためには、トレース画とその画像デジタルデータの集積が不可欠である。トレース画の作成は人手も限られ、時間もかかることから、蒐集分野ごとの年次計画を策定し計画的にこの作業を進めることが必要と考えている。現在の本プロジェクトメンバーは、画像史料解析センターに配属される教員が加わっていないこともあり、年次計画の立案などの点でもこの面での強化も必要であろう。

さらに、詳細検索・簡易検索用のメタデータ作成についても、現在は非常勤職員によって進めているが、その進行を大幅に改善するためには、集中的に作業を行なうこと、そのための予算上の手当を行なう必要も課題として残されている。運営費交付金にもとづくセンター事業費が削減されていくなかで、外部資金の獲得などにより集中的に作業を進めることも課題の一つであろう。

システムの面の課題としては、データベース操作性の向上がある。「歴史絵引データベース」は画像からも語彙からも検索できるという特徴をもっているが、より使いやすいものへと改良することが必要である。これによって日本史学・歴史教育のための知識型データベースとして、ますます有用性を増していくことになると思われ、この点では外部利用者の評価をふまえて、改良を持続的に検討していくことも必要であろう。

⑼今後の展望・終了の見通し・要望

「歴史絵引データベース」は、対象とする分野を逐次増やすことが不可欠であり、その完成には多くの時間（年月）を要する。この作業を持続的に推進していくための体制作りと予

算の確保を続けてゆきたい。

⑽関係する研究報告・参考文献など

佐多芳彦「歴史絵引データベースの公開」（『センター通信』18 号、2002 年 7 月）

佐多芳彦「服装と服飾品の名付けをめぐって」（『センター通信』22 号、2003 年 7 月）

⑾ WEB による成果公開

①第 3 回外部評価以後の取り組み

第 3 回外部評価段階においては、データ生成の対象となる分野は服装関係分野のみで、詳細検索用の文字データ 13,171 件、画像データ約 150 件であった。その後、2003 年度に交通・職能関連分野のトレース画を 300 件作成し、2004 年度にトレース画から画像デジタルデータを 300 件生成した。また文字データについても、2003 年度に約 10,000 件、2004 年度に約 3,300 件、2005 年度に約 2,300 件、2006 年度に約 600 件のデータ生成を行なっている。

② 2006 年度リプレイスへの対応

新コンピュータシステムの移行に伴って、データベースの構造を他のデータベースと共通化し、新しい入力校正システムを整備し、新システム上で WEB 公開する体制を整えた。

3，荘園絵図プロジェクト

⑴プロジェクト担当者

（代表）黒田日出男（1998 ～ 2003 年度）、石上英一（2004 年度～）

（メンバー）稲田奈津子・井上聡・榎原雅治（釈文編中世三編纂責任者）・遠藤基郎・及川亘・加藤友康・川本慎自・菊地大樹・久留島典子・近藤成一・末柄豊・高橋慎一朗・高橋敏子（釈文編中世二編纂責任者）・高橋典幸・谷昭佳（技術）・鶴田啓・中村尚暁（技術）・西田友広・林譲（釈文編中世一編纂責任者）・伴瀬明美・藤原重雄・前川祐一郎・村井祐樹・村岡ゆかり（模写）・山田邦明（2004 年度まで）・山口英男（釈文編古代編纂責任者）・浅野啓介（RA、2005 年度）・新井重行（研究機関研究員、2003 ～ 2004 年度）・有富純也（RA、2003 ～ 2004 年度）・北村安裕（ RA、2006 年度より）・児嶋貴行（RA、2006 年度より）・佐々田悠（研究機関研究員、2005 ～ 2006 年度）・清水亮（同、2006 年度）・守田逸人（同、2007 年度より）

⑵プロジェクト開始年度（終了年度）

1998 年度～（継続中）

⑶ プロジェクトの基礎となる史料・対象

古代・中世の荘園絵図史料

⑷ プロジェクトの概要

１）『日本荘園絵図聚影』の編纂・刊行

史料編纂所では、1988 年度より、『日本荘園絵図聚影』の編纂・出版を行っている。本書は、古代・中世の荘園絵図及びそれに類する絵図（寺院伽藍図や社地図など）を、調査・撮影し、高精細写真版として収載して学界に提供する出版物である。荘園絵図は、時代が古代より中世末期に及ぶこと、地域が東北地方から九州地方に及ぶこと、所蔵者が正倉院事務所をはじめ寺院・個人など多方面にわたることなどから、出版計画を具体化し始めた 1979 年度より、特定の部門・室の担当出版物とはせずに（1993 ～ 1998 年度には、担当部室を特殊史料部門特殊史料第二室とした）、各研究部門の教員と史料保存技術職員を横断的に組織した研究編纂グループが担当してきた（「荘園絵図研究グループ」『東京大学史料編纂所報』30 号、1996 年 3 月）。1988 年度より 1996 年度までの出版（東京大学出版会より委託出版）は、次の如くである。

1988 年度　『日本荘園絵図聚影』三・近畿二

1993 年度　『日本荘園絵図聚影』二・近畿一

1994 年度　『日本荘園絵図聚影』一上・東日本一

1996 年度　『日本荘園絵図聚影』一下・東日本二

1997 年度に画像史料解析センターが設置され、1998 年度より、荘園絵図研究グループは画像史料解析センターの研究プロジェクト「荘園絵図プロジェクト」となり、荘園絵図の収集・研究と『日本荘園絵図聚影』の編纂・刊行を担当することになり、引続き⑹－①に示す出版を行った。

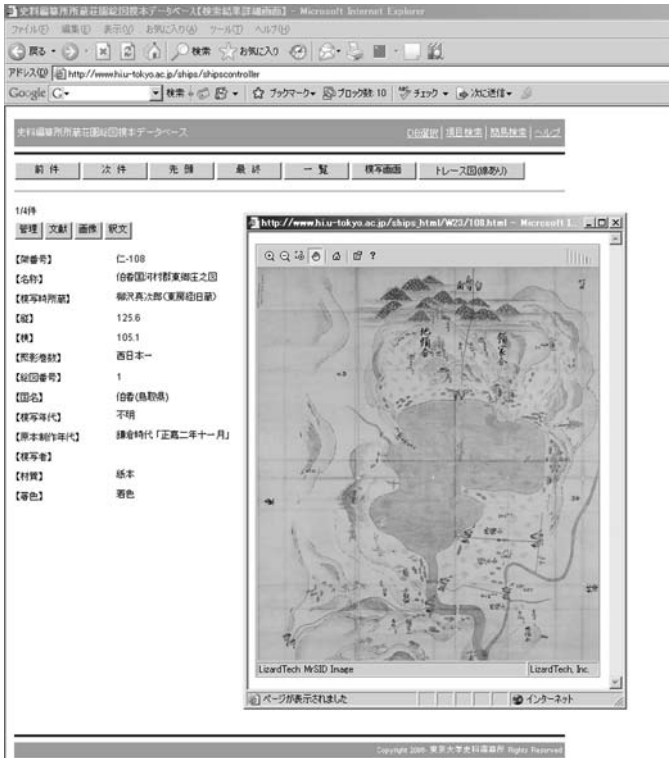
２)『日本荘園絵図聚影　釈文編』の編纂・刊行

2000年度に、本編終了後の『日本荘園絵図聚影　釈文編』(東京大学出版会より委託出版)の刊行を計画した。釈文編編纂のためには、それまでの蓄積に加えて、個別絵図の現地調査・原本調査・関連史料収集、絵図解読と釈文資料作成を行うことが必要とされた。そのために、新たに近世史専攻の教員や古代・中世史専攻の若手教員を担当者に加え、グループの強化を行った。また、2003年度から若手研究者(研究機関研究員・RA)の参加をもとめ、2004年度から史料保存技術室の模写･写真の専門家との協同を進めることにした。『日本荘園絵図聚影』釈文編刊行計画は、下記の如くである。

釈文編	古代編	2006年度刊行物
	中世編一(東日本)	2010年度刊行物(予定)
	二(近畿)	2013年度刊行物(予定)
	三(西日本)	2016年度刊行物(予定)

３)荘園絵図データベースの構築

『日本荘園絵図聚影』の本編の刊行完結に見通しが得られた段階で、荘園絵図研究の成果を公開するため、画像史料解析センターが関わる画像データベースの充実策の一環として、科学研究費基盤研究(B)「荘園絵図史料のデジタル化と画像解析的研究」(研究代表者 黒田日出男、2000～2001年度)により、「史料編纂所所蔵荘園絵図模本データベース」の開発を行い、2002年度より史料編纂所歴史情報処理システムのデータベースの一つとして公開している。東京大学史料編纂所が所蔵している絵画史料の模本のなかで、荘園絵図(荘園絵図及び寺社境内図)の模本は現在、約80点を数える。また、西岡虎之助氏蒐集荘園絵図模本コレクションも寄託されており、両者を合わせると、主要な荘園絵図の過半を模本で閲覧できる。荘園絵図模本には、既に原本が失われているものや状態が変化しているもの、原本の画像での閲覧が困難なものがあって、模本といえども貴重な史料である。ただし模本も、保存措置や、絵図の形状や大きさにより並べて比較することなどは難しく、利用方法は限られていたと言わざるを得ない。そこで、荘園絵図に関心のある研究者や市民にとり便利で役に立つ閲覧方法を実現するために、模本データベースを開発した。模本の高精細画像およびトレース図の閲覧を可能とし、書誌情報や釈文、参考文献情報など



を付す形で公開を始め、そののち地理情報の強化を図っているところである。

⑸プロジェクト遂行の目的・意義

本プロジェクトは、古代・中世の荘園絵図史料の収集・研究を推進し、『日本荘園絵図聚影』の継続刊行(2001年度まで)と同釈文編の編纂・刊行(2002年度より)を行う。あわせて荘園絵図模本画像をデータベース公開することで、『聚影』とあわせて、絵図研究の基礎的環境の整備に務めるものである。荘園絵図は、寺社や諸機関等の重宝であったり、法量が大きいなど、多くの場合、研究者の閲覧は制限されている。したがって、古代・中世史研究や地域研究にとって、荘園絵図の精細画像や調査成果に基づく構成・文字・画像に関する情報が共有される研究環境を作ることの意義は大きい。

また特殊光源装置などによる色彩情報研究や、３Ｄ地図ソフトを用いた荘園現地空間の復元研究といった新たな試みもすすめており、今後の調査のモデルを形づくるものと考えている。

⑹作業遂行に関わる内容

①成果の公開方法および開始年度

〔出版〕

1998年度　『日本荘園絵図聚影』四・近畿三

2000年度　『日本荘園絵図聚影』五上・西日本一

2001年度　『日本荘園絵図聚影』五下・西日本二　補遺編

〔研究会など〕

画像史料解析センター第１回研究集会「中世画像史料への展望－北から南から－」(2000年３月、金石文PJと共催)

『日本荘園絵図聚影　釈文編』古代ワークショップ　(2004年１月30・31日)

『日本荘園絵図聚影　釈文編』古代ワークショップⅡ(2005年１月28・29日)

『日本荘園絵図聚影　釈文編』古代ワークショップⅢ(2006年１月27・28日)

『日本荘園絵図聚影　釈文編』中世ワークショップⅠ(2006年２月17・18日)

『日本荘園絵図聚影　釈文編』中世ワークショップⅡ(2007年１月27・28日)

※2005年以降は、基盤研究(A)「荘園絵図の史料学とデジタル画像解析の発展的研究」と共催

〔データベース〕

史料編纂所所蔵荘園絵図模本データベース(2002年度公開)

②遂行経費の概要

10年間で計1928万円。千円以下切捨て。なお2000～2001年度、2004年度～は科研費を獲得した。

1997(平成11)年度　　141万円(撮影経費)

1998(平成10)年度　　265万円(撮影経費)

1999(平成11)年度　　174万円(撮影経費)

2000(平成12)年度　　176万円(撮影経費)

2001(平成 13)年度　　110 万円(撮影経費)
2002(平成 14)年度　　150 万円(撮影経費、リーダーシップ支援経費を含む)
2003(平成 15)年度　　322 万円(トレース作成、リーダーシップ支援経費を含む)
2004(平成 16)年度　　195 万円(トレース作成)
2005(平成 17)年度　　144 万円(トレース作成)
2006(平成 18)年度　　110 万円(トレース作成)

③作業実施の主体およびその支援体制

〔正確な釈文図作成のための体制〕

釈文図には、画面・画像の精密な模写(歪みの補正を含む)が必要である。そのために、日本画家である村岡ゆかり(史料保存技術室)及び東京芸術大学 OB・OG を中心とした日本美術専門家の協力を得て、画像のトレース図を作成している。また画像処理ソフトウエアにより文字を重ねて、精密な釈文図を作成する作業については、研究員ならびに東京大学出版会・平文社の協力を得ている。

〔科学研究費グループとの協同〕

プロジェクト推進のために、本プロジェクトメンバーを中核として次の 2 つの科学研究費補助金を取得し、連携・協同して事業を推進している。

＊基盤研究(B)「荘園絵図史料のデジタル化と画像解析的研究」(研究代表者 黒田日出男、2000 ～ 2001 年度。)

＊基盤研究(A)「荘園絵図の史料学とデジタル画像解析の発展的研究」(研究代表者 林 譲、2004 ～ 2007 年度。)

〔学界との協同研究の推進の試み〕

釈文編の編纂においては、古代・中世荘園絵図は、 8 世紀から 16 世紀までの時代の幅があること、荘園の所在地が東北地方から九州まで広がること、条里方格図から寺院境内図まで図様が多様であること、個別の荘園絵図についての研究の蓄積が多くあること、地域研究と密接な関連を有すること、利用する立場の研究者からトレース図等の仕様などについての意見を求める必要があることなどから、広く学界の研究成果を摂取すると共に、直接に多くの研究者との共同研究を進める必要がある。そのために、本プロジェクトの推進のために、次の 2 つの方策を採用した。

1)客員教員招聘

画像史料解析センターに要請し、2004 ～ 2005 年度には古代の東大寺開田図研究のために富山大学鈴木景二助教授(当時)を、2006 ～ 2007 年度には中世荘園絵図研究のために国立歴史民俗博物館青山宏夫准教授を客員助教授(准教授)として招聘することができた。

2)研究集会の開催

荘園絵図研究の専門家から、直接に個別荘園絵図についての助言を得るとともに、釈文編のあり方についての意見を求めるために、(6)－①に挙げた研究集会を開催している。

④作業の流れ

〔絵図聚影釈文編の編纂〕

代表および各冊責任者の統括のもと、メンバーが担当する絵図について研究を進め、トレース図作成担当者とともに協議を重ねながらトレース案を作成する。これにもとづいて原本調査を実施し、トレース図を確定させるとともに、釈文・色彩・書誌といった情報の確認を行う。トレース図に釈文情報を張り込み、その他必要な情報などを加味し、版下を作成し、校正を重ねる形で蓄積を進めている。

〔データベースの構築〕

史料編纂所所蔵荘園絵図模本の撮影を実施し、釈文・トレース図・書誌情報・関連文献情報などを施してデータベースにアップしている。日常的には各種研究員が関連文献情報、原本情報などの更新を行っている。また2006年度より地理情報を付加する目的で、電子地図をベースとして位置比定を加えた平面図、３Ｄ立体図、鳥瞰ムービーなどの作成をすすめており、逐次模本情報にリンクの予定となっている。

⑺対象史料総量に対する現状データの量・位置づけ

古代・中世の荘園絵図を図版で収録する『日本荘園絵図聚影』本編については既述のように、刊行を終了している。ただし補遺として収録すべきものが発見されており、釈文編編纂の作業と平行して調査を継続する必要がある。釈文編については、古代編が完了した段階で、中世編があと3冊刊行される予定である。データベースは、現在収録点数30点弱であるが、本プロジェクト終了までに倍増させることを計画している。

⑻残された課題・問題点

次期中期計画における出版計画において、『日本荘園絵図聚影　釈文編』中世の3冊を計画通りに刊行するために、年次計画に基づき荘園絵図の個別調査と釈文図の作成を着実に進める必要がある。平行して調査方法の平準化やスキルの向上に務めてゆかねばならない。またデータベースについては、対象絵図模本の拡充ならびに各種情報の充実を継続的に行う必要がある。技術的な課題としては、高精細画像表示のためのシステムが、史料編纂所データベースシステムのなかに位置づけられずリプレイスされてしまったことがある。絵図以外にも用途があると考えられ、所としての更新・保守の対応が必要と考えている。

⑼今後の展望・終了の見通し・要望

『日本荘園絵図聚影』釈文編の中世3が終了する2016年度をもって完了の予定である。当該年次までにデータベースの拡充・改変も一応の完成を目指すものである。

⑽関係する研究報告・参考文献など

井上聡「西岡コレクションと史料編纂所所蔵模写絵図」（『センター通信』6号、1999年7月）

黒田日出男著『中世荘園絵図の解釈学』（東京大学出版会、2000年7月）

井上聡「西岡虎之助氏蒐集コレクション目録」（『センター通信』11号、2000年10月）

井上聡「橘中村文書内の荘園絵図について」（『センター通信』14号、2001年7月）

清水亮「金沢文庫所蔵「荘園図」位置比定の試み」（『センター通信』14号、2001年7月）

科学研究基盤研究(B)研究成果報告書『荘園絵図史料のデジタル化と画像解析的研究』(研究代表者 黒田日出男、2002年3月)
黒田日出男「称名寺絵図のアポリアと解決(上・下)—「称名寺絵図並結界記」の分析・読解—」(『金沢文庫研究』307・308、2001年2月・2002年2月)
井上聡「宇佐宮仮殿地判指図」に関する基礎的考察」(鎌倉遺文研究会編『鎌倉期社会と史料論』東京堂出版、2002年5月)
井上聡「肥前国長島荘高瀬差図の調査報告」(『センター通信』18号、2002年7月)
高橋敏子「備中国新見荘地頭方政所屋指図について」(『センター通信』24号、2004年2月)
林 譲「荘園絵図の史料学とデジタル画像解析の発展的研究」(日本歴史693号、2006年2月)

⑾ WEBによる成果公開

①第3回外部評価以後の取り組み

データベースの基礎史料となる模本の点数は供与開始以来増加していない。『日本荘園絵図聚影』釈文編の刊行を踏まえ、古代絵図に対象の拡大を予定している。参考文献情報の逐次更新、および2007年度より地理情報の追加を行っている。

② 2006年度リプレイスへの対応

リプレイスに伴い高精細画像を供与するソフトが更新されなかった。絵図グループ及び関係科研で、更新・保守に責任を持つのか、所のシステムとして維持してゆくのか曖昧だったことによる。今後は所内の意見集約をはかり、所側に要望をしてゆかねばならない。データベース構造の更新にあたっては、入力・更新のシステムに不備が発生、その解消にかなりの時間を要した。また公開画面についてもフレームを用いた画面の使用ができなくなったため、改変を余儀なくされた。移行に関する関係者との打ち合わせが不充分であったため、諸問題の解決に半年以上が費やされ、データ更新や新規の機能追加に支障をきたしてしまった。

4，南葵文庫国絵図プロジェクト

⑴プロジェクト担当者

（代表）黒田日出男

⑵プロジェクト開始年度（終了年度）

1998 年度～ 2003 年度

⑶プロジェクトの基礎となる史料・対象

東京大学附属図書館所蔵南葵文庫中の諸々の絵図のうち、江戸幕府国絵図と呼ばれる大型国絵図。

⑷プロジェクトの概要

本プロジェクトの淵源は、土田直鎮氏を代表者とする科学研究費「現存古地図の歴史地理学的研究」に遡る。すなわち同科研では、古代・中世における荘園絵図に対して、近世を代表する絵図として江戸幕府国絵図を取り上げ、その全国的な所在調査と研究を行ったのである。それに従事した黒田は、それ以後、江戸幕府国絵図の調査・研究を継続的に行うに至った。

画像史料解析センターの発足に伴い、同センターの一員となった黒田は、継続的に実行できる研究プロジェクトの一つとして、東京大学附属図書館所蔵南葵文庫中の諸々の絵図のうち、江戸幕府国絵図と呼ばれる大型国絵図に関する継続的な調査・研究を提起し、一人でその作業にあたったうえで『センター通信』に研究成果を連載した。

⑸プロジェクト遂行の目的・意義

今では周知のことになっていると思われるのだが、同文庫中の大型国絵図は、近世初期の江戸幕府国絵図群であり、その多くが同文庫にしか現存しないと思われる慶長国絵図・寛永国絵図の写図であった。その貴重かつ重要性は明瞭であろう。しかし、これらの大型国絵図のそれぞれがどのような性格の国絵図であるかは、一部を除き、これまで明らかにされてこなかった。しかも、東京大学附属図書館の大型絵図類を閲覧するためのスペースは狭く、これら南葵文庫国絵図群を熟覧し、詳細な検討を加えることは、外部の研究者にとって極めて困難であったから、同文庫中の大型絵図類についての調査報告を意図したのである。これは東京大学に勤務する研究者がなすべき責務の一つと言うべきであろう。

都合二四回続けた報告は、『センター通信』のスペースの制約によって一回ごとの報告が短いものとなり、周到な記述とは言い難いものとなった。その点は十分に自覚しているが、そもそも本プロジェクトの狙いは、近世初期の国絵図研究が各地で進められるようになるための「呼び水」となることであったから、そうした国絵図に関する詳細な研究が出てくるための刺激としては、適当な短さと粗さであったと言うべきであろう。事実、例えば、野積正吉氏「南葵文庫蔵越中・加賀・能登国絵図について」（『富山史壇』150 号、2006 年 7 月）のような論文が現れている。黒田の指摘では不十分だと言うのである。期待していた仕事であり、批判は甘受しておくことにしよう。

⑹作業遂行に関わる内容

①成果の公開方法および開始年度

調査成果を『センター通信』(1～24号)に「南葵文庫の江戸幕府国絵図」として連載した。同文庫の一点一点の国絵図の性格については『センター通信』の各号に、また、「南葵文庫国絵図」の全体的特徴・性格については「南葵文庫の江戸幕府国絵図(24完)」の「結びにかえて」において、要点を八つにまとめてある。

②遂行経費の概要

経費なし。

③作業実施の主体およびその支援体制

黒田日出男

④作業の流れ

基本となる作業は、附属図書館の許可を得て「南葵文庫国絵図」を数点借り出しては、本所の大会議室においてそれらを開き、全体と細部の観察及びその結果のメモを取る作業の繰り返しであった。その作業メモをもとにして、関連する県・市・町・村史や『寛永諸家系図伝』『寛政重修諸家譜』等の系譜類等によって検討を加えつつ、各国絵図の特徴・性格を確かめていったのである。したがって経費は原則として発生せず、しかも一人での作業が基本なので、時間面でも自由な検討作業の繰り返しとなった。

その調査･研究の結果は、「南葵文庫の江戸幕府国絵図」と題して、年4回発行される『センター通信』の毎号に発表し、黒田の停年退官する時点で発行された『センター通信』24号(2004年2月)をもって本作業を終了させた。

⑺対象史料総量に対する現状データの量・位置づけ

⑻を参照のこと。

⑻残された課題・問題点

「南葵文庫国絵図」についての検討は終わったかと言えば、勿論、否である。大型国絵図についてのみ、一応終了したに過ぎない。黒田が「篠原図」と呼んできた一群の小型国絵図が、まだ同文庫中にある。それらについては、すでに川村博忠氏による部分的な紹介があるが、本センターのスタッフによって深い検討・研究がなされてもよいだろう。また、同文庫には研究史上とりわけ重要な日本図や版本の絵図類もたくさんあり、それらも本センターによる検討・紹介がなされていくことが期待されているようにも思われる。そもそも南葵文庫とは、一体、何者なのであろうか。国絵図・日本図そして他の絵図類の調査・検討は、同文庫の本格的な検討という課題を必然的に呼び起こす。

同文庫については『南葵文庫蔵書目録』がある。この目録の利用者には周知のことだが、そこに書かれているにもかかわらず、東京大学附属図書館には寄贈されなかった書籍や絵図が数多く存在するのである。これらの絵図や書籍の調査・研究もまた大きな検討課題と言うべきであろう。

⑼今後の展望・終了の見通し・要望

⑻を参照のこと。

⑽関係する研究報告・参考文献など

⑹－①に記した通り。

5，洛中洛外図屏風プロジェクト

⑴プロジェクト担当者

（代表）黒田日出男（1998 ～ 2003 年度）、宮崎勝美（2004 ～ 2005 年度）

（メンバー）藤原重雄・山口和夫・及川亘・村岡ゆかり・佐多芳彦（研究支援推進員）

⑵プロジェクト開始年度（終了年度）

1998 年度～ 2005 年度（現在休止中）

⑶プロジェクトの基礎となる史料・対象

現在 100 点以上伝存が確認されている洛中洛外図屏風を研究対象とする。本プロジェクトではそれらのうち、東博模本洛中洛外図屏風と林原美術館所蔵洛中洛外図屏風の 2 点を主要な研究素材として取り上げた。

⑷プロジェクトの概要

１）東博模本の研究・模写作成

東博模本は 16 世紀に成立した初期洛中洛外図屏風と呼ばれる諸作品の研究資料として重要な位置を占めるものである。景観年代は 1540 年代末～ 50 年代頃、作者は狩野元信周辺の画家が想定されている。同模本は現状まくり 11 幅で、六曲一双の原本の一扇分に相当する 1 幅がすでに失われている（下京隻第五扇）。江戸時代に淡彩で描かれたたもので、原本の細密な描写や彩色の記録に配慮して制作された模写であるとみることができる。同模本の画像研究は黒田と藤原が担当し、これと並行して 1999 年度からは史料保存技術室村岡による復元模写を実施し、史料編纂所の史料集発刊 100 周年を記念する特別展（東京国立博物館「時を超えて語るもの」2001 年 12 月～ 2002 年 1 月）に出品した。

２）第二定型洛中洛外図屏風の研究

初期洛中洛外図屏風についてはこれまで多くの研究成果が蓄積されているが、それに対して江戸時代に入ってから制作された第二定型と呼ばれる洛中洛外図屏風は、点数的には現存作品の大半を占めているにもかかわらず、本格的な研究がなされて来なかった。そこで本プロジェクトおよび科学研究費基盤研究（A）「第二定型洛中洛外図屏風の総合的研究」（研究代表 黒田日出男、2002 ～ 2004 年度、以下「黒田科研」と記す。）による共同研究では、①第二定型洛中洛外図屏風を多くの研究者が活用できる研究基盤・環境をつくり、②それを素材とした図像分析の方法を創出し、③さらにそこに描かれた都市景観、建築、人々の姿、行事などを分析・読解することによって、近世都市表現の総合的研究をめざした。具体的対象としては、林原美術館の全面的な協力を得て同館所蔵本（林原本）を主要な研究素材に定め、2002 年度に交付が決まった上記黒田科研と連携し、多数の所外研究者の参加を得て研究を進め、画像閲覧とデータ入力作業のためのシステム「画像史料研究プラットフォーム」を作成した。

⑸プロジェクト遂行の目的・意義

いわゆる洛中洛外図屏風は、中世～近世以降期の京都を全体的に描いた希有な絵画史料であり、それらの分析を通じて、日本中近世史研究、美術史研究、都市・建築史研究、そ

して風俗史・職人史・家具史など、様々な分野の研究を進めることができる。

⑹作業遂行に関わる内容

①成果の公開方法および開始年度

東博模本復元模写の公開（於東京国立博物館・史料集発刊 100 周年記念特別展、2001 年 12 月～ 2002 年 1 月）

②遂行経費の概要

経費は、その大半を黒田科研に拠ったが、2004 年度にセンタープロジェクト経費から高精細デジタル化経費約 112 万円と研究集会開催に伴う出張旅費の一部約 28 万円を配分された。

③作業実施の主体およびその支援体制

プロジェクトメンバーおよび科研メンバー・各種研究員

④作業の流れ

〔東博模本の研究・模写〕

当初は忠実な現状模写を意図していたが、史料編纂所の史料集発刊 100 周年を記念する特別展（東京国立博物館「時を超えて語るもの」2001 年 12 月～ 2002 年 1 月）に出品すべく、金地・金雲・彩色等を考証・復元した屏風仕立ての復元模写となった。彩色については、初期洛中洛外図屏風諸本の彩色・技法を参考にする一方で、近世の技法書にある混色法をも比較検討してサンプルを作製し、実際に使用する絵の具を決めていった。その際、彩色のパターン性を意識し、全体の色のバランスを配慮した。また模本では省略されたとみられる服装の紋様なども、諸本を参考にして描き加えた。この復元模写は、展示後に手直しをして、2002 年 8 月に完成した。

〔第二定型洛中洛外図屏風の研究〕

林原美術館所蔵洛中洛外屏風一双を、8 × 10 判カラーポジフィルムにより各扇 2 枚ずつ、全部で 24 枚撮影し、それをさらに高精細デジタル画像化した。さらに高精細画像閲覧とデータベース構築・利用の双方の機能を合わせもった「画像をみるための道具」のシステムの開発に取り組んだ。具体的には、㈱ PFU の高精細画像ビューワ Gigaview をベースとして、画像閲覧とデータ入力作業のためのシステムをつくり、これを「画像史料研究プラットフォーム」と名付けた。また蓄積されたデータを自由に検索できるシステムを開発し、これには「ピクショナリー（PICTIONARY）」という名前を付けている（picture と dictionary を併せた「絵引き」の意の造語）。

これらのシステム開発と並行して、研究分担者・協力者による画像分析、データベース構築作業を進めた。本研究には最終的に 37 名という多数の研究者の参加・協力を得たが、分析・データ作成作業は全体を都市史・建築史・社会史・美術史の 4 つのグループに分け、それぞれの視点・手法によって行った。分析の手段のひとつとして、屏風に描かれた京都の都市景観全体が金雲によって区分されていることに着目し、それぞれの区分を＜かたまり＞と呼ぶことにして、それを単位としてデータを入力することにした。設定した＜かたまり＞は、右隻 63、左隻 47 である。

個々のデータ入力には、Gigaview がもっていたプロファイルの機能を手直ししたものを利用した。これは描かれている事物に属性情報を与える機能であり、画面に点や線、矩形などのターゲットを自由に設定し、その座標に同期するように同じ画面で属性情報を記入するインターフェースがポップアップするものであった。これを応用・改良して、屏風の中に描かれた建物・人物・風景などの画像情報を個々に選んで、上記のグループごとにデータを書き込んでいった。科研終了時点までに蓄積されたデータは、約 3600 件、容量にして約 9 メガバイトに及んでいる。

こうして生成されたデータを自在にキーワード検索するために、これもグループごとにキーワードツリーを設定した。都市や建築、社会史や美術史に関する用語をあらかじめ準備することにより、用語の予備知識がなくとも自由に検索できるようにすることを実現したところである。

⑺対象史料総量に対する現状データの量・位置づけ

林原本洛中洛外図屏風の高精細画像データおよび研究データベースは、上記のように十分蓄積されているが、いまだ公開には至っていない、

⑻残された課題・問題点

高精細画像データおよび研究データベース、および「画像史料研究プラットフォーム」を公開利用に供するための作業が課題として残されている。

⑼今後の展望・終了の見通し・要望

本プロジェクトは諸事情により 2005 年度をもって活動を中断したが、同年には元代表者黒田（現・立正大学教授）を中心とする科学研究費基盤研究（S）「中近世風俗画の高精細デジタル画像化と絵画史料学的研究」（2005 年度～）が開始されており、それには山口・藤原・宮崎の 3 名が研究分担者として参加している。この共同研究は、「第二定型洛中洛外図屏風の総合的研究」の成果を継承したものであり、林原本をはじめとする洛中洛外図屏風諸本に関する研究やデータ作りも引き続き行われている。こうした共同研究と連携しつつ、いずれ時機をみて本プロジェクトの活動も再開したいと考えている。

⑽関係する研究報告・参考文献など

村岡ゆかり「洛中洛外図屏風（東博模本）復元模写制作」（『東京大学史料編纂所研究紀要』13 号、2003 年 3 月）

科学研究費基盤研究（A）成果報告書『第二定型洛中洛外図屏風の総合的研究』（2005 年 3 月）

大塚活美「林原美術館本洛中洛外図屏風の構図と主題と発注者―室町期・江戸期の洛中洛外図屏風との関係を通して」

藤原重雄「上杉本『洛中洛外図屏風』の季節外れの景物―黒田日出男『謎解き洛中洛外図』Ⅳ章・補注―」

山口和夫「池田家旧蔵林原美術館本『洛中洛外図屏風』の内裏と公家町―注文主・用途・制作時期についての一考察―」

高屋麻里子「町屋と土蔵の変遷―林原本『洛中洛外図屏風』の画像史料研究プラット

フォームによる詳細閲覧より―」
高屋麻里子「洛中洛外図屏風諸本の内裏表現の 3D － CG を用いた模式化による比較」
大澤泉・加藤裕美子「林原本の貼紙について」
大澤泉・加藤裕美子「第二定型諸本の分類における基礎的考察―ランドマークの比較を中心に―」
加藤裕美子・大澤泉「洛中洛外図諸本におけるランドマークの検討」
小川慧里子「第二定型林原家本洛中洛外図屏風に描かれた布帛類についての研究」
山口和夫「寛永三年二条城行幸行列が描かれた『洛中洛外図屏風』―越前市武生公会堂記念館本について」（『センター通信』36 号、2007 年 1 月）

6，内務省引継地図および関連史料についての研究プロジェクト

⑴プロジェクト担当者

(代表)杉本史子

(メンバー)横山伊徳・小野寺淳(茨城大学教授・センター共同研究員)・松方冬子(2000年度)・近藤成一・杉森玲子(2006年度～)・井上聡・千葉真由美(センター共同研究員、2006年度)

⑵プロジェクト開始年度(終了年度)

2000年度～（継続中）

⑶プロジェクトの基礎となる史料・対象

本所所蔵「旧内務省引継地図」「内務省地理局文書」

⑷プロジェクトの概要

(1)文字史料群・絵図史料群を、相互有機的に整理・分析し、公開した。

(2)史料群としての性格を、科学研究費基盤研究(C)『内務省地理局における地図蓄積＝管理構造の復元的研究』(代表者 横山伊徳、2002～2003年度、以下「横山科研」と記す。)と、共同研究した。

(3)個々の地図についての現地調査・原本調査を含む詳細な分析を、科学研究費基盤研究(C)「八瀬童子の空間認識と歴史意識―日常・非日常的空間への歴史地理学的アプローチ」(代表者 小野寺淳、2003～2004年度、以下「小野寺科研」と記す。)と、共同研究した。

(4)さらに、本研究の5年間の成果をふまえ、対象を全国規模にまで広げた、科学研究費基盤研究(A)「地図史料学の構築―前近代地図データ集積・公開のために」(代表者杉本、2006～2009年度)をスタートさせている。

⑸プロジェクト遂行の目的・意義

明治期、近代的歴史学確立の模索のなかで、歴史と地理は不可分のものとして検討されてきた。本研究は、この近代的行政・学問形成の揺籃期に収集・作成された地図とそれに関係する文字史料を整理・分析するものであり、近代歴史学再検討のための基礎研究として位置づけられる。また、史料編纂所における編纂に参照される蔵書がどのように形成されてきたか、その史料としての質を解明する作業でもある。

⑹作業遂行に関わる内容

①成果の公開方法および開始年度

〔WEB公開〕

「内務省引継地図」目録

本プロジェクトの前段階として整理した。その経過・公開については、杉本史子「東京大学史料編纂所所蔵「内務省引継地図」とその公開について」(『センター通信』6号、1997年7月)

「内務省地理局文書」目録

整理の経過・公開については、杉本史子「地理編纂と歴史編纂『内務省引継地図』『内務

省地理局文書』をめぐる覚書」（科学研究基盤研究(C)成果報告書『内務省地理局における地図蓄積＝管理構造の復原的研究』代表者・横山伊徳、2004年3月）

〔所内試験公開〕

地図・絵図所在情報アンケートデータベース

〔公開研究集会〕

・画像史料解析センター研究集会「八瀬童子の空間認識と歴史意識」（2003年度、小野寺科研と共催）

・宝永五年山門結界裁許裏書絵図に関する現地報告会（2005年3月7日八瀬小学校にて開催）

・研究会「地図と認知論」（2005年2月）／研究会「文字認知／テクスト理解と脳機能」（2005年3月）／研究会「草紙とその出版・流通・統制」（2005年5月）、いずれも国立民俗学博物館・共同研究「テクスト学の構築にむけて」（代表・国立民族学博物館助教授・齋籐晃）東京グループと共催

③遂行経費の概要

本プロジェクト遂行にあたり供与された経費は7年間で約347万円である。年度別の内訳は下記のとおりとなる。

2000年度　約54万円（焼きつけ購入、データ作成、会議費）

2001年度　約20万円（目録作成・データ入力経費）

2002年度　約59万円（マイクロスコープ購入、フィルム・焼きつけ購入、リーダーシップ支援経費を含む）

2003年度　約47万円（焼きつけ購入、フィルムスキャン、データ入力、フラッシュメモリ購入）

2004年度　約63万円（焼きつけ購入、データ入力、フィルムスキャン、DVD-RW購入）

2005年度　約104万円（所内公開用データベース発注、フィルム購入、焼きつけ購入、データ入力、DVD・HDD他購入）

2006年度　なし。

④作業実施の主体およびその支援体制

本プロジェクトメンバー、(4)に掲出した各科学研究費補助金の研究分担者・研究協力者、学術研究支援員、研究機関研究員

⑤作業の流れ

〔2000年度〕①「内務省引継地図」関連文字史料の撮影、②京都において「内務省引継地図」中の模本の原本および現地調査、③研究会の開催

〔2001年度〕①旧内務省地理局地誌課関係史料について目録をもとに、整理作業を行った。②内務省引継史料未整理分について、整理した（詳細目録で400点以上）。③内務省引継地図中の模写図の原本調査を陽明文庫において行った。

〔2002年度〕横山科研と合同して、①旧内務省地理局所蔵絵図および関係史料の収集・復元、②「内務省引継地図」の史料的検討（南葵文庫・内閣文庫所蔵国絵図との比較、マイクロス

コープによる紙質・顔料分析等)、③大型絵図撮影技術の検討、を実施した。
〔2003年度〕①「内務省引継地図」のうち135点を撮影・デジタル化、②「内務省引継史料」関係文書の整理、③総合研究博物館地図調査(伊能大図調査・山崎文庫他、博物館所蔵地図調査)、④画像史料解析センター研究集会「八瀬童子の空間認識と歴史意識」の開催、⑤展示会(木展の開催)
〔2004年度〕小野科研と合同し、①「内務省地理局文書」目録データを史料編纂所特殊書蒐として公開を開始した。②「内務省地理局文書」文書の撮影フィルムの入架、③内務省引継地図中の模写図についての検討、③地図所在情報の収集を行った。
〔2005年度〕①内務省引継地図中の模写図についての現地調査、②内務省地理局文書」デジタルデータ修正、③国立公文書館所蔵国絵図との比較検討、④「古地図・絵図所在情報アンケートＤＢ」の公開、⑤工学部所蔵佐渡金山絵図の調査、⑥研究会の開催
〔2006年度〕①京都府立総合資料館における明治期京都府の地誌編纂事業に関わる簿冊史料調査、②国立公文書館所蔵国絵図スキャン作業、③内務省引継絵図の調査

⑺対象史料総量に対する現状データの量・位置づけ

判明している史料の整理はほぼ完了したが、(８)に記述する課題が残されている。

⑻残された課題・問題点

本所以外の、内務省地理局の史料を引き継いでいる機関の調査、全国に散在する関係資料の調査が残されている。また、赤門倉庫に収蔵されている史料のなかに関連資料が残されている可能性がある。

⑼今後の展望・終了の見通し・要望

2006～2009年度は、前掲科学研究費「地図史料学の構築」とともに全国的な視野からの検討を行い、同科研で得られたデータから、2010～2012年度の3年間、内務省引継地図の関連資料・関連地図の再検討を行い、研究を完成させたいと考えている。

⑽関係する研究報告・参考文献など

千葉真由美「内務省引継地図」における地図史料の収集・整理」(『東京大学史料編纂所紀要』10号、2000年)／杉本史子「「宝永五年山門結界裁許裏書絵図」をめぐって(1)」(『センター通信』12号、2001年)／内務省引継地図プロジェクト「「宝永五年山門結界裁許裏書絵図」をめぐって(2)」(同13号、2001年)／内務省引継地図プロジェクト「「宝永五年山門結界裁許裏書絵図」をめぐって(3)」(『センター通信』16号、2002年)／小野寺淳「「宝永五年山門結界裁許裏書絵図」をめぐって(4)―八瀬・比叡山フィールドノートより」(『センター通信』17号、2002年)／杉本史子「「宝永五年山門結界裁許裏書絵図」をめぐって(5)」(『センター通信』26号、2004年)／村岡ゆかり「「八瀬之図」「宝永五年山門結界絵図」「老中連署山門結界絵図」トレース図および色料推定」(『センター通信』26号、2004年)／千葉真由美「皇国地誌編纂過程における地図目録と地図主管の移動」(『東京大学史料編纂所紀要』14号、2004年)／千葉真由美「比叡山踏査報告―山門古道を歩く―」(『センター通信』33号、2006年)

⑾ WEB による成果公開

①第 3 回外部評価以後の取り組み

地図・絵図所在情報アンケートデータベースの所内公開。

7，玉ものまへプロジェクト

⑴プロジェクト担当者

（代表）藤原重雄

（メンバー）井上聡・金子拓・村岡ゆかり

⑵プロジェクト開始年度（終了年度）

2000年度～2003年度

⑶プロジェクトの基礎となる史料・対象

本所所蔵島津家文書『玉ものまへ』

⑷プロジェクトの概要

当該本の調査・撮影・公開・研究。

⑸プロジェクト遂行の目的・意義

史料集発刊100年記念展の準備過程で、本所所蔵の島津家文書のなかに保存良好な奈良絵本が存在することを知った。そのころ盛んであった大学図書館系の貴重書デジタル公開に刺激を受け、所蔵機関としての責務と代表者個人の絵画史料研究･IT学習の素材として、調査から公開までのひととおりの作業を試みることにした。島津本『玉ものまへ』は、2002年度に島津家文書が一括で国宝に指定されたことにより、結果的には全国的に珍しい国宝の奈良絵本ということになる。

⑹作業遂行に関わる内容

①成果の公開方法および開始年度

WEBは2007度より公開。

②遂行経費の概要

執行経費の総額は、約55万円。年度別の内訳は下記のとおり。

2000年度　22万円（撮影経費、デジタル変換経費）

2001年度　10万円（紙焼費用）

2002年度　20万円（翻刻・HTML作成費）

2003年度　 3万円（消耗品費）

④作業実施の主体およびその支援体制

⑤にまとめて記す。

⑤作業の流れ

業務内容は以下のとおり。まず原本の調査を行うと同時に、撮影の有無を確認した。全冊の撮影はカラーマイクロでなされていたので、そのフィルムからデジタルデータを生成した（Jpeg）。挿絵については新規に4×5フィルムで撮影し、高精細のデジタル化を施した（MrSID）。フィルムは図書室に入架し、紙焼き写真も作成した。本文については翻刻をおこない（校正は国文学専攻の大学院生）、先行研究の収集など作品研究を試みた。さらに、奈良絵本を中心とする貴重書画像あるいは図録・目録類のWEB公開（電子展示・デジタルライブラリー）の諸事例の検索し、その方法などを比較検討した。これらを素材に、

充分な出来ではないが、HTML によるギャラリーのデザインを試作した。

⑺対象史料総量に対する現状データの量・位置づけ

作業は完了した(ただし、出版をするには詞書部分の写真がやや不充分)。

⑻残された課題・問題点

MrSID で作成した精細画像ファイルは、ライセンスの移転やサーバの関係などで、事実上、所内での利用となっている。HTML によるギャラリーは、画像サイズを固定したことやプリントアウト時の不都合などで試作版にとどまり、所蔵史料目録データベースから提供する Jpeg 画像と並立する格好になっている。

⑼今後の展望・終了の見通し・要望

大学図書館系の貴重書デジタル公開は、このところひと段落したとの印象がある。もの珍しくなくなったためインパクトが小さくなったこともあるが、公開の期待される史料が出尽くしたということではなく、むしろ大学予算の逼迫やリプレースの際のシステムの安定的な移行など点で、課題が多いものと推測される。また業者サイドの働きかけが、博物館・美術館所蔵品の画像提供サービスをも請負う形態などへ重心が移り、囲い込み競争が始まりつつある。こうした状況下で、むしろ大学・図書館といった機関にあっては、所蔵する文化財は積極的に公開して、所蔵品の画像から高額の利用料を徴収する方向性とは、別の流れを生み出してゆく必要があるのではないかと愚考する。収益と資本の力に屈して所蔵品の「切り売り」が制度化し進行する流れは止めようがないかもしれないが、そこで窒息するのは学問そのものであろう。史料編纂所のデータベースシステムの有用性に関して贅言を弄する必要はないが、一般利用者(のみならず所内 IT 落伍者)にとって不親切な面がある。加工を施せば提供できる視覚的な素材を本所では持っている。システム設計というより、WEB デザインの観点を取り込んでいってもよい。前近代日本史情報国際センターとの業務分担関係を検討しつつの課題となろう。

⑽関係する研究報告・参考文献など

藤原重雄「史料編纂所島津本『玉ものまへ』について」(『センター通信』11 号、2000 年)

『DLI2006 プログラム』(Association of Pacific Rim Universities, "Distance Learning and the Internet", 2006 年 11 月 8 ～ 10 日、東京大学。本所委員・本郷恵子)

⑾ WEB による成果公開

①第 3 回外部評価以後の取り組み

「島津本『玉ものまへ』ギャラリー〔試作版〕」(http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/personal/fujiwara/tamamo/index.html)

藤原重雄「リンク集　デジタル奈良絵本」(http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/personal/fujiwara/naraehon-library.html)の公開。

8，大規模開発新田絵図プロジェクト

⑴プロジェクト担当者

（代表）久留島浩（2002 年度、客員教授、国立歴史民俗博物館）、保谷徹（2003 ～ 2004 年度）

（メンバー）青山宏夫・高橋一樹・宮田公佳（以上国立歴史民俗博物館）・井上聡

⑵プロジェクト開始年度（終了年度）

2002 年度～ 2004 年度

⑶プロジェクトの基礎となる史料・対象

近世の巨大新田開発に関わる絵図・史料。特に神田英央氏所蔵（現、新潟県新発田市大字大中島）の絵図・文書類を対象とした。

⑷プロジェクトの概要

近世の巨大新田開発のうち代表事例である潟湖開発に対象を定め、開発に関わる絵図および史料の分析・調査・撮影を行い、目録および史料画像を添付した DVD を作成した。

⑸プロジェクト遂行の目的・意義

近世巨大新田の開発の過程やそれに伴う様々な事象を考えるうえで絵図は不可欠の検討素材である。しかし詳細な描写をもつ情報量の多い地図は、一般的に巨大で、取り扱いが難しく調査・撮影も容易でない。そこで本プロジェクトでは、こうした絵図史料の調査・撮影方法の確立を目指し、越後国蒲原郡紫雲寺潟の開発に関与した神田家所蔵史料について調査を実践した。その結果、文書目録とデジタル画像をリンクした DVD の作成や、大型絵図撮影のための装置の開発、撮影画像の合成実験を行い、デジタル時代に対応した調査方法および新たな媒体を利用した成果公開を模索することができた。なお本プロジェクトの遂行にあたっては、久留島が参加していた総合研究大学院大学の共同研究「前近代日本における景観の形成と変容に関する総合的研究」（研究代表者 青山宏夫、1999 年 11 月～ 2002 年 3 月）の成果を前提とした。

⑹作業遂行に関わる内容

①成果の公開方法および開始年度

画像史料解析センターと国立歴史民俗博物館の共編にて『神田家文書目録』（2005 年 3 月）を刊行した。この目録は、神田家所蔵文書のほぼ全点を収めるとともに、主要な史料については添付の DVD にデジタル画像を収録している。

②遂行経費の概要

本プロジェクトは、画像史料解析センターより執行経費として 18.8 万円（2002 年度）、15 万円（2003 年度）、70 万円（2004 年度）の計 103.8 万円を供与された。その使途としては、2002 年度に「紫雲寺潟絵図」のトレース作成を行い、2003・2004 年度分にて目録の刊行を実施した。ほかに出張費用として旅費および共同研究員等旅費を与えられた。また財団法人福武学術文化振興財団助成研究「巨大絵図・地図の現地調査方法とデジタル化に関する研究」（研究代表者 久留島浩、2003 年度）より多大な援助を仰いだところである。

③作業実施の主体およびその支援体制

史料調査・撮影にあたっては、プロジェクトメンバーのほか、総合研究大学院大学の院生や歴博の各種スタッフに協力を仰ぐことができた。文書目録および添付 DVD 作成においても、調査同様に歴博スタッフほかの協力を得た。とりわけ史料閲覧の便に配慮したオリジナル DVD の作成については、本プロジェクトの宮田が全般にわたって尽力したことを付記しておきたい。

④作業の流れ

画像史料解析センター旅費および共同研究員等旅費のほか、各種研究経費と共同する形で、プロジェクトメンバーおよび協力者が 3 年間にわたり約 10 回の現地調査を実施し、神田家文書目録の作成とデジタル撮影をおこなった。最終年度に目録を完成させるとともに、史料画像を収録した DVD を作成した。

⑺対象史料総量に対する現状データの量・位置づけ

神田家文書については史料全点の調査を完了し、目録を作成した。またその主要史料についてはデジタル画像を DVD に収録し、初期の目標を達成した。

⑻残された課題・問題点

依然として大型絵図の撮影装置については、小型化・軽量化といった大きな課題が残っている。今後も各種センタープロジェクトのなかで実践を重ねていくことで、採訪先の条件に即応したシステム作りを実現してゆくことが必要である。また文書調査という観点においては、デジタル機器を利用した採訪システムがどうあるべきか、その仕様を確定するに至っていない。史料編纂所においても今後デジタル史料採訪の導入が日程のぼると予想されるが、公開の方法を含めて検討すべき余地が大きい。本プロジェクトでは史料データの管理方法やセキュリティなどの問題から、サーバーへの搭載や WEB による公開という方法をとらず、DVD の活用という選択を行ったが、今後は史料編纂所コンピュータシステムを改善してゆくことで、かかる課題にも対応できるよう努めてゆかねばなるまい。また今回のように、史料編纂所と歴博といった機関間の連携研究においてデジタル情報をどう蓄積し活用してゆくかについても、画像センター全体の課題として検討を深めておく必要が大きいと思われる。

⑼今後の展望・終了の見通し・要望

⑻を参照のこと。

⑽関係する研究報告・参考文献など

調査の概要とその成果については、久留島浩「潟湖開発関係絵図の基礎的研究『紫雲寺潟絵図』（享保六年五月紫雲寺潟落堀につき地境絵図）をめぐって（1）～（4）」（『画像センター通信』17～19・21 号、2003 年）および久留島浩・宮田公佳「巨大絵図分割撮影装置の試作」（『センター通信』25 号、2004 年）がある。総括としては久留島浩・井上聡「近世の大規模新田開発絵図に関する基礎的研究プロジェクトの活動と成果について」（『センター通信』31 号、2005 年）を発表した。

9，『一遍聖絵』画像データベースプロジェクト

⑴プロジェクト担当者

（代表）黒田日出男（2002・2003 年度）・高橋慎一朗（2004 年度のみ）

（メンバー）林譲・井上聡・藤原重雄・佐多芳彦（学術研究支援員）・安達千鶴子（非常勤職員）・太田まり子（同）

⑵プロジェクト開始年度（終了年度）

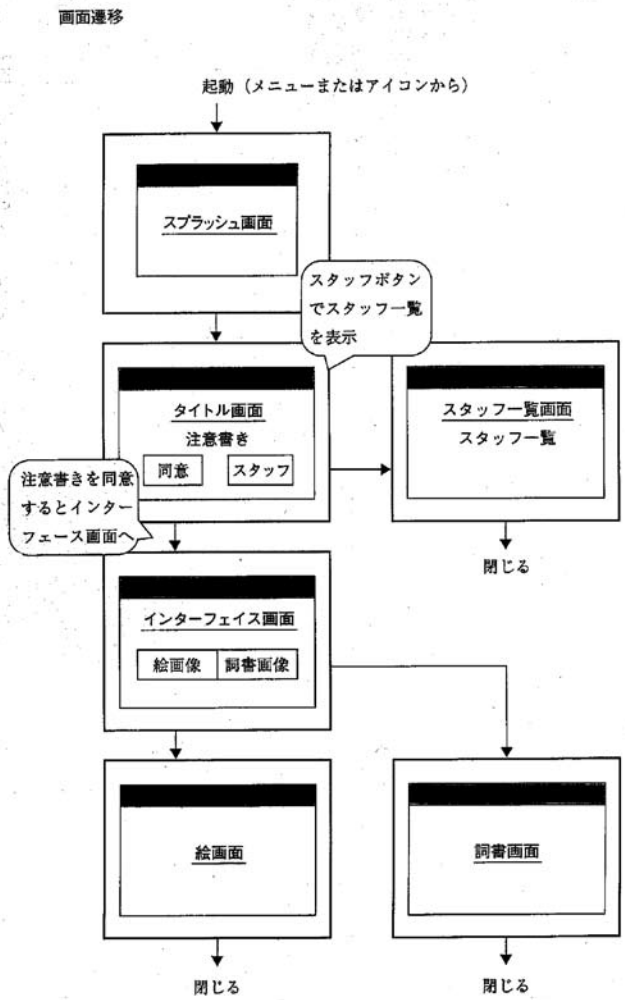
2002 年度～ 2004 年度

⑶プロジェクトの基礎となる史料・対象

国宝『一遍聖絵』（国宝指定名称は『一遍上人絵伝』）の画像部分

⑷プロジェクトの概要

原本所蔵者である時宗総本山清浄光寺（遊行寺）の了解と全面的な協力を得て、『一遍聖絵』の高精細デジタル画像化を目的として、2002 年度から 2004 年度までの 3 年間、研究をおこなった。



⑸プロジェクト遂行の目的・意義

『一遍聖絵』は、周知のように鎌倉時代の絵巻物の白眉であり、美術史における鎌倉時代絵画の研究や、仏教史における一遍研究・時宗史研究にとどまらず、中世社会史研究、さらに建築史や考古学、民俗学なども含めた幅広い分野の研究者から注目されている。また、この『一遍聖絵』が提供する豊富な画像情報は、図像学的な分析を行うことにより、絵画史料全体を通じた分析を可能にするものでもある。既に『一遍聖絵』の研究には、かなりの量の蓄積があり、今後は画像をより精密に解析することや細部の綿密な分析が必要となると予想される。完成した閲覧システムでは、インターフェイス画面で任意の絵画部分をクリックすると、該当部分の高精細画像表示画面に移る。この画面においては、高精細画像をズーム拡大・ズーム縮小をすることができ、上下左右にスクロールすることも可能となっている。このように、サムネイルによる一覧画面と、拡大・縮小の自由度が高い画像画面を基にしたシステムを構築したことによって、複数の場面の快適・迅速な解析が可能になったと言えよう。また、高精細画像ビュウワーによって、細部を拡大してもぼやけない画像をコンピュータのディスプレイ上で解析することが可能になったわけである。これまでの『一遍聖絵』研究においては、大型本を用いての画像研究では、机上でページを繰る作業はやや煩わしいものがあり、図像の検索や精査には困難が伴った。逆にハンディな複製本では、写真の小ささなどにより高水準の解析が不可能であった。しかし、新たに生成された高精細デジタル画像およびその閲覧システムは、それらの難点を解消し、今後の『一遍聖絵』研究に資するところは大きいと思われる。

⑹作業遂行に関わる内容

①成果の公開方法および開始年度

2005年9月からは、この画像データシステムは、「『一遍上人絵伝』（清浄光寺蔵）高精細デジタルデータ閲覧システム」として、閲覧を希望する所内外の研究者に対して、東京大学史料編纂所図書閲覧室に常置されるコンピュータ端末1台に限定して公開を開始した。

②遂行経費の概要

3年間で総額約729万円を与えられた。年度別の内訳は以下のとおりである。

2002年度　320万円（撮影経費）

2003年度　358万円（撮影費・デジタル化経費・システム開発費）

2004年度　　51万円（システム開発費）

③作業実施の主体およびその支援体制

システム構築の計画は代表および担当教員があたり、作業は、非常勤職員の協力を得つつ主として学術支援研究員があたった。

④作業の流れ

作業を開始した2002年度には、まず既存の4×5インチサイズのカラーポジフイルムを清浄光寺より借用し、テストを行った。その結果、倍率を上げるに従って画像の鮮明度が低下し、高精細デジタル化には向かないことが確認された。そこで、あらためて『一遍

聖絵』の絵画部分につき、原本から、より大きなサイズの 8 × 10 インチサイズのカラーフイルムの写真撮影をすることにした。2002 年度中には、奈良国立博物館に寄託された巻一から巻六までの撮影を行った。

続く 2003 年度には、京都国立博物館に寄託された巻七から巻十二の撮影を行った。いっぽう、同時並行して、画像のデジタルデータ化の作業に着手した。具体的には、撮影したカラーポジフイルムをスキャニングして Tiff 形式のデータを作成した。また、詞書のデジタルデータと、その釈文のテキストデータを統合して、詞書部分のデジタルデータを作成した。さらにこれらのデータを、科学研究費基盤研究（A）「第二定型洛中洛外図屏風の総合的研究」（研究代表者 黒田日出男、2002 ～ 2004 年度）と㈱ PFU が共同開発した「画像史料研究プラットフォーム・ライトバージョン」（Gigaview Lite）に絵巻物の形態を考慮して修正を加えたシステムに搭載した（システムに関する詳細は、同研究成果報告書を参照のこと）。以上の作業は、2003 年度に巻一から巻六までについて行った。

最終年度の 2004 年度には、残る巻七から巻十二までについてデジタルデータの作成と、システムへの搭載を行った。また、デジタルデータの利用に関して原本所蔵者と詳細な覚書を交わすとともに、閲覧者向けのマニュアルを作成して、一般公開に向けて環境整備を行った。

⑺対象史料総量に対する現状データの量・位置づけ

既に所期の目的としたデータは生成し終わった。

⑻残された課題・問題点

今後は、システムの有用性と公開についての周知につとめ、このシステムを利用した研究の推進を図ることが課題となろう（2007 年 4 月現在、耐震補強工事の必要があるため、史料編纂所図書閲覧室は一時閉鎖されており、このシステムも一時的に利用ができなくなっているが、閲覧室の再開とともに利用も復旧する予定である）。本システムはあくまでも「解析」のためのツールであり、本格的「解析」はまさに今後に向けての大きな課題である。

⑼今後の展望・終了の見通し・要望

⑻を参照。

10，赤水図デジタルアーカイブプロジェクト

⑴プロジェクト担当者

（代表）馬場章

（メンバー）谷昭佳

⑵プロジェクト開始年度（終了年度）

2002 年度～ 2003 年度

⑶プロジェクトの基礎となる史料・対象

江戸時代後期に刊行された長久保赤水製作『改正日本輿地路程全図』（赤水図）15 点

⑷プロジェクトの概要

2001 年度まで古写真研究プロジェクトにおいて行ってきたデジタルアーカイブの制作・閲覧技術の開発研究の部分を、その研究内容と予算規模に鑑みて独立させ、新規の研究プロジェクトとして計画するものである。

⑸プロジェクト遂行の目的・意義

歴史史料の多様な形態や内容などの特徴に応じた適切なデジタル化処理方法の開発とデジタルデータの活用方法に関する研究を行い、日本史学研究の成果へと結びつける。

⑹作業遂行に関わる内容

①成果の公開方法および開始年度

作成したデータは、インデックス用 CD-ROM（サムネイルと Dublin Core に基づくメタデータ）ならびにマスターデータ用 DVD-R（Raw データの接合データ）に格納し配架する。

②経費の概要

2002 年度　2,293,846 円　このほかリーダーシップ経費・大学院情報学環経費を得た。

2003 年度　1,849,851 円

③業実施の主体およびその支援体制

中村尚暁（本所史料保存技術室）・吉田正高（本所研究推進支援員）・研谷紀夫（本学大学院学際情報学府）・津田光弘（有限会社イパレット）・肥田康・奥村泰之・川瀬敏雄（株式会社堀内カラー）イパレットネクサス開発グループの協力を得た。

⑤作業の流れ

①調書作成、②8 × 10 インチリバーサルフィルムによる撮影（完全俯瞰・二分割）、③スキャニング（非圧縮 Tiff 形式によるデジタル化、メッシュマッピングによる接合）、④専用保管容器の製作・収納、⑤デジタルデータの研究支援ツール iPalletnexus 格納、⑥書誌データ項目として Dublin Core を採用し古地図用に拡張した。なお『改正日本輿地路程全図』の原図と思われる『扶桑分里図』（個人蔵）について、近赤外線デジタル撮影を行い、DVD-R に格納した。

※以上、プロジェクト担当者より回答がなかったため、本原稿は、各年度に提出された活動報告に基づき委員会で作成した。

11，油日神社プロジェクト

⑴プロジェクト担当者

（代表）藤原重雄

（メンバー）黒田智（共同研究員）

⑵プロジェクト開始年度（終了年度）

2003年度

⑶プロジェクトの基礎となる史料・対象

油日神社所蔵の絵画史料・文献史料の調査写真等。

⑷プロジェクトの概要

2002年2月に実施した調査の整理・事後検討を行なう。

⑸プロジェクト遂行の目的・意義

滋賀県甲賀郡に鎮座する古社・油日神社には、豊富な文化財が残されている。このうち絵画作品と文字史料について、プロジェクト開始前年度に調査を行なった（センター旅費から配分も受けた）。調査は歴史学の黒田が企画し、美術史の米倉迪夫（非常勤講師）・山本聡美・高岸輝（学振PD）・梅沢恵、国文学の松本真輔、歴史学の藤原が参加した。小規模ながら多分野的なものであった。大変なご厚意により、『油日大明神縁起』（一巻。『神道大系　神社編　近江国』に翻刻あり）、「聖徳太子絵伝」（四幅）といった当初の目的の他、数多くの文化財を拝見することができた。新規プロジェクトの申請時期であったこともあり、事後の整理や追加調査の可能性を考え、プロジェクトとして計画した。

⑹作業遂行に関わる内容

①成果の公開方法および開始年度

⑸参照。

②遂行経費の概要

予算請求・執行はなし。

③作業実施の主体およびその支援体制

プロジェクト担当者および調査参加者。

④作業の流れ

調査関係者のそれぞれが成果を持ち寄る。画像センターの設備・備品類（作業室やPC・スキャナ・カメラ等）の利用。

⑺対象史料総量に対する現状データの量・位置づけ

調査史料の概要を掲げる。仏画には、日吉山王曼荼羅図（一幅）、千手観音三尊曼荼羅図（一幅）、十一尊曼荼羅図（一幅）、弁財天曼荼羅図（一幅）、紅玻璃阿弥陀如来像（一幅）、愛染明王像（二種二幅）、十二天像（二幅）、慈恵大師像（版本、一幅）、大黒天図（一幅）などがある（主要なものについては、滋賀県立琵琶湖文化館『甲賀の社寺』1985年に図版掲載。ほかに『甲賀郡志』下〈1926年〉、文化庁『文化財集中地区特別総合調査一三 湖南地方の文化財』1976年に言及がある）。このうちには、「油日宝蔵覚」（板書の額、慶長十四年。滋賀県教

育委員会『重要文化財油日神社本殿・桜門及び廻廊・拝殿修理工事報告書』1926 年に図版・翻刻あり。ただし読めてない文字が多い。）と対応するものを含む。『川枯神社年中行事』（写本一冊）は、『縣社油日神社誌』（1913 年）に「年中行事　一巻」として解題があり、割裂のうえ大部分の翻刻を収めているが、史料全体の様子やもとの配列などが分りにくい。現在のかたちは文化二年（1805）以降の成立で、錯簡（と若干の落丁）がある。ほかに境内絵図（白描）や近世文書若干を拝見した。なお先の「油日宝蔵覚」には「太子伝抄　七巻」が書き上げられているが、その存在は確認していない。このほか、油日祭図衝立（福原敏男『祭礼文化史の研究』法政大学出版局、1995 年、カラー口絵）、板絵歌仙図（拝殿所在）などがあり、太鼓については、胴内に寛政六年銘を赤外線カメラで撮らえることができた。

⑻残された課題・問題点

神社内外の追加史料調査は行わなかった。曼殊院所蔵の寺社勧進帳類には、「大永五年五月沙門祐旭江州甲賀郡油日大明神神輿勧進帳」が含まれているようであるが、史料編纂所架蔵の写真帳には未収録である。また、横蔵寺所蔵「両界曼荼羅」（巨勢行忠筆）も旧蔵品である。

⑼今後の展望・終了の見通し・要望

プロジェクトの年度が実態とずれが生じてしまっていること、小規模な企画をプロジェクトとして申請することなど、試行的な性格のものであった。ただ、いささか危惧するのは、プロジェクトに対して成果や公開のオブリゲーションをひとしなみに強く課すことにより、潜在的な研究ないし学習（所員の大多数は絵画史料または IT の初心者である）意欲を殺ぎ、定量的な成果の出やすいデータ生成的な課題にプロジェクトが偏ってしまうことで、センターの研究の内実を保証するための共通理解は必要かもしれない。

⑽関係する研究報告・参考文献など

（調査の発端・成果であるが、プロジェクトとしての直接の成果ではない。）

黒田智「信長夢合わせ譚と武威の系譜」（『史学雑誌』111 編 6 号、2002 年）

松本真輔「中世聖徳太子伝と油日神社の縁起―聖徳太子の兵法伝授譚と武人としての太子像―」（『日本文学』53 － 6 、2004 年）

梅沢恵「各地に伝来する垂迹曼荼羅―熊野曼荼羅（香川・六萬寺）と山王曼荼羅（千葉・観明寺／滋賀・油日神社）―」（『横浜美術短期大学教育・研究紀要』2 、2005 年）

12，荘園絵図と荘園内遺跡の一体的認識の試みプロジェクト

⑴プロジェクト担当者

（代表）本郷和人

（メンバー）秋山哲雄・細川重男

⑵プロジェクト開始年度（終了年度）

2005年度

⑶プロジェクトの基礎となる史料・対象

東京大学史料編纂所編『日本荘園絵図聚影』、並びに各種遺跡情報・発掘情報。

⑷プロジェクトの概要

荘園研究を進展させるため、絵図研究を含めた文献史学・歴史地理学・考古学による横断的な検索を行うことを可能とする、『日本荘園絵図聚影』収載荘園絵図と、遺跡・発掘情報とをリンクさせたデータベースを構築する。

⑸プロジェクト遂行の目的・意義

現在の荘園研究では、特に文献史学において飛躍的に研究が進み、その成立や展開、現地における荘園の実態などが次々と明らかになっている。近年では、歴史地理学との協業によって、文字史料に登場する地名の現地比定などの研究レベルが著しく高まっている。また、荘園研究の重要な材料となっている荘園絵図を用いた研究でも、荘園絵図集の刊行も含めた研究環境が整いつつある。しかし、これだけの研究の進展にもかかわらず、荘園研究における考古学の重要性は見逃されがちな傾向にある。過去の状況を即物的に伝えてくれる考古学の成果は、同様に過去の状況を描いた荘園絵図の研究、ひいては荘園研究には欠かせないものであり、また両者を関連付けることによっても新たな研究の進展が見込まれる。そこで本プロジェクト研究では、荘園絵図と遺跡情報との関連性をより高めるため、東京大学史料編纂所が刊行している『日本荘園絵図聚影』に収載されている荘園絵図と、遺跡情報・発掘情報とをリンクさせたデータベース構築を目指した。個別的な荘園研究にとどまらず、荘園絵図を網羅的に考古学の成果とリンクさせることは、必ずや多くの研究者に資する素材を提供することになろう。

以上のように、荘園絵図・各荘園の現地比定・各荘園の遺跡情報、の三項目にわたる情報を収集し、これらの複合的なデータベース構築を行った。これにより、古代から中世の歴史を知る上で重要な素材である荘園に対して、絵図研究を含めた文献史学・歴史地理学・考古学による横断的な検索を行うことが可能となり、荘園研究をより進展させることができると考える。

⑹作業遂行に関わる内容

①成果の公開方法および開始年度

本活動によって得られた結果については、荘園絵図グループに提供し、史料編纂所所蔵荘園絵図模本データベースに反映するようにした。

②遂行経費の概要

60 万円（入力委託費）

③作業実施の主体およびその支援体制

主として秋山哲雄が、週 2 回のペースで 501 室を拠点に作業を行い、年間のべ 100 日間、研究・調査に従事した。細川重男は秋山哲雄の補佐に当たり、本郷和人が全体の作業を監督し、統括した。

④作業の流れ

具体的な作業は以下の通りである。

第一に、『日本荘園絵図聚影』全 7 巻に収載されている 279 枚の荘園絵図の、絵図名および所蔵者のデータベースを作成した。

第二に、地名事典やこれまでの研究などを参考に、それぞれの荘園絵図が描いている地域を現在の地名に比定する作業を行い、同様にデータベース化した。現地比定に際してはなるべく最新の情報を採用するように心がけたが、見解が分かれている場合も多いため、当面は範囲を広くとって比定し、今後の研究の進展を待つこととした。そのため、場合によっては最新の研究が反映されていないこともある。また、現行の地名についても同様に最新の情報を採用するよう努めたが、近年の市町村合併を把握できていない時には、旧市町村名で表記している場合がある。

第三には、上記の作業によって完成した荘園絵図およびその現地比定のデータベースをもとに、それに遺跡情報・発掘情報を加えた荘園絵図遺跡情報データベースを構築した。基本的には荘園絵図が描かれた時代の遺構や遺物を含む遺跡を採用することとしたが、複数の時代にまたがる複合的な遺跡も多いため、情報が入手可能な範囲で、隣接する時代の遺跡についても記載している場合がある。

⑻残された課題・問題点

地方自治体の関わる発掘調査を対象としたので、民間の発掘会社による調査はデータから漏れている場合がある。全国的な傾向として、遺跡分布が少ない地域では発掘調査報告書の情報も入手困難であり、本データベースの前提として、こうした発掘調査報告書の全国的なデータベース構築も将来的には必要である。地方自治体による報告書の情報整理と全国的な情報収集は、考古学や行政の側の大きな課題であろう。

※本プロジェクトに関しては、実行委員会が情況を聴取の上原稿を作成した。

13，錦絵・摺物プロジェクト

⑴プロジェクト担当者

（代表）宮地正人（1997 ～ 2001 年度）・横山伊徳（2002 年度～）

（メンバー）鶴田啓

⑵プロジェクト開始年度（終了年度）

1996 年度～ 2003 年度（ただしその後もデータベース維持作業は行っている。）

⑶プロジェクトの基礎となる史料・対象

〔錦絵〕本所所蔵錦絵・静岡県立図書館所蔵錦絵・横浜開港資料館所蔵錦絵（史料編纂所 762 点、静岡県立中央図書館 2918 点、横浜開港資料館 939 点）

〔摺物〕 名古屋市立蓬左文庫、国立国会図書館、早稲田大学図書館、三井文庫、東北大学図書館（狩野文庫）、東京大学法学部（明治新聞雑誌文庫）、東京大学情報学環（旧社会情報研究所）、刈谷市立図書館（佐藤コレクション）、都立中央図書館（加賀文庫・東京志料）、横浜開港資料館、内藤記念くすり資料館、長崎県立図書館、名古屋市立鶴舞図書館、静岡県立中央図書館、東京大学総合図書館が所蔵する摺物。

⑷プロジェクトの概要

錦絵、摺物とも、各地における調査・撮影（もしくは複製）を前提に、撮影された画像史料一点ごとに書誌カードを作成し、これらに大まかな主題別分類を施すとともに、編年作業を行うものである。

⑸プロジェクト遂行の目的・意義

錦絵、摺物とも、主として近世後期から近代にかけて大量に流通した、販売目的のメディアであり、画像を豊富に含んでいる史料である。これらを全国的規模で集大成し、編年する（仕掛をつくる）ことは、幕末維新史にとどまらず、広く画像研究に寄与するものである

⑹作業遂行に関わる内容

①成果の公開方法および開始年度

錦絵データベース（1999 年度）

摺物データベース（1998 年度）

②遂行経費の概要

本プロジェクトが供与を受けた総額は 1997 年より 2002 年までの 6 年間で 1375 万円である。その年度別の内訳は下記の通りである。

1997 年　178 万円（撮影・焼付費 99 万円、摺物目録作成費 79 万円）

1998 年　248 万円（入力経費 113 万円、撮影費 135 万円）

　このほか摺物データベース開発費は、他データベース作成と合算して供与を受けた。

1999 年　560 万円（錦絵データベース作成費 410 万円、入力経費等 150 万円）

2000 年　152 万円（入力・撮影経費）

2001 年　　7 万円（消耗品費）

2002 年　220 万円（システム改変費 64 万円、デジタルスキャン経費 92 万円、作業費 34

万円、消耗品費　20 万円）

③作業実施の主体およびその支援体制

編年化作業は、宮地。錦絵撮影ディジタル化、DB 設計は横山。摺物 DB の設計と各 DB の実装は鶴田。

④作業の流れ

〔錦絵〕撮影ディジタル化→編年化作業→ギャラリー化作業→ DB 設計→ DB 実装

〔摺物〕調査・撮影→編年化作業→ DB 設計→ DB 実装

⑺対象史料総量に対する現状データの量・位置づけ

〔錦絵〕静岡県立中央図書館 2918 点、史料編纂所 762 点、横浜開港資料館 939 点はそれぞれの所蔵館で全点である。全国的、全世界的な対象史料の総数は不明。

〔摺物〕各調査対象施設の部分は、ほぼ全点。対象史料の総数は不明。

⑻残された課題・問題点

①錦絵や摺物の場合、所蔵機関と密接な連絡が必要だが、これを確実に維持することが求められている。

②公開可能な錦絵・摺物について画像リンク作成と修正。

③風説留中画像史料データの摺物データベースへの追加。

⑼今後の展望・終了の見通し・要望

錦絵・摺物ともに、画像を読解する力量の形成・維持が必要である。画像は各所蔵施設でも大切にしている資料なので、公開条件などのきめ細かな調整が必要だが、これらの条件をクリアする体制が出来ていない。

⑽関係する研究報告・参考文献など

『風説留中画像史料一覧(稿)』(1999 年 3 月)

『摺物総合編年目録(第 2 稿)』(2000 年 7 月)

横山伊徳「錦絵ギャラリーと錦絵 DB」(『センター通信』2 号、1998 年)

宮地正人「錦絵出版年月推定方法によせて」(『センター通信』8 号、2000 年)

宮地正人「歌舞伎錦絵の製作の月と日をめぐって」(『センター通信』9 号、2000 年)

宮地正人「「番附集」事始め」(『センター通信』10・11 号、2000 年)

宮地正人「横浜絵調査余滴」(『センター通信』12 号、2001 年)

宮地正人「将軍継嗣問題の判じ錦絵」(『センター通信』13 号、2001 年)

⑾ WEB による成果公開

①第 3 回外部評価以後の取り組み

1999 年以降、DB の形で成果は公開している。

② 2006 年度リプレイスへの対応

双方向の場合、相手先の移転などがあるとそれに対応してこちら側のデータを変更しなければならないが、その余裕がない。

14，風説留中画像史料プロジェクト

⑴ プロジェクト担当者

（代表）宮地正人

（メンバー）鶴田啓、箱石大

⑵プロジェクト開始年度（終了年度）

1998 年度～ 2000 年度

⑶プロジェクトの基礎となる史料・対象：風説留

風説留とは、天保期（1830 ～ 1843）から近代初頭にかけて、武士・公家をはじめ全国の豪農商や在村知識人が、政治情報・風聞・社会的事件等を蒐集記録しまとめた書物を指す。

⑷プロジェクトの概要

全国の図書館・文書館等に所蔵される風説留の中に含まれる画像史料の書誌情報調査結果をもとに、目録として刊行するとともに、データの検索利用ができるようにする。

⑸プロジェクト遂行の目的・意義

本プロジェクトに先行する『摺物総合編年目録（稿）』の刊行、摺物データベースの作成と合わせ、従来利用が難しいとされてきた画像史料の一覧化をすすめ、幕末・維新史研究の深化をはかる。

幕末維新期の史料の集大成としては、第二次世界大戦前に文部省維新史料編纂事務局が編纂した「大日本維新史料綱本」があるが、当時の研究状況を反映して画像史料は編纂の対象とされなかった。画像史料については、利用の前段階の作業として、年代比定や内容の文字による記述という点で困難がともなうが、今回書誌情報を一定通覧できる形にしたことにより、利用の端緒をつけたと言うことができよう。

⑹作業遂行に関わる内容

①成果の公開方法および開始年度

1999 年 3 月に『風説留中画像史料一覧（稿）』を刊行した。調査対象の史料所蔵機関は、名古屋市立蓬左文庫、東京大学史料編纂所、国立国会図書館、早稲田大学図書館、東京都立中央図書館、三井文庫、東京大学総合図書館、刈谷市立図書館、東北大学図書館（狩野文庫）、京都大学附属図書館、盛岡市中央公民館である。なお本目録と、画像史料解析センターが 1998 年 3 月に刊行した『摺物総合編年目録（稿）』とは、調査の対象とし書誌情報を収集した所蔵機関がかなり重なっており、いわば兄弟の関係にある。

ついで上記目録のデータを元に、2000 年度にはこれをエクセル表の形で利用できるように整理した。

②遂行経費の概要

1998 年度　撮影経費 123 万円（本所・国立国会図書館・京都大学附属図書館等所蔵品の撮影等）、データ入力経費 48 万円

2000 年度　データ入力経費 46.5 万円

③作業実施の主体およびその支援体制

プロジェクトメンバー

④作業の流れ

史料調査・書誌情報収集→目録作成→目録出版／データ加工→データベース化

⑺対象史料総量に対する現状データの量・位置づけ

現在のデータ 7593 点は、調査済史料の全データである。調査対象機関・史料をどこまで拡大するかによって総量は大きく変動する。

⑻残された課題・問題点

当初、『風説留中画像史料一覧(稿)』のエクセルデータを、史料編纂所 SHIPS データベース中の摺物データベースに入れる予定であった。摺物とは、近世後期から近代初頭にかけ発行された一枚ないし数枚からなる出版物で、やはり画像情報を豊富に含んでおり、利用者も重なると考えられるから、一括で検索できることが適当であると考えたのである。

しかし実際には、摺物データベース(およびその元になった『摺物総合編年目録(稿)』)と風説留中画像史料のデータ(およびその元になった『風説留中画像史料一覧(稿)』)の構造は、下記のように大幅に異なっていた。(いずれも、データ ID など専らシステムが使用する項目や予備項目は除く。)

A摺物データベースの項目構成

①和暦年月日／②西暦コード／③タイトル／④版種類名称／⑤数量／⑥書誌事項／⑦形態分類名称／⑧内容分類／⑨地名／⑩所蔵機関(番号) ／⑪所蔵機関(名称) ／⑫目録番号／⑬書名／⑭区分内容／⑮セキュリティ／⑯書名／⑰史料区分／⑱架／⑲番／⑳枝番／㉑号／㉒頁

B風説留中画像史料の項目構成

①年号／②月／③日／④閏／⑤西暦／⑥表題／⑦版種／⑧史料コード／⑨数量／⑩備考

ここでB⑧の史料コードは、別表のデータにより、所蔵機関(番号)・所蔵機関(名称)・目録番号・書名に展開可能である。基本的に摺物データベースの方が項目数が多いので、理屈上マッピングは可能だが、サーバ上のデータベースを対象に直接実験するわけにも行かず作業がストップしている。

⑼今後の展望・終了の見通し・要望

現在のシステム(2006 年 2 月稼働)では、CSV ファイルでのデータ出力・データ登録が容易になっているので、PC 上にテスト環境を作成してマッピングの試行を行うことが可能であると思われる。

15，古写真研究プロジェクト

⑴プロジェクト担当者

（代表）馬場　章（1998 ～ 2001 年度）、保谷　徹（2002 年度～）

（メンバー）馬場　章（1998 ～ 2004 年度）・宮地正人（1998 ～ 2001 年 8 月）・吉田　成（1998 ～ 2002 年度）・箱石　大（2000 年度～）・谷　昭佳（2002 年度～）・ 安達千鶴子（1998 年度～、センター非常勤職員）

（共同研究員）石川寛夫（九州産業大学、2004 年度～）・吉田　成（東京工芸大学、2004 年度～）

⑵プロジェクト開始年度（終了年度）

1998 年度～（継続中）

⑶プロジェクトの基礎となる史料・対象

幕末・明治期の古写真（写真史料）

⑷プロジェクトの概要

１）画像の収集・研究と公開

幕末維新期における日本関係古写真の収集と研究（人物写真が中心）を進め、原物（オリジナル）、複写、デジタル画像による収集をおこなっている。この内容は、「古写真データベース」によって画像・書誌データを公開する。

ここでは、①古写真画像のデータベース化、②古写真の技法解析、③古写真に付属した史料情報の収集と解析、④関係史料群の調査・分析など、総合的な古写真研究を進めている。これまで研究対象として取り扱った史料群には、史料編纂所が所蔵する古写真（写真史料）に加え、外国奉行柴田日向守旧蔵コレクション、佐賀藩主鍋島家コレクション、伊豆韮山代官（鉄砲方）江川家コレクション、写真家横山松三郎関係コレクション、長崎町年寄本山家旧蔵コレクション（上野彦馬関係）、田安徳川家古写真コレクションなどがある。

このうち、鍋島家コレクションの調査は、石川・吉田両共同研究員と九州産業大学石川研究室の協力を得て、共同研究の形で画像データの収集をすすめている。

２）写真史の研究

幕末諸藩（薩摩藩、佐賀藩など）の写真研究（幕末科学史）や写真技術、当時の写真師の事績などを調査し、初期日本写真史研究への貢献を目指している。この成果は、『東京大学史料編纂所研究紀要』や『センター通信』に発表し、また古写真研究会の開催に努力してい

る。

3)写真保存技術の研究

原物(オリジナル)やガラス乾板、アルバム、台紙付写真などの保存技術の研究を行っている。

4)在外日本関係古写真の調査・研究

コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所所蔵のクレットマンコレクション(寄託史料)など、海外に所在する日本関係の古写真にも注意を払い、科学研究費基盤研究(A)「前近代東アジアにおける日本関係史料の研究」(研究代表者 保谷徹、2003～2006年度、以下「保谷科研」と記す。)などと連携して、海外調査とデジタル画像による収集にも努力を払っている。

⑸プロジェクト遂行の目的・意義

本プロジェクトの目的は、古写真研究データベースの充実を機軸に、幕末・明治期の古写真(写真史料)の調査・収集・研究することにある。史料編纂所の各部室が古文書の全国調査をおこなうのと同じように、幕末・明治初期の古写真画像について体系的な調査・収集を行っていくことは、史料編纂所のような研究機関のみがなしうる課題である。所蔵古写真のみならず所外所蔵史料を統合したデータベース構築により、オリジナル写真を収集した何人かの研究者の頭の中で行われていた古写真比定の作業を、多くの歴史研究者にも開放することになり、史料学的な手法によって古写真研究をおこなうことに、本プロジェクトの大きな意義がある。

⑹作業遂行に関わる内容

①成果の公開方法および開始年度

(データベース)

古写真データベース公開(1999年)

(研究会)

・古写真研究会「新しい『古写真史研究』とデータベース開発」(2000年2月24日)

・「日蘭古写真研究会」(2004年10月20日)

ヘルマン・ムスハルト(前ライデン大学写真博物館長)「在蘭日本関係古写真について―その歴史と特色―」／箱石　大「東京大学史料編纂所の古写真研究プロジェクトについて」

／谷　昭佳「ロシェ撮影によるシーボルト写真について」の 3 本の報告

②遂行経費の概要

本プロジェクト遂行のため得た経費は総計 890 万円である。その内訳は下記のとおり。

1998 年度　17 万円

1999 年度　65 万円（撮影・紙焼経費・機材費等）

このほかリーダーシップ支援経費を得た。

2000 年度　100 万円（撮影・紙焼経費・機材費等）

2001 年度　200 万円（ガラス乾板ギャラリー開発費）

このほか史料集等刊行 100 周年記念特別展経費・委任経理金などから支援を得た。

2002 年度　109 万円（プログラム改変経費、古写真デジタル化費、）

2003 年度　106 万円（データベース格納費、デジタル化費、書誌作成費、古写真購入費）

2004 年度　137 万（デジタル化費、機材費、書誌作成費、研究集会報告・通訳謝金）

2005 年度　91 万円（デジタル化費、入力費、資材購入費）

2006 年度　65 万円（デジタル化費、資材購入費）

③作業の実施

プロジェクトメンバーが作業を行い、調査などにおいては適宜、共同研究員の支援を得た。

④作業の流れ

〔1998 年度〕

古写真データベース検索システムを開発。／史料編纂所所蔵及び寄託古写真の書誌データ整理・入力。／写真画像のデジタル化。

〔1999 年度〕

古写真データベースの更新。1998 年度公開したデータの修正。／木展「古写真の世界Ⅰ」の開催。／銀板写真（新発見の安田善一郎肖像写真）の画像復元に関する共同研究（東京大学生産技術研究所池内克史教授研究室と共同）。／ガラス乾板のデジタル化に関する共同研究（株式会社堀内カラーと共同）。／古写真研究プロジェクト第 1 回研究会の開催（報告：長崎大学教授姫野順一氏「新しい『古写真史研究』と画像データベース開発の意義」）。／ 1999 年 4 月より古写真データベースをウェブ上で公開。

〔2000 年度〕

古写真データベースの作成。／既公開データの校正作業と新規データ（雑誌『太陽』掲載人物写真）の撮影・原像・プリント・デジタル化（画像処理を含む）と整理。書誌データの

作成。／東京大学附属図書館所蔵南葵文庫国絵図の撮影・デジタル化。／「歴史学のためのウェブサイト第4回経験交流会」での研究成果報告。／アンブロタイプの肖像写真（個人蔵）の復元。／古写真の所在調査及び調査結果の報告書作成。

〔2001年度〕

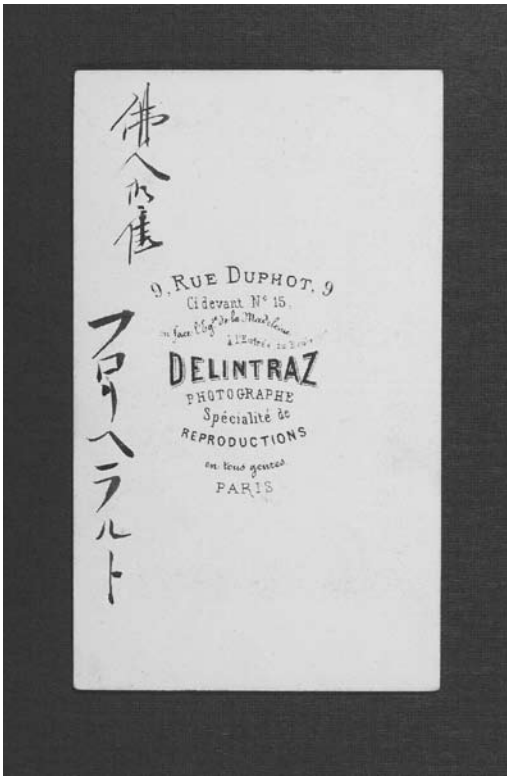
古写真データベースの作成（雑誌『太陽』掲載人物写真）。／ガラス乾板ギャラリーの制作。／古写真保存容器の開発研究。／大型史料の撮影・閲覧技術の開発研究。／古写真の出張調査。／古写真の撮影・デジタル化。

〔2002年度〕

雑誌『太陽』掲載人物写真1400件のデータベース化。／維新史料引継本中の画像写真の目録化（70点をデジタル化）。／古写真の出張調査（函館市）。

〔2003年度〕

外国奉行柴田日向守剛中旧蔵名刺写真90点のデジタル画像収集。／古写真データベースのデータ追加。／英国士官が所持したと思われる幕末手札写真コレクション22点の購入・デジタル化。／古写真調査（長崎・武雄・佐賀）。



〔2004年度〕

鍋島報效会徴古館（佐賀市）所蔵の古写真　調査開始、1300点を撮影。／石黒敬章コレクション保存会所蔵の古写真（約20000件）デジタル化に着手。／本所所蔵伝記中肖像写真（約1000件）のデジタル化（スキャニング）。／田安徳川家所蔵の古写真コレクションを調査した。／コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所所蔵のフランス第2次軍事顧問団員ルイ・クレットマンの古写真コレクション調査、デジタル撮影（保谷科研等経費）。／日蘭古写真研究（10月20日、大会議室）を開催。

〔2005年度〕

鍋島報效会徴古館（佐賀市）所蔵古写真コレクション計1771点の撮影。／幕末明治の写真家横山松三郎関係史料の調査。湿板写真429点など、撮影データ1937点。／ガラス乾板の明治

～昭和期撮影台帳、計7冊をテキスト入力。

〔2006年度〕

鍋島報效会徴古館（佐賀市）所蔵古写真コレクション調査、計498点の撮影データ。採寸など書誌データとの突合せ作業。／伊豆韮山江川文庫（幕府代官江川太郎左衛門）の古写真調査。幕末の湿板写真や岩倉使節団同行時のアルバムなど、撮影データ数345点。／土佐山内家所蔵古写真調査。／長崎本山家旧蔵コレクション調査、上野彦馬のガラス乾板などを調査・デジタル化。

⑺対象史料総量に対する現状データの量・位置づけ

史料編纂所が所蔵する古写真（画像）のデジタル化とデータベース化はほぼ終了した。また第二に、太陽や伝記中肖像のデータベース化など、ウェブ公開可能な肖像画像データについてもデジタル化を進め、順次データベースに載せている。所蔵する古写真データのデータベース化と公開という点では、当初想定した目標を達成したといえる。ただし外部の個人や機関が所蔵する古写真を研究対象に加えると、研究課題は尽きることがないと言える。

⑻残された課題・問題点

外部機関が所蔵する画像をどう公開してゆくかが課題である。現在進めている鍋島コレクション調査がひとつのモデルとなると考えられるが、所蔵者の協力を得つつ、デジタルデータの管理とウェブ公開の問題をどのように考えていくか、早急に対策が必要である。もっとも雑誌『太陽』の肖像画像や伝記中肖像画像をデータベース化したように、探せば「版権の切れた」肖像データはもっとあるかもしれない。あるいは逆に、ウェブ公開を前提にしなければ、各種の図録などから画像データを集積し、研究データを一気に拡大することも可能である。

また、写真技術や写真師に関する関係史料（古文書・記録類）の体系的調査・収集を進めておくことも史料編纂所のプロジェクトとしては求められることであろう。

⑼今後の展望・終了の見通し・要望

データベース上で画像データの比較検討を進めるためには、データ数を増やすしかない。しかし、外国奉行柴田コレクションのように、自由に研究利用できる画像データがある一方で、個人や他機関が所蔵する画像データの多くは、自由にウェブ公開するというわけにはいかない。この点では、たとえウェブ公開が出来なくとも、書誌データのみを公開して、画像データは史料編纂所へ来て端末上でデータベースを操作すれば見られるようにすることにはメリットがあり、意義あるデータベースになりうると考えている。

⑽関係する研究報告・参考文献など

○発表論文（『センター通信』所収分を除く）

吉田　成「古写真の調査鑑定に関する一考察―人物写真を中心に―」（『東京大学史料編纂所研究紀要』第9号、1999年3月）

保谷　徹「クレットマンとフランス軍事顧問団」（『フランス士官が見た近代日本のあけぼの』、IRD企画、2005年）

谷　昭佳「クレットマンと明治前期の日本写真」（『同』）

吉田　成(共同研究員)「写真術の渡来と広がり」(『同』)
谷　昭佳「鍋島報效会所蔵古写真調査について―東京大学史料編纂所付属画像史料解析センター古写真研究プロジェクト」(『徴古館報』11号、2005年)
○『センター通信』所収の発表成果
(巻頭図版)
「遣欧使節副使松平石見守康直・同目付京極能登守高朗写真(部分)」(1号、1998年3月)
「久原躬弦写真」5号(第5号、1999年4月)
「安田善一郎肖像銀板写真」(9号、2000年4月)
「森田岡太郎清行肖像銀板写真」(16号、2002年1月)
「函館五稜郭写真」第25号(17号、2004年4月)
「箱館在勤ロシア領事ゴシケヴィッチ肖像写真と宣教師ニコライ肖像写真」(28号、2005年1月)
(史料研究と紹介)
宮地正人「幕末維新期の写真師点描」(4号、1999年1月)
宮地正人「東京印刷局写真」(6号、1999年7月)
宮地正人「東京印刷局写真(続)」(7号、1999年10月)
吉仲　亮「森田岡太郎清行肖像銀板写真」(16号、2002年1月)
箱石　大・吉田　成「北白川宮能久親王(元・輪王寺宮入道公現親王)の肖像写真」(24号、2004年2月)
谷　昭佳「ロッシュ(Rossier)撮影によるアレクサンダー・シーボルト他集合写真について」(27号、2004年10月)
吉田　成「『感光紙製法』について⑴」(28号、2005年1月)
谷　昭佳「『感光紙製法』について⑵―薩摩藩と紙焼写真―」(28号、2005年1月)
(プロジェクト紹介・活動報告)
共同研究プロジェクト「『安田善一郎肖像銀板写真の発見と画像復元に関する共同研究』の意義」(9号、2000年4月)
谷　昭佳「古写真研究プロジェクト―鍋島報效会所蔵古写真調査の概要について」(36号、2007年1月)
○研究報告
2001年3月　「歴史学のためのウェブサイト第4回経験交流会」で成果報告。
2006年12月18日　駿河台大学公開シンポジウム「文化遺産としての写真とその教育・研究利用」にて報告。
⑾ WEBによる成果公開
①第3回外部評価以後の取り組み
基本的に変更は加えていない。
② 2006年度リプレイスへの対応
一部で画像表示にエラーが生じ、修正に時間を要した。

16，幕末維新画像史料研究プロジェクト

⑴プロジェクト担当者

（代表）保谷　徹

⑵プロジェクト開始年度（終了年度）

2002年度～（2004年度をもって職務繁多につき活動中止）

⑶プロジェクトの基礎となる史料・対象

在外日本関係史料に存在する幕末維新期の画像史

⑷プロジェクトの概要

幕末期に外交関係をもった国々がその対日政策を遂行するにあたって作成した日本関係の地図（海図）・絵図その他の図面類の収集整理をはかった。具体的には、イギリス国立文書館（NAUK）の収蔵史料にしぼり、史料編纂所が所蔵する在外日本関係史料マイクロフィルムを総ざらいしたうえで、画像のあるものを焼き付けてファイリングする作業をおこなった。この作業は、研究担当者を代表者とする「江戸のものづくり」科研公募研究『施条銃段階移行期の軍事技術に関する研究』（2002～2003年度）と連携しておこなった。このほか、研究所内の他のプロジェクトとも連携して、いくつかの画像史料をデジタル化し、よりわかりやすく閲覧する工夫を試行した。

⑸プロジェクト遂行の目的・意義

在外マイクロフィルム中の画像抽出目録やNAUK所蔵画像集成は、英国史料の編纂・研究に日常的に役立てている。また、大学院人文社会系研究科（文化資源学）などの講義素材としても活用している。

収集した下関砲台図（イギリス陸軍工兵隊作成）は山口県教育委員会にも情報提供し、台場の発掘整備に参照されたとのことである。

⑹作業遂行に関わる内容

①成果の公開方法および開始年度

研究成果の一部は、画像史料解析センター通信に報告を連載した。また、収集した画像データについては、書誌データをとりまとめ、CD-ROMに焼き付けて書庫へ入架した。CD-ROM化して書庫に納め、閲覧公開をはかったものは以下の通りである。

NAUK所蔵幕末維新日本関係画像集成／幕末見本切（切本帳）画像集成／レザノフ来航絵巻／老農夜話スクロール／倭寇図巻スクロール

②遂行経費の概要

2002年度から3年度にわたり供与された費用は約220.5万円であり、その内訳は下記の通りである。

2002年度　70.5万円(デジタル画像購入費、デジタル化費、ソフト購入費)

2003年度　75万円(デジタル画像購入費、デジタル化費、消耗品費)

2004年度　75万円(デジタル画像・古写真購入費、データ処理費)

③作業実施の主体およびその支援体制

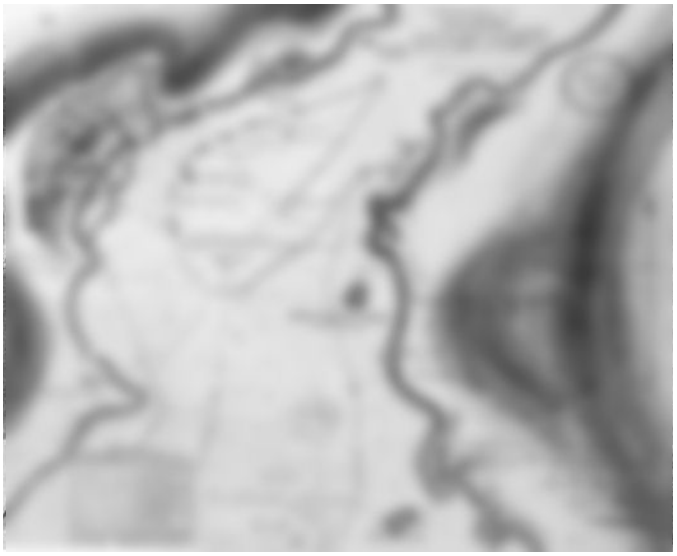
保谷徹

⑺対象史料総量に対する現状データの量・位置づけ

作業的にはまだまだごく一部だろうと思われるが、現在比較的容易に出来るものは完了している。

⑻残された課題・問題点

蒐集対象が外国の機関が所蔵する画像であるため、当該画像データは閲覧利用のみが許されており、複製を含めて二次利用はできない。またウェブ上の公開も行うことはできないため、所内のみに利用が制限されている。このため、図面などをトレースして画像を公開する手法の開発にも取り組んだが、手間の割には効果が期待できないため、これを断念せざるをえなかった。



今後は、書誌データを所蔵目録データベースから検索可能とし、画像そのものは外部からは見られないが、史料編纂所に来れば所内端末で公開できるような工夫をはかりたいと考えている。

⑼今後の展望・終了の見通し・要望

時間と資金が得られれば、さらに継続してみたいおもしろい作業である。ただし、外国の機関が所蔵する画像史料であり、所内での閲覧公開は可能でも、これをウェブ公開したり、複製・出版などの2次利用に供することはできない。そのため、現段階ではいずれもCD-ROMで見せているにとどめている。これも所外の個人や他の機関が所蔵する画像史料をどのように集積して公開していくか、センターとして検討してゆく必要が大きい。

また、史料編纂所が所蔵する画像を試験的に加工したものについては、厳密にはこれをそのままWEB上で公開していいのかどうか、議論が定まらず、これもCD段階である。研究所が所蔵する画像については、一律ウェブ公開可とし、個人がこれを利用することを認めるべきである(所蔵者明記は当然)。出版物への掲載や商業利用については、史料編纂所の許可を求めるよう明示しておけばいいのであって(使用料問題は別途検討する。)、史

料編纂所が画像を出さないのであれば、他の機関はさらに閉鎖的になるのは当然のような気がする。これも早急に改善すべき問題である。

⑽関係する研究報告・参考文献など

保谷徹「1864 年英国工兵隊の日本報告(1) ～ (7)」(『センター通信』20 ～ 26 号、2003 年 1 月～ 2004 年 7 月)

保谷徹「1873 年英国軍艦アイアンデューク号士官集合写真および附属史料」(『センター通信』28 号、2005 年 2 月)

17，画像史料による近世儀礼の空間構造と時間的遷移に関する研究プロジェクト

⑴プロジェクト担当者

（代表）小宮木代良（2004年度～2005年度センタースタッフ・近世史料部門兼任、2006年度～2007年度近世史料部門）

（メンバー）山口和夫（2004年度～2005年度近世史料部門、2006年度～2007年度センタースタッフ・近世史料部門兼任）・荒木裕行（2004年度～2005年度学術研究支援員、2006年度～2007年度近世史料部門）・中川和明（2004年度学術研究支援員）

⑵プロジェクト開始年度（終了年度）

2004年度～2007年度終了予定。

⑶プロジェクトの基礎となる史料・対象

「奏者番手留」は、江戸幕府の儀礼の次第、準備段階における諸事を、袖珍大の折本に記録したものである。奏者番相互に借写されるとともに、手留箪笥に整理・保管され、幕府儀礼に関与する奏者番相互の情報共有の機能を有していた。奏者番を経験した大名家史料に伝来することが多く、現在、確認されているものでは、手留箪笥とともに伝来する田原藩三宅家（手留2000帖以上）及び館林藩秋元家（1500帖）をはじめとして、水野家文書（首都大学東京図書情報センター本館）、阿部家文書（学習院大学史料館）、高遠藩内藤家（国立国会図書館）等にもまとまって伝来する。本所は、武蔵金沢藩米倉家に伝来した手留685帖を所蔵している。

「諸公事指図」は、1954年購入の特殊蒐書「徳大寺家史料」中の折本3帖。奥書に拠ると、徳大寺公純が弘化4年（1847）権中納言在任中に「恒例」上・下を謄写し、権大納言昇任後の嘉永3年（1850）に参議左大弁甘露寺愛長の蔵書を借用し「臨時」を謄写したもの。文化12年（1815）・天保9年（1838）の先例も記され、清華の家格で官職昇進に恵まれた人物が、上卿等の役者を務める機会を想定して情報を集積・編成した実用書と考え得る。「恒例」下には、「日月蝕御殿嚢之図」もある。

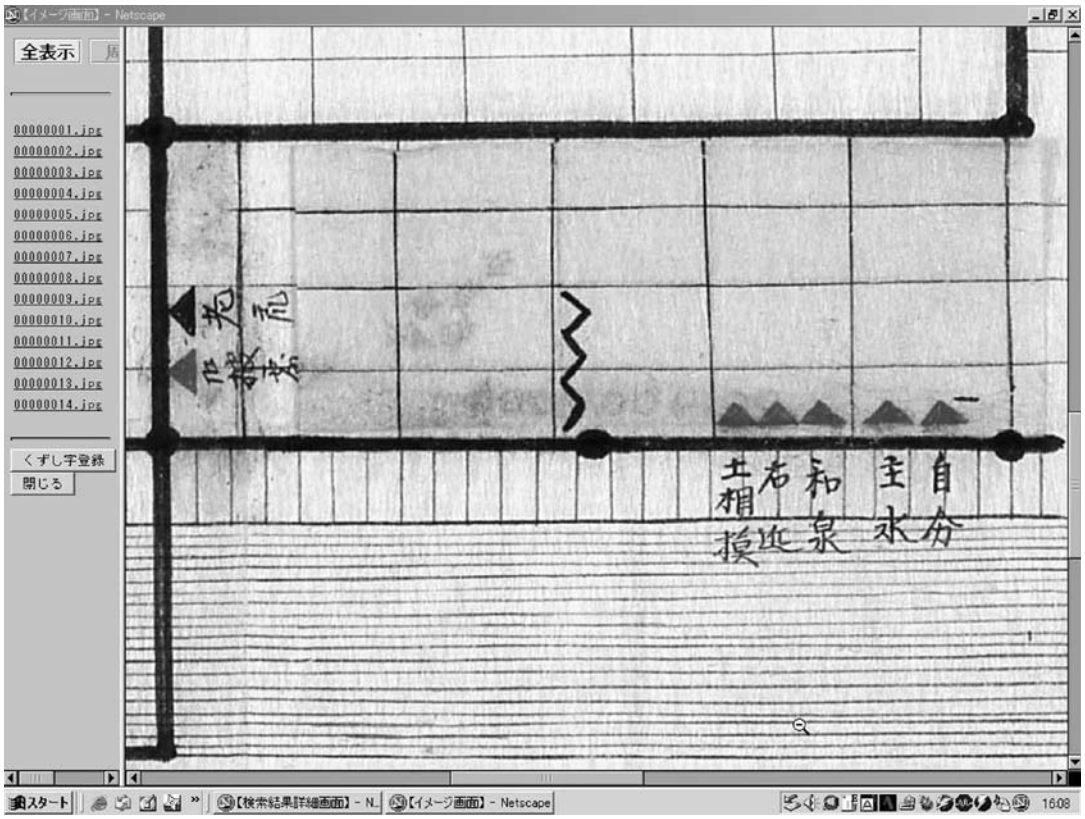
⑷プロジェクトの概要

画像史料による近世儀礼史料、とくに武家儀礼と公家儀礼のそれぞれについての画像史料を分析するための公開性・共有性の高い仕組みを検討し、そこから実現できる研究の方向性を考える。具体的には、画像史料を扱う上で、公開手続き上の問題の少ない本所所蔵の近世儀礼史料を材料とし、そのデータベース上からの公開を第一段階として目指す。第二段階としては、そのデータベースを用いながらの儀礼史料画像分析の方向性を探る。武家儀礼としては、江戸幕府奏者番の職務遂行の中で形成された史料としての「奏者番手留（米倉家本0272－1）」を用い、公家儀礼としては徳大寺家史料中の「諸公事指図（徳大寺家本－09－62－1～3）」を用いた。

⑸プロジェクト遂行の目的・意義

「奏者番手留」に記された記事には、個別の年月日に行われた特定の儀礼（例えば「文化

十二年六月十三日　参勤之御礼有之諸大夫太刀披露相勤候留」等）についての次第が絵や図入りで記されている。とりわけ儀礼が行われた江戸城本丸表御殿大広間・黒書院・芙蓉之間等々の平面図に、畳が一畳ずつ書き込まれ、儀礼に参加した面々の位置と動きが、記号や矢印を用いて、事細かに記されているのが特徴的である。



奏者番史料を中心とした幕府儀礼史料に関しては、近年、深井雅海監修による『江戸幕府武家行事儀礼図譜』（東洋書林）等の影印本の刊行がある。また、奏者番に関する研究としては、以前より、美和信夫「江戸幕府奏者番就任者に関する検討」（『麗澤大学紀要』四二、1986）、同「江戸幕府奏者番就任者の数量的考察」（『日本歴史』466 号、1987 年）をはじめとして、高田徹「江戸幕府奏者番の勤務実態」（『皇學館史学』3 号、1989 年）、諸星美智直「幕府儀礼における奏者番の口上について―国立国会図書館蔵『江戸城諸役人勤向心得』より」（『国語研究』57 号、1994 年）、所理喜夫「土浦土屋藩主歴代と江戸幕府奏者番」（『茨城県史研究』76 号、1996 年）等があり、近年では、大友一雄の一連の研究『江戸幕府と情報管理』（国文学研究資料館編、原典講読セミナー、臨川書店、2003 年）・「幕府奏者番にみる江戸時代の情報管理」（『史料館研究紀要』35 号、2004 年）や、種村威史「天保期日光社参における宿城儀礼と奏者番」（『国史学』190 号、2006 年）がある。このうち大友の研究は、奏者番手留に関する研究としては、もっともまとまったものである。また、種村論文は、「儀礼空間における奏者番の動向」を追究するとしている。今後、種村論文にみられるような分析方法をとる研究が増加することも予想される。したがって、幕府儀礼を分析する上では、もっとも詳細かつ正確な史料であり、その利用がまたれている。

また、「諸公事指図」は、当該期の朝廷儀式の様相を視覚的に再構成する手掛かりとなる史料である。

⑹作業遂行に関わる内容

①成果の公開方法および開始年度

④を参照のこと。

②遂行経費の概要

予算執行　2006年度までの総額208万円。年度ごとの額及び使途については、④を参照のこと。なお、センタプロジェクト経費からの支出の他に、科学研究費基盤研究（A）「画像史料解析による前近代日本の儀式構造の空間構成と時間的遷移に関する研究」（研究代表者 加藤友康、2004～2007年度）と協力しつつ補った。

③作業実施の主体およびその支援体制

④を参照のこと。

④作業の流れ

プロジェクト遂行の作業経過及び予算執行

〔2004年度〕

１．「奏者番手留」685帖及び「諸公事指図」3帖の撮影。全体のモノクロマイクロフィルムによる撮影と、絵図部分に限定した6×7カラーポジフィルムによる撮影。２．モノマイクロフィルムのデジタル化。３．両史料の目録データ作成。「奏者番手留」については、図書部作成（中谷夏代子担当）の所蔵史料目録データベース用データがあり、これをもとにして点検しながら、法量、頁数、絵図タイトル一点ごとのデータを付加した（エクセル使用）。１及び２については、担当者による確認を行いながら、㈱高橋情報システム（2005年度より社名変更インフォマージュ）に依頼して撮影及びデジタル化を行った。３については、荒木裕行・中川和明が行った。１．２の費用のうち約120万円を支出した。

〔2005年度〕

１．前年度撮影の6×7カラーポジフィルムのデジタル化（1617カット分）を行い、モノマイクロフィルムデータに、この部分のデータを置き換えて組み込んだ。２．図書部（橋都直子担当）及びCERT（電子計算機緊急対応チーム、平澤加奈子担当）の協力を得て、前年度作成の詳細データを、本所所蔵史料データベースの当該部分と置き換え、そこに１で作成した画像（7157カット分）をリンクさせた。３．本所所蔵史料目録データベース上からの両史料の画像公開を開始（2005年10月）したことをホームページ上で掲示するとともに『センター通信』32号（2006年）において、検索手順を説明した。なお、奏者番手留に関連する史料群を確認するため、田原市博物館所蔵の田原藩古文書中の奏者番関係史料を調査した。４．データベースより絵図一点ごとの検索を可能にするため、絵図部分のカラーデータとデータとのリンク付け（絵図個別データ版の作成）作業を進めた。１．２の費用のうち82.5万円を支出した。

〔2006年度〕

絵図データベース上でのより効果的な分析の可能性を検討するとともに、関連史料として、東北大学附属図書館狩野文庫の近世儀礼関係史料の調査を行った。この費用として5.5万円を支出した。

⑺対象史料総量に対する現状データの量・位置づけ

データ化は終了。

⑻残された課題・問題点

微細な絵図の部分は、モノクロマイクロフィルム撮影分のみのデジタル化では、十分に解像度をあげることはできない。したがって絵図の部分のみ6×7カラーポジフィルム撮影を行い、デジタルデータは、原寸大で解像度1500dpi、Tiff画像で一コマあたり40MBほどとなった。インターネット公開用のものは、全てJpegとしたが、それでも、総量は5GB近くとなり、従来のDVD一枚には組み込み得ない量となった。

また、2005年度の公開にあたり、Jpeg画像であるため、本所のTiff画像を前提としていたブラウザやビューワーとの相性の問題があり、IEでは、画像の大きさの調整ができない等の不具合が生じた。現在のところ、プラグインとしてAlternatiffを用いて利用している。なお、公開が、新コンピューターシステム移行の直前であったため、新システムにおいて、しばらく表示上の不具合が残った。

⑼今後の展望・終了の見通し・要望

2007年度は最終年度となるので、絵図個別データ版の完成と公開を目指すとともに、今後の研究の可能性を検討できるような具体的な分析事例を蓄積したい。

近世儀礼研究は、近年活発になりつつあるが、史料の共有がそれに見合うようには進んでいない。これは、「奏者番手留」や「諸公事指図」に見られるように、非常に細かい標記や色分け等が重要な意味を持つ史料であることと、量が膨大であることが理由としてあげられる。影印版では、かなり判型を大きくする必要があり、また大部となってしまう。この点、デジタル画像による公開は、近年のデジタル画像に関する技術の急速な発展と相まって効果的である。また、データベースと連携させることにより、多様な分析の可能性を追究することができるだろう。また、「奏者番手留」の場合、本所米倉本以外の各地に伝来する史料群のデータベース化が進行すれば、相互リンクあるいは統合により、データ量を豊富化することが可能となる。

⑽関係する研究報告・参考文献など

小宮木代良・山口和夫「本所所蔵『奏者番手留』及び『諸公事指図』のデジタル化とデータベースとの連携」（『センター通信』32号、2006年）

⑾ WEBによる成果公開

① 2005年度より所蔵史料目録データベース上で公開。

⑹－④参照

② 2006年度リプレイスへの対応

⑻参照

18，南島関係画像史料の研究プロジェクト

⑴プロジェクト担当者

（代表）石上英一

⑵プロジェクト開始年度（終了年度）

2005年度～（継続中。2009年度終了予定）

ただし、2001年度より関連史料の調査・撮影を実施している。

⑶プロジェクトの基礎となる史料・対象

『南島雑話』、史料編纂所所蔵島津本中の名越左源太史料（日記等）、名越左源太関係史料（奄美博物館所蔵）、「大嶋古図」（鹿児島県立図書館所蔵）及びそれらに関係する薩摩・琉球の画像史料

⑷プロジェクトの概要

本計画は、『南島雑話』の成立・構成と写本系統、画像・記述の分析を中心にして、併せて奄美諸島史・薩摩琉球関係史・日本琉球関係史に関する様々な画像史料の情報収集・写真版収集と研究を行う。担当者が、『南島雑話』を主題に据えた南島関係画像史料研究を構想する直接の契機は、2001年開催の東京大学史料編纂所史料集刊行百周年記念特別展「時を超えて語るもの」に出陳した『南島雑話』の解説の執筆にある。

⑸プロジェクト遂行の目的・意義

『南島雑話』は南島研究のバイブルとも評されたことのある、近世奄美諸島研究の基礎資料の一つである。近年、その書誌研究が進むとともに名越左源太関係史料が公開され、「大嶋古図」の再評価が行われた。『南島雑話』写本中で最も精好なものが史料編纂所所蔵島津家文書本であるが、これを底本にした翻刻や諸本校訂はなされていない。島津家本『南島雑話』の画像・本文校訂の学界や地域研究への提供、名越左源太関連の諸史料の検討が必要とされ、さらに『南島雑話』を媒介にした薩摩・琉球の近世画像史料の広範な調査・収集・検討が学界から期待さている。

⑹作業遂行に関わる内容

①成果の公開方法および開始年度

〔論文〕

『センター通信』29～35・37号に「南島雑話とその周辺」一～八（継続中）として逐次報告している。その中で、『南島雑話』中の「南島雑記」に描かれる騎馬の花嫁行列に関連し、琉球から薩摩への馬の貢進や薩摩から琉球への馬術の伝授など琉球における馬術の展開に関する琉球家譜・島津家文書・近世琉球絵画の検討の結果や、関連する琉球絵画史史料も紹介している。

〔展示など〕

史料編纂所1階ロビー展示に、「南島雑話と奄美大島」の展示（2ケース）を行っている（2006年11月より）。

②遂行経費の概要

2005 年度	名越左源太関係史料調査撮影費	95.5 万円
	南島雑話展示用プリント作成費	7 万円
	計	102.5 万 円
2006 年度	琉球嶌真景等調査撮影費	72.2 万円
	大嶋古図接合画像データ・名越左源太関係史料プリント作成費	11.5 万円
	奄美大島史料調査費	9 万円
	計	92.7 万円

③作業実施の主体およびその支援体制

石上英一

④作業の流れ

島津家文書本『南島雑話』、鹿児島県立図書館所蔵『大嶋便覧』「大嶋古図」は、2004 年 2 月に科学研究費特別推進研究(COE)「前近代日本史料の構造と情報資源化の研究」(研究代表者 石上英一、2000 ～ 2004 年度)等でカラー撮影を行った。2006 年 1 月に奄美博物館所蔵「名越左源太関係史料」の撮影を行った。同 3 月に富士フィルムイメージテック株式会社の協力を得て「琉球国絵図」(3 幅)のデジタル接合画像を作成した。2007 年 1 月に名護博物館所蔵「琉球嶌真景」の撮影を行った。2007 年 3 月に「大嶋古図」のデジタル接合画像を作成した。

2005 年 8 月、2006 年 2 月、2007 年 1・2 月に、那覇市歴史博物館・沖縄県立図書館郷土資料室等で、奄美関係史料・琉薩琉日関係史料・琉球絵画史料の調査を行った。2006 年 12 月に奄美博物館・大和村中央公民館(長田(大和)須磨文庫)で史料調査を行った。

⑺対象史料総量に対する現状データの量・位置づけ

『南島雑話』に直接関連する画像史料の撮影はほぼ終え、薩摩琉球関係史に関わる画像史料である那覇港図屏風(沖縄県博本、浦添美術館本、滋賀大本)・首里図(沖縄県立図書館本)の写真版の購入が残されている。

⑻残された課題・問題点

『南島雑話』と名越左源太の南島認識を、薩摩の道之島支配、琉球支配の中に位置づけるために、琉球の薩摩関係画像史料や薩摩画壇・琉球画壇、薩摩・琉球の博物学の研究を行うことの必要性を認識している。

⑼今後の展望・終了の見通し・要望

2010 年度までに研究成果をまとめる。

1)「名越左源太関係史料」中の『南島雑話』関係の草稿・画稿、『南島雑話』の分析を進め、島津家本を底本とした『南島雑話』の翻刻を企画する。

2)「大嶋古図」、「琉球国絵図」(島津家文書)の釈文を作成し公開する。画像データに文字データを埋め込んだ、デジタル「琉球国絵図」の作成を検討する。

3)物産志・博物志・本草学、馬術伝授と馬貢進、琉球画壇・薩摩画壇等諸分野における、南島画像史料の調査・収集を進め、日琉関係・薩琉関係史における画像史料情報の豊富

化を図る。

⑽関係する研究報告・参考文献など

⑹－②に掲げる論文のほか、下記のとおり報告・講演を行っている。

「慶長・元和年間の奄美諸島史料の整理」（2006 年 12 月 16 日、於奄美郷土研究会）

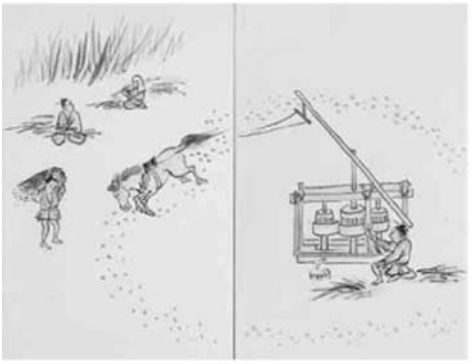
「慶長･元和年間の奄美諸島･喜界島史料の整理」（2007 年 2 月 4 日､於喜界島郷土研究会）

「南島雑話・琉球嶌真景色と南島画像史料」（2007 年 1 月 18 日、於名護博物館）

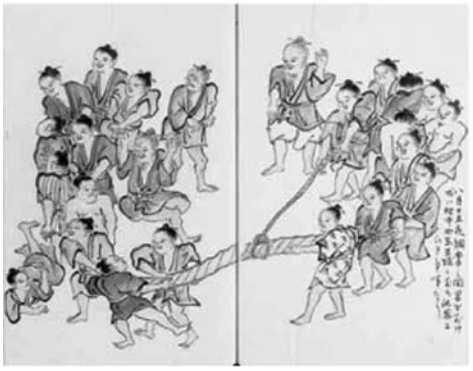
⑾ WEB による成果公開

①第 3 回外部評価以後の取り組み

日本学術振興会「ひらめき☆ときめきサイエンス」（2005 年度）「史料から見る日本の歴史」において、パンフレットに掲載した『南島雑話』を、史料編纂所 HP のデジタルギャラリーで画像公開している。



砂糖しぼりの図



21 南島雑話　　綱牽きの図

21 南島雑話

島津家文書・九二・五四～五八。七冊。縦二七・五㎝、横一九・二㎝。

江戸時代の奄美大島の社会・産業・自然の図画・記録の書。南島雑話は総称。名越左源太時行（時敏。一八一九～八一）著述の「大嶋騒覧」・「大嶋便覧」・「大嶋漫筆」・「南島雑記」と、「南島雑話」（一・二及び三の二冊）・「南島雑話附録」の二類、六部七冊。大島の図解民俗・自然誌として評価が高い。奄美諸島は一五世紀頃から琉球国領であったが、慶長十四（一六〇九）年の琉球征服により島津家領とされた。しかし、近世においても琉球風の習俗は伝えられた。左源太は、島津家の上級藩士で、嘉永二（一八四九）年、次代藩主に島津斉彬を擁立しようとした内訌（お由羅騒動）に坐し、嘉永三年から安政二（一八五五）年まで遠島となり、大島名瀬間切小宿（鹿児島県名瀬市）に謫居した。島人と親しく交わり、異国船来着に備える絵図作成にも参加した。「南島雑話附録」は、文政十二（一八二九）年に大島に派遣された御薬園方の見聞役伊藤助左衛門の著述を左源太が転写したもの。「南島雑話」一・二・三も、最近の研究で、伊藤の著述を左源太が転写したものとされている。草稿の一部（奄美博物館所蔵）、「大嶋便覧」の自筆稿本（鹿児島県立図書館所蔵）が残る。島津家本は明治時代に稿本や「南島雑話」「南島雑話附録」を整序した浄書本。同系本に永井本（東洋文庫に翻刻。奄美博物館所蔵）がある。島津家本と別の編成をなすのが鹿児島大学本（『日本庶民生活史料集成』一に翻刻）。砂糖しぼりの図は「大嶋漫筆」に収める。奄美諸島は、一八世紀初頭から薩摩藩によりサトウキビ生産を強制された。綱牽の図は「南島雑話」一に収める。「八月十五夜綱牽之図、男を別け、或ハ村中西東方限ニ別ち、他界にひき争う事なり」と説明がある。髪を結い簪を挿す習俗は、琉球と同じ。（参考）『南島雑話』（東洋文庫、平凡社、一九八四）。『日本庶民生活史料集成』一・二〇（三一書房、一九六八・七二）。

19，萩野家旧蔵古写真資料の調査研究・整理プロジェクト

⑴プロジェクト担当者

（代表）高橋敏子

（メンバー）小野将・谷昭佳・中村尚暁・和田幸大

⑵プロジェクト開始年度（終了年度）

2005年単年度

⑶プロジェクトの基礎となる史料・対象

2004年度購入の「萩野家旧蔵古写真資料」72点、および同資料群ともと一体のものであったことが明らかな古文書写真（黒田日出男氏寄贈）1点、計73点。

⑷プロジェクトの概要

「萩野家旧蔵古写真資料」の調査研究・整理作業をおこない、デジタル化によって検索・画像閲覧を容易にするための準備作業も行う。

⑸プロジェクト遂行の目的・意義

本資料は、東京帝国大学文科大学教授であり、1911年（明治44）の維新史料編纂会設置時より同会委員も務めた萩野由之（1860～1924）が収集したものとみられ、明治から大正時代にかけて撮影された古写真を中心とする資料群である。この時代の学問的知の存在形態は、現在のような専門領域への深化とそれらを基礎にした総合のあり方とは異なっていた。たとえば萩野由之自身についてみれば、漢学・古典学の基礎の上に中国史・日本史・国文学の領域を広く覆うものであり、また史料の鑑定など実学的な部分も担うものであった。この資料群は、そうした当時の知識のあり方を反映してやや幅広い内容をもつものとなっており、検索利用の便のためには、一枚ごとの内容の検討が必要であると判断されたため、古写真という画像関係資料であることを考慮し、画像センターのプロジェクトとしてその調査・整理作業を行うことにした。

杉山巖氏による調査の結果、すでに原史料が焼失したり（下河辺長流『万葉集管見』）、所在不明の史料の写真（上杉輝虎書状）があることがわかった。またこの調査結果を踏まえた杉山氏の研究（⑽掲載）は、萩野の研究・教育活動を通じて、どのようにこの古写真資料群が形成されてきたのかを解明し、近代の知の体系を探る視点からこの資料群を捉えようとした興味深いものとなった。

⑹作業遂行に関わる内容

①成果の公開方法および開始年度

所蔵史料目録データベースより書誌情報を公開し、画像データにリンクさせている。ただし画像の外部公開については、被写体の原蔵者が判明しているものもあることから、WEB公開せず、来所による図書閲覧が適当であると考えている。

②遂行経費の概要

約32万円（調査外注費・資料保存袋・撮影機材）

③作業実施の主体およびその支援体制

調査・整理は杉山巖氏に委託し、整理方針決定・点検作業等に研究部(小野・高橋)と技術部影写室(和田)がかかわり、保存方法の指導とデジタル撮影・画像ファイル作成は技術部写真室(谷・中村)が行った。公開に際しては、図書部史料係および前近代日本史情報国際センター情報支援室の支援を得た。

④作業の流れ

古写真の内容によって ⑴近世名家筆跡　⑵古文書・金石文・歴史資料等　⑶史跡名勝等　⑷その他に分類して詳細な目録を作成した。その点検をメンバーが行ったほか、写真室においてデジタル撮影を行い、Jpeg および Tiff のファイルを作成した。登録作業等については、上記の支援を得て完了した。

⑺対象史料総量に対する現状データの量・位置づけ

全データについて調査・整理作業は終了している。

⑻残された課題・問題点

画像史料解析センターには、肖像写真を中心とした「古写真データベース」が存在しているが、「萩野家旧蔵古写真資料」の場合は、資料群としての一体性が重要であると考え、図書関係データベースに登録した。今後、増加する古写真資料のデータおよび画像の扱いについては、所蔵者との関係、分量、資料の性格などから一律のデータベースとしては処理できない部分があるのではないかと考えている。

⑽関係する研究報告・参考文献など

杉山巖「萩野由之の歴史学―史料編纂所所蔵「萩野家旧蔵古写真資料」の紹介―」(『センター通信』33 号、2006 年 4 月)

20，万寿寺地蔵菩薩坐像胎内文書画像解析プロジェクト

⑴プロジェクト担当者

（代表）黒田日出男

（メンバー）久留島典子・高橋敏子・吉田成・和田幸大

⑵プロジェクト開始年度（終了年度）

1997年度

⑶プロジェクトの基礎となる史料・対象

三重県阿山郡伊賀町（現、伊賀市）万寿寺の地蔵菩薩坐像（貞治3年銘・1364）内部に納入されていた鎌倉から南北朝期にかけての文書（全10紙）

⑷プロジェクトの概要

画像史料解析センター発足後、古文書画像分野の最初の試験的プロジェクトとして、影写技術・デジタル技術・研究者の知識経験という新旧の画像解析技術を併せ用いることにより、胎内納入文書の解読を行った。

⑸プロジェクト遂行の目的・意義

万寿寺地蔵菩薩の胎内に納入されていた文書は、料紙の表裏に記載があり、また習書などで文字の重なりが二重・三重になっている部分があるなど、判読がきわめて困難であったため、昭和初期に発見されていたにもかかわらず、正確な解読がなく、研究素材として整ったものではなかった。幸い、万寿寺および三重県・伊賀町両教育委員会の協力を得て文書原本の借用が可能となった機会に、複数の技術による解読を試みることにしたものである。もとより原本そのものの判読は何物にもかえ難いものであるが、文字の重なりをできるだけ判別できるように工夫した透過光による撮影とデジタル処理、重層している文字面を筆跡ごとに分離し作成した影写は、その見易さによって、文書解読の大きな助けとなった。

成果は⑽に掲げたが、万寿寺の前身である長福寺が伊賀国の国人福地氏の寺であったことが確認できたとともに、福地氏出身の女性が寺に宛てて書いた書状を見出すことができたのは貴重な発見であった。

⑹作業遂行に関わる内容

①成果の公開方法および開始年度

⑽に掲げた文献・ビデオにより、1997年度より順次成果を公表した。

②遂行経費の概要

3,000円（資料複写代）

③作業実施の主体およびその支援体制

判読に必要な作業を3つに分け、文書原本の撮影と画像処理を吉田が、重層している筆跡を影写することによって分離していく作業を和田が、そしてそれらの助けを得ながら原本をもとに文字を判読する作業を久留島・高橋が担当し、黒田が全体を統括した。

④作業の流れ

まず借用原本の透過光撮影を行い、デジタル処理により重層している墨線の消去・整理作業を行った。それと平行して原本および写真の観察から影写の下作業となる筆跡の分離作業を行い、また判読作業も行った。それらの作業結果を持ち寄りながら何回かの検討を重ねて、解読をほぼ終了させ、その上で影写を完成させた。

⑻残された課題・問題点

デジタル画像の適切な保存管理と公開利用が望まれる。

⑽関係する研究報告・参考文献など

久留島典子「伊賀町万寿寺の地蔵菩薩坐像胎内文書」（『三重県史研究』15 号、1999 年）／和田幸大「万寿寺地蔵菩薩像胎内文書の影写について」（『東京大学史料編纂所研究紀要』9 号、1999 年）／「地蔵菩薩坐像像内納入文書（影写）」（『時を超えて語るもの』2001 年）／ビデオ「古文書の画像処理と解読―伊賀万寿寺の地蔵菩薩坐像胎内文書―（増補版）」（『知の開放〔史料編纂所〕：東大チャンネル』1997 年）

21，入来院家文書 CD-ROM 版の制作プロジェクト

⑴プロジェクト担当者

（代表）久留島典子

（メンバー）近藤成一・高橋典幸・井上聡・吉田成

⑵プロジェクト開始年度（終了年度）

「入来院家文書」を材料として、古文書の目録・本文・画像データをデジタル形態で統合し、WEB により公開することは、画像史料解析センター立ち上げのプロジェクトとして企画され、1997 年 9 月のセンター設立記念式典に間に合わせて準備された。その資源を生かして CD-ROM 版として出版するものとして、1997 年度に本プロジェクトが企画され、1999 年度に初期の目的を達成し終了した。

⑶プロジェクトの基礎となる史料・対象

史料編纂所所蔵「入来院家文書」原本

朝河貫一著・朝河貫一著書刊行委員会編『入来文書』日本学術振興会、1955 年

⑷プロジェクトの概要

史料編纂所が架蔵する「入来院家文書」の目録・本文・画像に関する情報をデジタル化し、2000 年 2 月に紀伊国屋書店より『東京大学史料編纂所所蔵入来院家文書 CD-ROM 版』として刊行した。

⑸プロジェクト遂行の目的・意義

本プロジェクトは、史料提供におけるマルチメディア利用の具体例として、「入来院家文書」の目録・本文・画像に関する情報をデジタル化し、CD-ROM を媒体として提供することを目的とした。

「入来院家文書」は薩摩国入来院の地頭として発展した入来院家に伝来した文書である。イェール大学教授をつとめた朝河貫一による英訳 *The Documents of Iriki* が 1929 年に刊行され、世界的に知られることになった。1948 年に朝河が亡くなった後、朝河の偉業を顕彰する目的で朝河貫一著書刊行委員会が組織され、1955 年に日本学術振興会より *The Documents of Iriki*（日本語名『入来文書』）が再刊された。この再刊本では日本語史料の部がまったく新たに編纂され直した。この作業のために「入来院家文書」が史料編纂所に搬送されたことが機縁になり、同文書は 1966 年に史料編纂所の架蔵に帰した。1998 年は朝河の没後 50 年に当たることから、さまざまな顕彰事業が企画されたが、史料編纂所は第 32 回史料展覧会を「『入来文書』の世界」と題して開催した。このような動向を背景として、1997 年に設置された画像史料解析センターの古文書画像解析の対象として「入来院家文書」が選ばれることになった。

⑹作業遂行に関わる内容

①成果の公開方法および開始年度

2000 年 2 月に『東京大学史料編纂所所蔵入来院家文書 CD-ROM 版』を刊行した。これは、文書原本のカラー画像と釈文、朝河による英訳文を対照可能なかたちで収録し、年表・地図・現況写真・参考文献などを附録としたものである。そのうち釈文は、日本学術振興会版『入来文書』を参考にしたが、古文書原本にあたって全面的に校訂しなおし、無年号文書の年次比定を一部改めた。文書画像については、デジタルの特性を生かした工夫を試みた。すなわち一通の文書が数紙からなる場合は、画像を接合して全体像を提示し、錯簡がある場合にはデジタル上でこれをただし、紙背に文字がある場合にはこれを表示することした。ただし加工以前の画像もあわせて収録した。なお本 CD-ROM は日本学術振興会版『入来文書』の覆刻版とセットで販売された。

本プロジェクトの目的は史料提供におけるマルチメディア利用の具体例を作ることであったが、あわせて朝河貫一の偉大な業績が今日再び活用される環境を創ることをも意図していた。朝河の業績の意義は、70 年前（本プロジェクト進行の時点から）に中世日本を研究するための史料を国際的に提供したのみならず、史料に即した具体例に基づく中世日本像を国際的な形態で叙述したことにある。従って日本語史料を直接読解する能力を有する研究者にとっても朝河の業績を参照することは意味あるのであるが、皮肉なことに、外国語を不得手とする日本史研究者の間で朝河貫一の業績は、有名ではあるがほとんど読まれることがなかった。近年、矢吹晋氏が英語版を日本語に翻訳された（朝河貫一著・矢吹晋訳『入来文書』柏書房、2005 年）。本書によって日本史研究者の間で朝河の業績が正当に理解されることが期待される。

②遂行経費の概要

本プロジェクトの遂行経費は、1997 年度に得た 134 万円である。この経費は「入来院家文書」原本の撮影とデジタル化、朝河貫一原編『入来文書』本文のデジタル化、両者を組み合わせた「入来院家文書」ギャラリー用の HTML ファイルの作成に充当した。

CD-ROM の作成にはこれらの資源を活用し、出版自体は紀伊国屋書店に委託したので、経費は用いていない。

③作業実施の主体およびその支援体制

プロジェクトメンバーが分担して作業を実施した。

⑺対象史料総量に対する現状データの量・位置づけ

「入来院家文書」283 点全部の画像のデジタル化が完了している。

⑼今後の展望・終了の見通し・要望

本プロジェクトは『東京大学史料編纂所所蔵入来院家文書 CD-ROM 版』の刊行をもって完了した。本プロジェクトの課題としたところを今後に引き継ぐとするならば、史料利用の国際的環境をいかに構築していくかを考えることであろう。本プロジェクトでは朝河貫一の紙媒体の業績をデジタルに移し換えたが、これを土台としてより改良を加えた形で、朝河を継承する仕事をデジタル上で蓄積していくことが望まれる。

⑽関係する研究報告・参考文献など

近藤成一「『入来院家文書 CD-ROM 版』の発売」（『センター通信』8 号、2000 年 1 月）

「入来院家文書 CD-ROM 版」（『東京大学史料編纂所報』35 号、2000 年 3 月）

⑾ WEB による成果公開

CD-ROM 版に先行する WEB による公開は 1997 年 9 月以来継続している。2007 年 4 月更新されたホームページでは、デジタルギャラリーのページに収められている。

22，史料編纂所所蔵貴重書のデジタル化・公開プロジェクト

⑴プロジェクト担当者

（代表）高橋典幸

（メンバー）近藤成一

⑵プロジェクトの開始年度（終了年度）

1997 年度～ 1999 年度。ただし 1997 年度については、特定研究経費「東京大学史料編纂所所蔵文書の伝来過程についての研究」（研究代表者 保立道久、1996 ～ 1997 年度）グループによって行なわれた作業を画像史料解析センタープロジェクトとしたものである。『東京大学史料編纂所報』33 号（136 頁）および『センター通信』1 号（2 ページ）参照。

⑶プロジェクトの基礎となる史料・対象

本所所蔵貴重書のうち古文書類

⑷プロジェクトの概要

史料編纂所所蔵古文書の伝来過程を研究して書誌を作成し、所蔵史料目録データベース上で、目録データ・書誌データ・画像データのリンク実現を図る。

⑸プロジェクト遂行の目的・意義

本所所蔵史料のデジタル化の先鞭をつける。史料の形態はさまざまで、デジタル化の方法もそれに応じて多様であるので、まずは対象を古文書類に限定してデジタル化とその発信（具体的には所蔵史料目録データベースとのリンク）を実現する。

⑹作業遂行に関わる内容

①成果の公開方法および開始年度

1997 年度～　WEB 公開（所蔵史料目録データベースにリンク）および CD-ROM を書庫に入架。

2001 年度～　写真帳を書庫に入架。

②遂行経費の概要

1997 年度：⑹－①に記した特定研究経費の支援を得た。

1999 年度：77.6 万円

③作業実施の主体およびその支援体制

1997 年度：⑹－①に記した特定研究経費研究グループの支援を仰いだ。

1998 年度：近藤成一・高橋典幸

1999 年度：近藤成一・高橋典幸、非常勤職員 1 名を雇用し、作業支援をお願いした。

④作業の流れ

①本プロジェクトは本来、1996 年度から 1997 年度にかけて行なわれた特定研究「東京大学史料編纂所所蔵文書の伝来過程についての研究」によって始められたものである。1997 年度に画像史料解析センターが発足するにともなって、画像史料解析センタープロジェクト（古文書画像分野）に移行し、1998 年度・1999 年度は画像史料解析センター経費を受けて作業を遂行した。

②まず、本所所蔵史料(原本・古写本)のうち古文書(「架」番号下2桁が「71」)を対象として、それまでに蓄積されていた「解題」をデジタル化し、所蔵史料目録データベースにリンクをはった。

③次に、これらの史料を35ミリマイクロフィルムによって撮影した。撮影対象は、1996年度は48書目、1997年度は89書目、1998年度は22書目、1999年度は27書目に及んだ。

④さらに、これらを全てTiffG4形式でデジタル化し、CD-ROMを作成。これは「史料編纂所所蔵貴重書CD-ROM版集成」というタイトルで書庫に入架した(6501-1～2)

⑤デジタルデータについては、さらに画像サーバにアップし(1997年度～2001年度はCD-ROMチェンジャにCD-ROMを格納していた)、所蔵史料目録データベースとのリンクを実現した。

(7)対象史料総量に対する現状データの量・位置づけ

(8)参照。

(8)残された課題・問題点

①1997年度撮影分以降の写真帳編成や細目録作成は、結局このプロジェクトでは手をつけることができず、紙焼き写真は画像史料解析センター作業室(104号室)に長く放置されることになってしまった。紙焼き写真については、その後、「崩し字データベース開発プロジェクト」による整理・写真帳編成が行なわれ、書庫に入架された。後始末を「崩し字データベース開発プロジェクト」につけてもらったわけである。

②下二桁「71」架の古文書類についてはほぼ撮影・デジタル化を終了したため、「貴」架の古文書類の撮影・デジタル化に取り組んだが、中途半端な形で終わってしまった。その主たる理由は、「貴」架になると、古文書とそれ以外の形態の原本史料が混在し、古文書類の掌握が容易でないこと、その点に対する配慮を欠いたまま撮影計画が立てられたことなどが挙げられる。

③その後、画像サーバに登録された貴重書のデジタル画像と連動する形で「崩し字データベース」が構築されたことは、資源の有効活用・データベース連携として特筆すべき成果であったと思うが、その過程で貴重書の画像ディレクトリが一部不正規であることが判明した。これは1999年度の作業の担当者高橋が架番号体系と画像ディレクトリの関係についての理解が不十分であったことによるものである.

(9)今後の展望・終了の見通し・要望

すでに終了しているプロジェクトではあるが、最近の動きともからめていくつか指摘しておきたい。

①画像ファイルの形式について。TiffG4という仕様で作成してきたが、現段階でこの形式が最善のものであるかは議論の必要がある。

②あくまでも古文書類を中心にという方向で進めたプロジェクトではあるが、さきに(8)－②でも述べたように、本所所蔵史料の管理体系上、その他の原本史料総体をも視野に収めながら遂行されるべき事業であった。すなわち、本所所蔵原本史料全体のデジタル

画像作成・公開という議論を提起することになると思う。新たに始まった影印本刊行事業とも関わって、今後この問題を避けて通ることはできないと思う。
③そのためには、図書部や写真室との有効な共同作業が必要になると思われる。

23,『花押彙纂』の画像データベース構築プロジェクト

⑴プロジェクト担当者

(代表)林譲

(メンバー)川本慎自

⑵プロジェクト開始年度(終了年度)

画像史料解析センタープロジェクトとして、1998 年度から開始し、2006 年度段階で、『花押彙纂』第六編(『大日本史料』相当分、以下同) 5,172 件、第七編 2,664 件、第八編 1 ,402 件、第九編 2,771 件、第十編 5,090 件、第十一編 12,114 件、第十二編 3,328 件の撮影・デジタル化を終了し、現在書庫配架分のうち 2,015 件まで進行している(小計 34,556 件)。

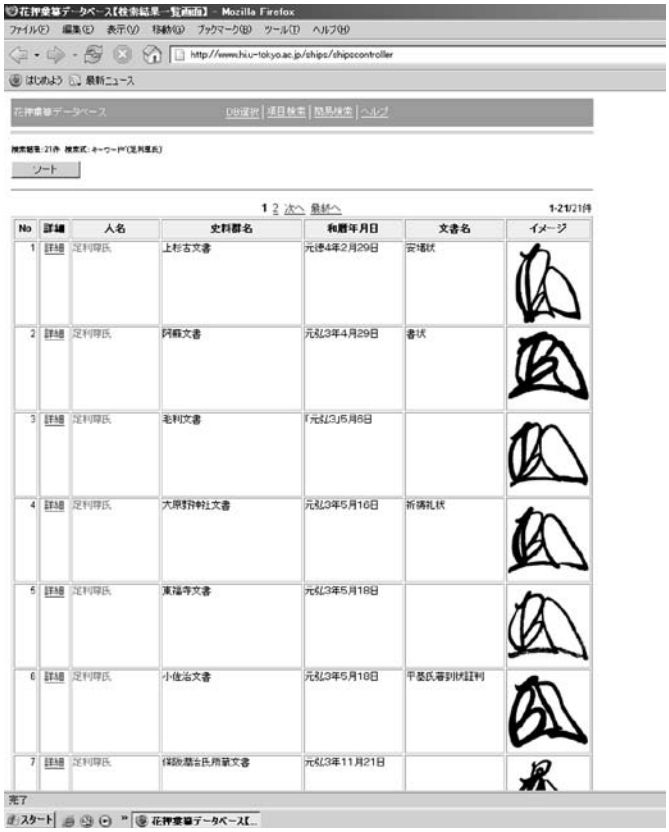
⑶プロジェクトの基礎となる史料・対象

『花押彙纂』を対象とする。『花押彙纂』とは、各時代にわたる古文書等の花押部分を影写し、人名・史料群名・巻第・年月日・文書名等の文字情報を記したものの集成で、推定 50,000 万件を数える。

⑷プロジェクトの概要

本プロジェクトは、史料編纂所の編年関係史料各室や書庫に分散して架蔵されている『花押彙纂』について、マイクロフィルムによる撮影を行った上で、デジタル画像・テキストデータの作成を行い、『花押彙纂』に関する総合的・網羅的・集中的なデータベースを構築しようとする試みである。併せて正規化された花押画像に基づく「花押類似検索システム」の基

【図 1 - 1】



礎とするものである。図１－１は「足利尊氏」で検索した結果の一覧表示、図１－２は詳細画面の表示で、テキストデータのほか、原寸大割り出しのために撮影に際して挿入したメジャーとともに、『花押彙纂』の元来の様子が表示される。

【図１－２】

⑸プロジェクト遂行の目的・意義

『花押彙纂』は『大日本史料』卒伝条等の編纂に利用されているが、大部の上、分散して架蔵されているため、いささか利用しにくい面があった。そこで、総合的な画像データベースを構築し、多くの利用に供しようとするものである。

本プロジェクト（データベース構築）の意義は、上記のみに止まらず、「花押類似検索システム」にとって、最適な素材となり得る点である。同システムは、ユーザーが文書等から切り出した比較したい任意の花押画像を、WEB を通じて同システムの検索対象ボックスに投げ入れ、同システムに格納されている正規化された花押画像との比較を行い、類似する花押画像を提示する、という仕組みである。もちろん、格納されている花押同士の比較も可能である。本システムは、史料編纂所を研究拠点とした科学研究費特別推進研究（COE）『前近代日本史料の構造と情報資源化の研究』（研究代表者 石上英一、2000 ～ 2004 年度）の一研究課題として、協力会社シールズ中島正人氏の協力により、2003 年度にプロトタイプを開発したものである。

『花押彙纂』は先にも触れたように、原本の花押を写したものであるが、影写本がいわば現状模写であるに対して、『花押彙纂』は復原模写というべきものも多く、同システムの素材として最適である（図 2）。同システムをより有意義なものとするためには、有効な比較項目を数多く設定するとともに格納された正規化画像を大量に蓄積していることが重要である。これまで、試験的に「『花押彙纂』データベース」第六･七編から花押画像を切り出し、ノイズ修正・正規化の作業を行い蓄積している。検索結果の一例を図 3 に示した。

【図２】

写真　　影写本（現状模写）　　花押彙纂（復元模写）

花押彙纂・影写本・原本の特性　影写本が虫食いまでを忠実に再現する現状模写、『花押彙纂』は復元模写のものも多い。（文和３年５月21日足利義詮御判御教書 東寺百合文書 せ函足利将軍家下文20、林譲「花押と筆跡研究の可能性―花押類似検索システムとその課題―」『科学』76 2号より、以下同）

【図３】

花押類似検索結果表示　室町幕府第３代将軍足利義満の公家様花押の事例。義満以降の歴代将軍は、ほぼ公家様と武家様の２種類の花押を持つ。

⑹作業遂行に関わる内容

①成果の公開方法および開始年度

第六編分が完了した2000年度には、別途に公開システム開発費の配分を受けて、所内への公開を開始した。2007年３月には所外公開を開始する予定で準備をすすめてきたが、

後記の事情により、４月段階で未公開である。

②遂行経費の概要

主に画像史料解析センター研究プロジェクト予算で遂行してきた。経費については、総額約 333.5 万円で、年度別内訳は凡そ以下の通りである。

1998 年度　28 万円（入力経費）

1999 年度　28 万円（入力経費）

2000 年度　43・5 万円（入力経費）、別途公開システム開発費を得た。

2001 年度　25 万円（入力経費）

2002年度　30万円（入力経費）、別途リーダーシップ支援経費、COE経費から支援を得た。

2003年度　30万円（入力経費）、別途リーダーシップ支援経費、COE経費から支援を得た。

2004 年度　70 万円（入力経費）、別途本所研究プロジェクト経費、COE 経費から支援を得た。

2005 年度　50 万円（入力経費）

2006 年度　29 万円（入力経費）

③作業実施の主体およびその支援体制

編年史料関係各室、及び研究支援推進員等の協力を得て、『花押かがみ』を編纂している特殊史料部特殊史料第一室の川本と林が主に担当している。テキストデータの入力・校正は、2004 年度より RA により、進めている。

④作業の流れ

作業の過程と構築の経過について簡単に触れておく。『花押彙纂』のマイクロフィルム撮影とそのデジタル画像化は専門業者に外注している。花押に付随した文字情報（テキストデータ）については、文字を正確に判読し該当項目に分類する必要があるため、日本史研究の専門的教育を受けた研究支援推進員・RA 等により、その入力・校正作業を行っている。『花押彙纂』原本等に基づき花押のデジタル画像とテキストデータとの対応関係を確認し、一件を完成させる。「花押類似検索システム」のための花押画像正規化作業については、署判の分離が難しく外注に難点があることから、現在、一時中断している。

⑺対象史料総量に対する現状データの量・位置づけ

凡その全体量は推定50,000件。そのうち、マイクロフィルム撮影・デジタル化は34,556件、テキストデータ入力は約 30,000 件、正規化画像作成は約 8,000 件が終了している。

⑻残された課題・問題点

データベース完成までの道程としては、構築、システム、公開それぞれに課題があると認識している。フィルム撮影・デジタル化については、予算配分に応じて進め、書庫配架分終了後は、第五編より以前に遡ることとしたい。テキストデータの入力・校正・調査研究は、RA や研究推進支援員等の採用により『花押彙纂』第十一編途中まで進んでいるが、今後ともその方法により進める必要がある。また、花押画像の切り出し・正規化についても、研究者によって進め蓄積していく必要がある。いずれの作業も、着々と進んではいるが、いずれにしても暫く時間がかかる。解決すべき課題も多いが、『花押かがみ』「花押カー

ドデータベース」と補完し合い、また新たな可能性を持つ「花押類似検索システム」の最適な素材として、「『花押彙纂』データベース」は、極めて有用なデータベースとなるものと考えている。

⑼今後の展望・終了の見通し・要望

最後に、展望とその見通しについては、まず「花押カードデータベース」との結合を考えており、関係者との相談を開始している。次に、「花押類似検索システム」については、精度を高める有効な分析指標の設定、文字情報の付加による人名比定の正確化、『花押彙纂』正規化画像の蓄積進展、そして利用して得られた成果を本システムに還元して一層の充実化をはかる「双方向性」の志向などが当面の課題であり、これらの点については前近代日本史情報国際センター石川徹也教授と相談しているところである。

図4のように、経年変化を示す花押が確実に類似順に並べ得るとすれば、それは、それぞれの年代が近いことを意味し、最終的には総合的な判断が要請されるとしても、無年号文書の年代推定が可能である。例えば、花押という平面図形(X軸・Y軸)へ時間概念(Z軸)を導入し、年月日の明らかな花押を基準としてZ軸上に位置付けていけば、形体の推移が3次元座標軸上に表現され、年代が不明な花押は自ずから明らかになるはずである。その次は、字体類似検索システムへの応用である。それぞれの文字を3次元座標軸上で対応させれば時間的な変化が確認できるはずであり、個人の筆跡の経年変化が特定できることになるだろう。

【図4】

乾元2年（1303） 2月9日　　徳治2年（1307）12月27日　　正和元年（1312） 9月9日

正和5年（1316）閏10月5日　正中2年（1325） 9月7日

金沢貞顕花押の時代的変遷（『花押かがみ』4鎌倉時代3、2973号より）

鎌倉幕府第15代執権で金沢文庫の充実に努めた貞顕の花押は、縦長から横長に徐々に変化していく。

⑽関係する研究報告・参考文献など

『センター通信』25 号(2004 年 4 月)のプロジェクト研究計画に「『花押彙纂』データベースについて」と題して、2003 年度段階における概要を紹介した。また、「花押類似検索システム」については、『月刊 IM』39 巻 9 号(2000 年 8 月 15 日発行、日本画像情報マネジメント協会)「東京大学史料編纂所所蔵「花押カード」のデータベース構築とその公開について」で構築中であることを述べ、『科学』76 巻 2 号(岩波書店)「花押と筆跡研究の可能性―花押類似検索システムとその課題―」において、上記の成果と課題に述べている。

⑾ WEB による成果公開

①第 3 回外部評価以後の取り組み

2004 年度段階ではマイクロフィルム撮影・デジタル化は約 17,000 件であったが、現在、その数はほぼ倍増している。特に RA の採用により、テキストデータ入力・校正・調査研究の件数が進んだことの意義が大きい。

② 2006 年度リプレイスへの対応

2006 年度からの新システム移行に際して、『花押彙纂』データベース・「花押類似検索システム」ともに、安定的稼動に欠ける点があった。2007 年 3 ～ 4 月にかけて、試行版として所外へ公開することを予定していたが、上記のようなシステム的に安定性を欠いていたため、若干遅れるが、間もなく公開できる見通しである。

24，台明寺文書フルテキストデータベース化プロジェクト

⑴プロジェクト担当者

（代表）保立道久

（メンバー）久留島典子・高橋典幸

⑵プロジェクト開始年度（終了年度）

1998 年度

⑶プロジェクトの基礎となる史料・対象

『島津家文書』のうちの「台明寺文書」

⑷プロジェクトの概要

「台明寺文書」について、フルテキストデータを整備して、古文書フルテキストデータベースへの登録準備を行なう。

⑸プロジェクト遂行の目的・意義

「台明寺文書」は一部がすでに大日本古文書『島津家文書』一として編纂されており、本プロジェクトの遂行によって、既刊行物のデジタル化と古文書フルテキストデータベースのコンテンツの充実をもたらした。

⑹作業遂行に関わる内容

①成果の公開方法および開始年度

1998 年度「台明寺文書フルテキストデータベース化プロジェクト」により校正の完了した台明寺文書フルテキストデータは、2001 年度より古文書フルテキストデータベースとして WEB 公開されるに至った。

②遂行経費の概要

なし。

③作業実施の主体およびその支援体制

プロジェクトメンバー

④作業の流れ

「台明寺文書」については、すでに 1997 年度までには大日本古文書分以外をふくめてフルテキストデータが作成されていた。1998 年度の台明寺文書の重要文化財指定とも関係して、このフルテキストデータをサーバーに登録する前処理として、1998 年度に「台明寺文書フルテキストデータベース化プロジェクト」の作業として校正を行なった。校正作業は担当者がそれぞれ分担してあたったため、経費は発生しなかった。

⑺対象史料総量に対する現状データの量・位置づけ

対象史料は全点終了した。

⑻残された課題・問題点

プロジェクト自身に大きな問題は残っていないが、画像史料解析センターの古文書画像分野としては史料画像とフルテキストの連携をどのようにとっていくかが問題となる。これは島津家文書の画像デジタル化の実現との関係で今後の検討が必要であると考えてい

る。またいうまでもない問題としては、フルテキストの校正をさらに厳密化することである。これについてはフルテキストと画像のオープンに対応したテキスト作成のあり方を検討していく必要がある。

25，金石文拓本史料の整理と公開プロジェクト

⑴プロジェクト担当者

（代表）菊地大樹

（メンバー）井上聡・金子拓・川本慎自・藤原重雄、

太田まり子・七海雅人（センター共同研究員）・大塚紀弘・西之原勝

⑵プロジェクト開始年度（終了年度）

1998年度～（継続中）

⑶プロジェクトの基礎となる史料・対象

①東京大学史料編纂所所蔵金石文拓本

②全国研究・展示・所蔵機関所蔵金石文拓本史料群（宮城県立図書館、福島県立歴史博物館、大分県立歴史博物館など）

③全国所在金石文史料の採訪による拓本サンプル（宮城県仙台市・名取市、徳島県上板町他）

⑷プロジェクトの概要

本所所蔵金石文拓本（既整理分）を再整理し、書誌・銘文・研究情報を作成するとともに、撮影を行い、データベース構築によって史料情報化・編年史料化し、公開を目指している。

また、本所全体の採訪事業に連動する形で、宮城県仙台市・名取市、徳島県上板町、埼玉県小川町他に拓本採訪を行っている。採訪基準としては、a.紀年銘の確定するもの、b.人名が残されているもの、c.その他、金石文学的・図像学的に著しい特徴を有するもの、におおむね基準をしぼって進めている。

⑸プロジェクト遂行の目的・意義

本所所蔵金石文拓本史料を、整理・データベース化することにより、歴史情報として広く学界に公開しようとするものである。これにより、文献中心であった歴史史料学の視野を広げることが期待できる。従来から常置されてきた「金石文拓本目録」「金石文拓本編年目録」の成果を継承し、書庫等を再調査した結果、新たに発見された約500点の拓本と合わせ、現時の学界の需要に適合的な形で整理・公開することを目指している。

本所における金石文拓本収集事業は、もともと『大日本史料』等編纂の一環として進められていた。それが中断を余儀なくされたのは、ひとえに太平洋戦争によるのもであった。

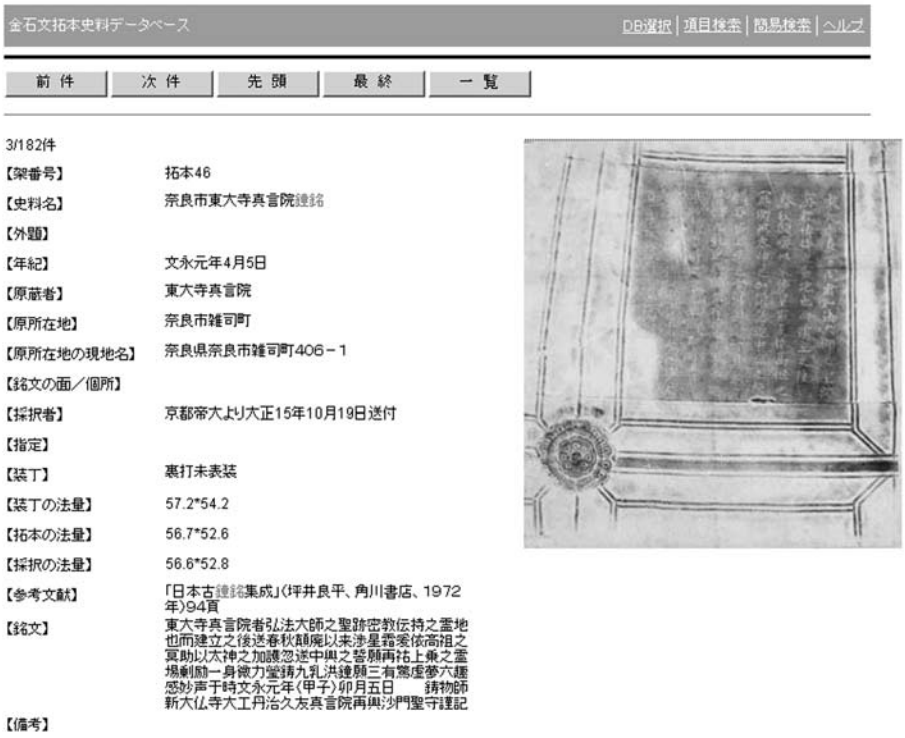
戦後、全国的に見ても稀有の拓本コレクションである本所所蔵金石文拓本史料は、学界に対しては「死蔵」に近い状態で放置された。本プロジェクトの推進により、本所所蔵金石文拓本史料は再び学界から注目され、新しい史料学の動向の中で、活用されることになろう。

金石文拓本史料は、戦後も『大日本史料』等編纂に利用されてきており、現在でも本所の研究・編纂事業を進める上で不可欠の史料群であることに変わりはない。膨大な金石文史料の扱いについては、『大日本史料』各編で懸案になっているようである。今後は、本プロジェクトによる金石文拓本データベースとの連携を考えることにより、編纂を効率化させる方途を研究してゆくことができるであろう。

(6)作業遂行に関わる内容

①成果の公開方法および開始年度

2001 年度、東京大学史料編纂所史料集発刊 100 周年記念特別展『時を超えて語るもの―史料と美術の名宝―』において、「金石文拓本 DB」を試験公開し、その後所内公開している。近日中に所外公開の予定がある。



②遂行経費の概要

これまでに供与された経費の総額は約 317 万円である。年度別の内訳は下記の通り。

1998 年度　70 万円(撮影費)

1999 年度　55 万円(撮影費、デジタル化費)

2000 年度　57 万円(撮影費、デジタル化費、入力費)

2001 年度　25 万円(撮影費、デジタル化費、入力費)

2002 年度　43 万円(紙焼費、入力費)

2003 年度　21 万円(撮影費、入力費)

2004 年度　45 万円(入力費)

2005・2006 年度　なし。科学研究費基盤研究(C)「日本金石文の編年史料化と史料学的分析方法に関する研究」(研究代表者 高橋慎一朗、2005 ～ 2007 年度)の経費による。

③作業実施の主体およびその支援体制

撮影立会い、データベース構築、拓本調査など、作業の主体は、プロジェクトメンバー

がこれを担った。2003年度までは、主に画像史料解析センター非常勤職員が「金石文拓本史料カード」の作成に当たり、2004年度以降は、物件費によるカードの買い上げ方式により作成を継続している。またこのほかに、史料採訪によりプロジェクトメンバーもカード作成を行っている。

④作業の流れ

a.　金石文拓本をマイクロフィルム(モノクロ)によって撮影

b.　TiffG4形式でデジタル化

c.　マイクロフィルムの紙焼写真を作成

d.　研究用として、Jpeg256階調の電子画像を作成

e.　紙焼・デジタル画像をもとに「金石文拓本史料カード」(書誌・銘文・研究情報)を作成

f.　「金石文拓本カード」を入力し電子情報化

g.　拓本1点ごとに35mmによりモノクロ撮影・デジタル化(データベース用サムネイル作成)

h.　以上の電子情報をデータベースに登録、校正の上公開

⑺対象史料総量に対する現状データの量・位置づけ

既整理拓本約1300点

未整理拓本約500点

マイクロフィルム撮影済コマ数約3300コマ(既整理分)

35mmモノクロフィルム撮影済コマ数約1300コマ

金石文拓本史料カード約1300枚

カード入力件数約700件

データベースデータ件数約400件

採訪拓本数約130点

データベース登録件数約300点、450件

⑻残された課題・問題点

データベースのインターネット公開が、当初の計画より遅れている。これについては、原所蔵者との関係、校正作業等の進捗状況や、公開に際しての画面の手直しに関連して費用の発生などの困難が予想されるものの、なるべく速やかに進めたい。

⑼今後の展望・終了の見通し・要望

本所所蔵金石文拓本史料全点のデータベース化・公開が完了した後は、さらに日本金石文データベースに発展させるべく、データ収集、拓本調査、採訪などを充実させ、本所の編纂・研究事業の一環としてプロジェクトを継続させて行く予定である。

⑽関係する研究報告・参考文献など

(研究報告)

2002年3月　画像史料解析センター研究集会「中世画像史料への展望」開催

(参考文献)

菊地大樹（文献案内）「杉山洋「琉球鐘」」（『センター通信』2号、1998年）
菊地大樹（新刊紹介）「『仙台市史』特別編5　板碑」（『史学雑誌』108－3号、1999年）
菊地大樹「東京大学史料編纂所の金石文研究」（『センター通信』7号、1999年）
菊地大樹「金石文史料の可能性」（『歴史評論』606号、2000年）
菊地大樹「東北地方の板碑と死生観」（『前近代日本の史料遺産プロジェクト研究集会報告集2001－2002』2003年）
菊地大樹「金石文」（鵜飼政志他編『歴史を読む』東京大学出版会、2004年）
菊地大樹「中世『文献』史料に見るココロのあり方」（小野正敏他編『モノとココロの資料学』2005年）

⑾ WEBによる成果公開

①第3回外部評価以後の取り組み

基礎データの蓄積はその後も続行しており、さらに、本プロジェクトを基盤として2005年度より科学研究費の交付も受け、現在、宮城県図書館・大分県立歴史博物館所蔵拓本の書誌情報も収集・蓄積しており、それらの成果公開も考えてゆかねばならない。これらの史料情報のデータベースへの登録・所外公開が喫緊の課題である。

② 2006年度リプレイスへの対応

データベース設計について、所外公開に先立ち変更すべき点などが明らかになり、費用発生の可能性や予算措置などにつき検討中である。

26，院宣・綸旨画像のデジタル化プロジェクト

⑴プロジェクト担当者

（代表）近藤成一

⑵プロジェクト開始年度（終了年度）

1999 年度～ 2000 年度

⑶プロジェクトの基礎となる史料・対象

史料編纂所架蔵シートフィルムより院宣・綸旨を撮影したもの 440 点。

⑷プロジェクトの概要

史料編纂所架蔵シートフィルムより院宣・綸旨を撮影したものを選択し、64 ベースプロフォト CD を作成した。

⑸プロジェクト遂行の目的・意義

①院宣・綸旨という特定の様式の文書について、画像の面から研究するための材料を整備する。

②史料編纂所が架蔵するアナログ画像資源のデジタル化を試行する。

⑹作業遂行に関わる内容

①成果の公開方法および開始年度

院宣･綸旨を撮影したシートフィルム 140 点について 64 ベースプロフォト CD を作成し、書庫内に架蔵した。

②遂行経費の概要

本プロジェクトが供与された経費総額は 68.1 万円である。年度別の内訳は下記のとおりである。

1999 年度　11 万円（院宣・綸旨シートフィルム 25 枚のプロフォト CD 作成）

2000 年度　57.1 万円（院宣・綸旨シートフィルム 115 枚のプロフォト CD 作成）

③作業の主体およびその支援体制

院宣・綸旨シートフィルムからのプロフォト CD 作成は業者に発注した。

④作業の流れ

本プロジェクトは、1996 ～ 1998 年度の科学研究費補助金によるプロジェクト「綸旨・院宣の網羅的収集による帰納的研究」（研究代表者 近藤成一、以下「近藤科研」と記す。）を継承するものとして、1999・2000 年度の 2 年間行われた。科研においては院宣・綸旨を撮影したシートフィルム 300 点を対象として 64 ベースプロフォト CD が作成された。本プロジェクトにおいては近藤科研が残した 140 点について 64 ベースプロフォト CD が作成された。これにより、史料編纂所架蔵シートフィルムのうち院宣・綸旨を撮影したものについて 64 ベースプロフォト CD を作成するという目的は、その時点においては達成された。

本プロジェクトは事実上、画像史料解析センターの設立に先行して、科研による 1996 年度に発足しているが、正に画像史料解析センター設立に至る機運の中で企画され実行さ

れたものである。

画像史料解析センター設立の前提の一つは、電算機による画像処理が実用の段階に達し、従来アナログ形態で蓄積されてきた画像資源のデジタル化が課題とされたことであった。1996～1998年度の科学研究費補助金によるプロジェクト「WWWサーバによる日本史データベースのマルチメディア化と公開に関する研究」（研究代表者 加藤友康）により史料編纂所架蔵影写本の画像約20万件がデジタル化され、1996～1997年度の特定研究経費によるプロジェクト「東京大学史料編纂所所蔵文書の伝来過程についての研究」（研究代表者 保立道久）においては史料編纂所所蔵貴重書137書目が撮影され、その画像4,607件がデジタル化された。

アナログ画像のデジタル化のためには多額の経費を要し、経費を獲得するためには特定の研究目的が設定される必要があった。本プロジェクトは、画像史料解析センターが設立され、その研究課題の一つとして古文書画像の解析が設定される中で、院宣・綸旨という特定の課題を掲げてシートフィルム形態のアナログ画像のデジタル化を試みるものであった。

なお本プロジェクトにより作成された院宣・綸旨のデジタル画像は、たとえば2006年度の人文社会系研究科・文学部共通講義「日本中世古文書学」（担当近藤成一）においても、和田幸大技術専門職員の協力を得て院宣・綸旨の筆跡研究が行われる中で活用されている。

⑺対象史料総量に対する現状データの量・位置づけ

当初目標とした440点のデジタル化は完了した。

⑻残された課題・問題点

本プロジェクトの終了後においても史料編纂所が架蔵するシートフィルムは増加しているが、今日の課題としては、その中で院宣・綸旨に関するものを抜き出して補充するというよりも、シートフィルム全体のデジタル化を検討すべきであろう。

⑼今後の展望・終了の見通し・要望

今後はシートフィルムの全体、さらには史料編纂所が架蔵するアナログ画像資源の全体のデジタル化を検討すべきである。また撮影段階からデジタル形態で史料画像を収集することも検討すべきである。

その際にまず問題となるのがデジタル画像の保管形式である。本プロジェクトにおいては、その当時において最も高精細の形式と考えられていた64ベースプロフォトCDを採用したが、今日では検討しなおす必要が生じている。またデジタル画像を保存する媒体とそれを保守する体制についても検討しなければならない。これらの課題は本プロジェクトに限定されるものではないが、本プロジェクトを含めてデジタル画像の利用を前提とするプロジェクトを推進するための共通の課題である。

⑽関係する研究報告・参考文献など

『綸旨・院宣の網羅的収集による帰納的研究』（1996年度～1998年度科学研究費補助金研究成果報告書、研究代表者近藤成一）、1999年3月

27, 本所所蔵益田家文書の古文書画像公開プロジェクト

⑴プロジェクト担当者

（代表）久留島典子

（メンバー）

⑵プロジェクト開始年度（終了年度）

2000 年度のみ。

⑶プロジェクトの基礎となる史料・対象

史料編纂所所蔵「益田家文書」

⑷プロジェクトの概要

史料編纂所の公開する古文書フルテキストデータベースにおいて、『大日本古文書 益田家文書』テキストに史料画像をリンクさせ、公開に供する。

⑸プロジェクト遂行の目的・意義

1999 年度に『大日本古文書　益田家文書之一』が刊行されたのに伴い、WEB 上で、そのフルテキスト情報と、それにリンクした形で、文書画像を公開することを目的とした。これによって出版物、WEB 上の索引としてのフルテキスト情報、古文書画像情報を、一体として利用できる形が完成することをめざした。当面は刊行された部分について、順次フルテキスト・古文書画像の公開作業をすすめることで、所内外の研究環境の整備を図るものである。

⑹作業遂行に関わる内容

②遂行経費の概要

フルテキスト情報の入力等は、科学研究費研究成果公開促進費「日本中世古文書フルテキストデータベース」（研究代表者 久留島典子、2000 年度）にて行い、センター予算枠にて申請した経費は古文書画像公開にかかわる費用（500 コマの撮影費と二値化 CD-R 作成費用）のみであった。しかし、撮影等は、巻一収録分 500 コマに限るのではなく、益田家文書出版予定分全体として行った方が効率的であることが明確となり、別途費用を獲得する方向に計画変更した。そこで、当初承認されたセンター予算を返上した。

④作業の流れ

②に記したように、益田家文書出版予定分全体の撮影費とデジタル化経費はかなりの額になり、別途科学研究費特別推進研究（COE）「前近代日本史料の構造と情報資源化の研究」（研究代表者 石上英一、2000 ～ 2004 年度）に 予算枠等を申請する方針をとることにした。その結果 COE 経費によって、上記の撮影・デジタル化を実施し、現在史料編纂所所蔵目録データベースより画像を公開している。

⑺対象史料総量に対する現状データの量・位置づけ

全点撮影・デジタル化を終了し、所蔵史料目録より公開に供している。

⑻残された課題・問題点

現在、Web 上で所蔵史料目録とリンクして、益田家文書出版予定分全体の文書画像を

公開しているが、『大日本古文書　益田家文書』のフルテキスト情報とのリンク作業が依然残されている。

⑽関係する研究報告・参考文献など

『大日本古文書　益田家文書』一・二

28，本所所蔵文書等の料紙分析プロジェクト

⑴プロジェクト担当者

（代表）井上聡

（メンバー）高島（阿部）晶彦・谷昭佳

⑵プロジェクト開始年度（終了年度）

2003年度のみ。

⑶プロジェクトの基礎となる史料・対象

科学研究費特別推進研究（COE）「前近代日本史料の構造と情報資源化の研究」（研究代表 石上英一、2000～2004年度）の史料体グループが撮影したデジタルデータおよび本所所蔵文書のデジタル撮影データ

⑷プロジェクトの概要

画像史料解析センタープロジェクト「荘園絵図プロジェクト」、科学研究費基盤研究（A）「禅宗寺院文書の古文書学的研究」（研究代表 保立道久、2002～2004年度）、COE科研史料体グループと連携し、各種史料の料紙の調査・分析を行った。

⑸プロジェクト遂行の目的・意義

各種研究グループにて蓄積されつつあったデジタル撮影データにつき、共同利用の方法を確立することを目的とした。またデジタル撮影の仕様ならびに管理ツールの確立につき実験を行い、ここで得た課題をふまえ「所内デジタル素材に関する実験プロジェクト」へと発展解消をした。

⑹作業遂行に関わる内容

②遂行経費の概要

センターより配当された経費は10万円で、2003年度のセンター基盤経費との合算により、マイクロスコープ撮影機器を購入した。

③作業実施の主体およびその支援体制

プロジェクトメンバーによる。

⑤作業の流れ

井上・高島が史料体グループより引き継いだデータの整理ならびに解析を行った。また谷が購入したマイクロスコープを活用して本所所蔵文書の拡大デジタル撮影を行い、高島が分析を行った。

⑻残された課題・問題点

デジタルデータの管理運用、とくに接写撮影・顕微鏡撮影によって獲得されたものは、管理データを正確に記述しなければならず、系統的かつ有効な共同利用をするためには、全所的な対応が必要である。また各種研究グループにてこうした研究資産が生成されているにもかかわらず、管理・運用がほとんどなされていない状況にあることを確認した。

⑼今後の展望・終了の見通し・要望

課題・問題点の大きさを鑑み、より多くの関係者に働きかけ2004年度より「所内デジタ

ル素材に関する実験プロジェクト」を発足させた。

29，特別展中間生成物転用検討プロジェクト

⑴プロジェクト担当者

（代表）藤原重雄

（メンバー）宮崎勝美（図書部長）・保谷徹（特別展幹事）・井上聡・川島慶子（図書部研究支援推進員）

⑵プロジェクト開始年度（終了年度）

2003年度

⑶プロジェクトの基礎となる史料・対象

東京国立博物館と共催した特別展「時を超えて語るもの―史料と美術の名宝―」（2001年12月11日～翌年1月27日）の準備にあたって生成した各種データ等。

⑷プロジェクトの概要

各種データ等の転用・再利用の方策を検討する。

⑸プロジェクト遂行の目的・意義

所内の研究活動の中で生ずるさまざまなデータ類を共有化し、再利用しやすい形で保管することにより、有効活用の可能性を考える。また、近年増大する一方の評価・点検・広報的な雑務にかかる所員の負担を軽減する。

⑹作業遂行に関わる内容

①成果の公開方法および開始年度

④にまとめて記す。

②遂行経費の概要

10.5万円　画像処理ソフト費・デジタル化費

③作業実施の主体およびその支援体制

④にまとめて記す。

④作業の流れ

中心となったのは、大量に撮影したシートフィルムの整理と配架である。これは図書部史料掛の業務であるが、撮影・展示に当たった教員の関与も必要となる。また図録に使用した写真は、所内外からの問い合わせが増えることが明瞭で、所蔵史料目録データベースに図録掲載の情報をつけ加え、図書部閲覧掛の作業用の図録へも転記した。この他、事前調査の際に得られた情報なども、充分にではないが図書部へ還流させた。

図録制作時に派生した作業用のデジタルデータは、所内ネットワーク上に置き、要覧や予算要求用資料等の広報資料の作成に利用できるようにした。ただし、ネットワークサーバの容量との関係で、データを常にサーバ上に置いておくことができず、所内でも個人的関係による提供となってしまった面がある。精度や均質性の面で、所蔵史料目録データベースから参照可能な画像データとして提供するにはふさわしくないと判断した。一方、試行的な作業として、幕末維新画像史料研究プロジェクトと連携して、巻子本（倭寇図巻、老農夜話）画像の接合をおこなった。これは、比較的軽い画像をHTML形式で通常のブラ

ウザでスクロールして参照できるものである(原理的には大きな画像でも可能である)。

展覧会前に広報用として保谷が作成したサイトを発展させて、デジタル(WBE)版の図録の可能性も検討してみた。展示および図録解説の記述は、出陳史料相互の関係を重視するよう構成・調整しており(この点は、大西廣氏「「コト」に裏付けられて「モノ」が息づく」『武蔵大学学芸員課程報告書』13、2001 ～ 2002 年、に企画側として有難い評価を頂いた。)、本所以外の所蔵品を含んで展示を構成したことが逆にネックとなった。代表的な貴重書を紹介するギャラリーへの方向転換も考えたが、そのこと自体を目的として、最初から史料選定・編集・設計する方がよいだろうと判断した。ただ後に、COE もしくは図書部で所蔵史料目録データベースから参照できる貴重書解題に図録解説も転用することになった。校正前の解説文章のデータは保管しており、活用機会が得られたわけだが、研究グループにデータの提供ができなかった。これは所内の連絡調整ミスである。

⑺対象史料総量に対する現状データの量・位置づけ

⑹－④にまとめて記す。

⑻残された課題・問題点

⑹－④・⑼にまとめて記す。

⑼今後の展望・終了の見通し・要望

多方面への利用に開けたデジタルの特性が謳われるが、環境問題におけるリサイクルの逆説に似て、再生・再利用の可能性が逆に負荷をかけすぎることにもなって、当面の目的と先々の構想とのバランス感覚が求められることを実感した。費用・技術面での変動もあり、適切なあり方も流動的である。特別展に限らず、個々の所員の日常的な調査・研究活動においても、各種のデジタルデータが生成されており、可能なものについては共有し無駄を省くことが必要との認識から、「デジタル化実験」プロジェクトに課題を吸収することにした。

⑽関係する研究報告・参考文献など

藤原重雄「特別展図録の編集」(『センター通信』17 号、2002 年)

藤原重雄「東京で展覧会カタログを探すには」

(http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/personal/fujiwara/catalogue-library.html)

⑾ WEB による成果公開

①第 3 回外部評価以後の取り組み

⑹－④にまとめて記す。

30，所内デジタル素材に関する実験プロジェクト

⑴プロジェクト担当者

（代表）宮崎勝美

（メンバー）林譲・藤原重雄・井上聡（幹事）・谷昭佳・髙島晶彦・中村尚暁・阿蘇竜太（2004年度のみ）

⑵プロジェクト開始年度（終了年度）

2004年度～（継続中）

⑶プロジェクトの基礎となる史料・対象

本所所蔵史料の既撮影データ、史料集発行100周年記念特別展開催時の各種撮影データ、本所所蔵レクチグラフなど（レクチグラフについては、『東京大学史料編纂所報』31号，184～187頁参照。）。

⑷プロジェクトの概要

デジタル画像生成の標準化とその保管方法、共同利用化を踏まえたディレクトリのあり方などについて、各種の実験をおこなうとともに、先行センタープロジェクトのうち、密接な関連を有する「本所所蔵文書等の料紙分析プロジェクト」「玉ものまへプロジェクト」「特別展中間生成物転用検討プロジェクト」の3事業を発展継承させる。

⑸プロジェクト遂行の目的・意義

近年発展著しいデジタル撮影技術ならびに蓄積データにつき、各種の実験を行い、所内にその成果を還元することを目的とする。今後の史料編纂所における撮影・記録のあり方を検討し、本格的なデジタル時代への移行準備を行うことに一定の意義があるものと考えている。

⑹作業遂行に関わる内容

①成果の公開方法および開始年度

レクチグラフ撮影データは2006年度より一部を所蔵目録データベースにて所内公開を行った。

②遂行経費の概要

3年間にわたり画像センターより供与をうけた経費は、2004年度 92.5万円、2005年度21.5万円、2006年度 23万円の総計137万円となる。支出内訳の概要としては、画像ストレージ講入55万円、デジタル化外注費38万円、カメラ関係備品費24万円、レクチグラフ製本関係消耗品15万円、プリンタ5万円となっている。

③作業実施の主体およびその支援体制

メンバーが中心となり諸課題を担当し、技術部・図書部の組織的支援を受けている。

④作業の流れ

具体的活動として2004年度には、技術部写真室が蓄積してきたデジタルデータの分析・整理、ならびに科学研究費特別推進研究（COE）「前近代日本史料の構造と情報資源化の研究」（研究代表 石上英一、2000～2004年度）撮影のデータ整理を行った。並行して所内

の各研究グループが蓄積しているデジタル画像の形式・状態・保有状況の聞き取り調査をすすめ、既に各種大量のデータが生成されていること、これらデータが組織的に蓄積されておらず、撮影者・調査者のもとに分散保有されている現状を確認した。本プロジェクトでは緊急避難として写真室に画像ストレージを導入し、CD-R や DVD などの各種媒体で保有されているデータの散逸を防ぐこととした。またデータの共同利用を実現するために、史料撮影のデータ仕様を策定することに着手した。これはデジタル撮影においては、比較的簡便に赤外線や顕微鏡を用いた特殊撮影が多用されており、仕様の規格化・管理の規格化が必須と考えたことによる。上記の取り組みのほか、特別展中間生成物転用検討プロジェクトよりの事業継承として、史料集発刊 100 周年記念特別展に際して撮影したフィルム 150 点のデジタル化を実施した。

2005 年度には、前年度確認したデジタルデータの現状について歴史情報処理委員会ほか所内の各種会議体に報告し、全所的な取り組みを働きかけた。残念ながら十全に受け入れられることはなかったが、課題の存在を認知させることができた。また科学研究費基盤研究(A)「画像史料解析による前近代日本の儀式構造の空間構成と時間的遷移に関する研究」(研究代表 加藤友康、2004 ～ 2007 年度)によるサーバーおよび管理ソフトを利用した実験に参加し、画像データの共有化を模索した。デジタル撮影仕様の確立という点においては、所蔵史料のうち写真史的にも希少価値の高いレクチグラフを選び、デジタル化実験を行い、撮影から画像処理・印刷に至る詳細な仕様を策定することができた。加えて、玉ものまへプロジェクトより継承した事業として、本所所蔵の奈良絵本「玉ものまへ」の閲覧用 HTML 画面を作成した。

2006 年度は、レクチグラフ(約 600 冊)の現状を調査して状況を把握するとともに、図書部･技術部との連携のもと作業工程を定め､約 20 冊分の撮影および画像処理を実施した。併せて WEB による所内公開を実践したが、現サーバーではセキュリティに課題が残ることを鑑み､ストレージ内での保存に止めている。また原本が焼失･焼損した「金剛輪寺文書」について、本所撮影フィルムのデジタル化の要望があったことから、比較的精度の高いスキャン・画像調整を実施した。

⑺対象史料総量に対する現状データの量・位置づけ

「玉ものまへ」に関する諸作業、特別展時撮影フィルムのデジタル処理については終了。レクチグラフのデジタル撮影については、まだ 30 分 1 にとどまっている。

⑻残された課題・問題点

本プロジェクト発足の主たる目的であったデジタル画像の運用方法の確立と共有化については、未だ解決されていない状況にある。しかし前近代日本史情報国際センターの新設など、本所の電算事業総体の見直しが進んでおり、結果として本プロジェクトの主目的は近々に達成されることになるだろう。その進捗状況を眺めつつ事業内容を整理し、レクチグラフ等のデジタル化に特化してゆきたい。

⑼今後の展望・終了の見通し・要望

レクチグラフを 5 年程度で終え、さらに台紙付写真など扱いが難しいが利用価値の高い

所蔵史料を対象として、10年程度の取り組みを続けてゆくことを考えている。

⑽関係する研究報告・参考文献など

井上聡(臼井佐知子・高松洋一・新江利彦・相原佳之と共著)「デジタル化資料はオリジナル資料をこえられるか」(『史資料ハブ』9号、2007年3月)

31，崩し字データベース開発プロジェクト

⑴プロジェクト担当者

(代表)久留島典子

(メンバー)石上英一・小宮木代良・井上聡(幹事)・和田幸大

⑵プロジェクト開始年度(終了年度)

2005年度～（継続中）

⑶プロジェクトの基礎となる史料・対象

所蔵史料目録・古文書目録データベースにリンクする史料編纂所所蔵原史料のデジタル画像。

⑷プロジェクトの概要

科学研究費特別推進研究(COE)「前近代日本史料の構造と情報資源化の研究」（研究代表 石上英一、2000～2004年度)にて開発した崩し字データベースの継続的開発および改良を行う。

⑸プロジェクト遂行の目的・意義

難読字形を読み解くスキルを獲得し、それを次世代に伝えていくことは編纂者・歴史研究者としては必須である。所員が編纂過程で解読しえた字形情報を電子上に蓄積することで、所内外を問わず読解能力向上を図ることは日本史学一般に裨益すると考える。

⑹作業遂行に関わる内容

①成果の公開方法および開始年度

史料編纂所コンピュータシステムを通じた「電子くずし字字典」データベースの公開（2006年度より）。

②遂行経費の概要

画像センタープロジェクト経費としては、2005年度に25万円、2006年度に20万円を供与されている。2005年度はマイクロフィルムのデジタル化費用に充て、2006年度は5万円を引き続きデジタル化費用に、15万円をシステム改善費用に、それぞれ充当した。デジタル画像からデータを切り出すための人件費については、2005年度より科学研究費基盤研究（A）「日本前近代史料の国際的利用環境構築の研究」（研究代表 石上英一、2005～2008年度）から週1人日（研究支援員）の援助を受け、さらに2006年度からは角川文化振興財団の寄付金を得て週4人日（研究支援員および謝金雇用）を確保したところである。

③作業実施の主体およびその支援体制

2006年度より角川文化振興財団寄付金によって雇用した各種研究員が字形データを蒐集し、これを和田および支援員の宮崎肇が校正する。システムの維持・改良については井上が主として担当し、久留島・石上・小宮が指導する。

④作業の流れ

本所所蔵史料デジタル画像より文字及び語彙の字形データを採取し、これに出典・年次などの情報を付加し、データベースシステムに登録する。登録された字形情報を校正システムにて精査・校正した上で、公開検索システムへの移行を図っている。

⑺対象史料総量に対する現状データの量・位置づけ

2004年度までに「史料編纂所所蔵貴重書のデジタル化・公開プロジェクト」（1997～1999年度、代表　近藤成一）がデジタル化した史料編纂所所蔵古文書画像を中心に約15万画像を蓄積し、データベースの所内実験公開を達成した。当センタープロジェクト移行後は、古記録・典籍・聖教画像に対象を広げデータ集積を進めるとともに、検索可能データを20万件まで増加することを目指している。新規データ登録件数は、人件費を得た2006年度より毎年2万データを目指したが、史料編纂所コンピュータシステムのリプレイス年に該当したため、移行準備ならびに検収に手間取り、新規入力は1万余件に止まった。これは本データベースが単独で機能するものではなく、所蔵史料目録データベースや古文書目録データベースに依拠する部分が大きいため、更新に伴う影響が他より大きく出てしまったことによる。なお2006年夏より、「電子くずし字字典データベース」として広く所外に公開を開始した。現在、所内外にて利用が進み、研究・編纂を援助する道具として活用されるに至っている。

⑻残された課題・問題点

現在はプロジェクトメンバーおよび関係研究員のみが、字形データを入力しているが、今後はよりインターフェイスを改良し、全所員が随時入力できるよう改良をすすめてゆきたい。かかる改良により、対象となる史料群の広がり、登録件数の飛躍的増加を実現したい。

⑼今後の展望・終了の見通し・要望

当面の目的としては、2008年度までにデータを20万件まで蓄積することにある。これを達成したのちは、データベース機能の高度化や崩し字字典の商品化など、新たな段階に移行することを予定している。機能の高度化については、コンピュータによる字形字体の相似認識などを、花押遺纂プロジェクトや前近代日本史情報国際センターなどとの協力によって実現を図りたい。また学外の研究組織との連携や、各種競争的資金や補助金の獲得を継続的に実現してゆくことが必須と考えている。

⑽関係する研究報告・参考文献など

井上聡「崩し字データベースの開発」（特別推進研究成果報告書『前近代日本史料の構造と情報資源化の研究』2005年3月）

⑾ WEBによる成果公開

①第3回外部評価以後の取り組み

2004年度段階ではデータ数が3万件であったが、現在17万件弱に増加した。システム改良を進め、2006年度から検索システムの公開を実施している。

② 2006年度リプレイスへの対応

リプレイス直後は、システム運用がかなり不安定で、研究員が作業できない期間が発生した。協力会社のキャパシティとも関わり、検収にも相当程度の時間を要したが、その間に改良を加えることもできた。現在は安定して運用している。

32，教養学部美術博物館所蔵装束類図版目録プロジェクト

⑴プロジェクト担当者

（代表）藤原重雄

（メンバー）折茂克哉（教養学部美術博物館助手）

⑵プロジェクト開始年度（終了年度）

2005 年度（実質的には 2004 年度後半より）。

⑶プロジェクトの基礎となる史料・対象

教養学部美術博物館所蔵の大正度即位儀礼の有職装束類。

⑷プロジェクトの概要

教養学部美術博物館で開催される「王朝貴族の装束展―衣服を通して見る文化の国風化―」（2005 年 5 月 17 日～ 6 月 12 日）にあわせて、同館所蔵の大正度即位儀礼の有職装束類を調査し、図版目録を刊行する。

⑸プロジェクト遂行の目的・意義

東京大学に所在する学術資源の調査・研究・公開を、他部局との連携によって実現する。

⑹作業遂行に関わる内容

①成果の公開方法および開始年度

展示実施、図録刊行（2005 年度）。

②遂行経費の概要

配分予算は 55 万円であったが、約 24.5 万円を執行して残額は返上した。プロジェクトでは目録出版までの諸費用の全てはまかなえず、印刷・製本費を美術博物館と分担し、センター経費より支出している。

③作業実施の主体およびその支援体制

④にまとめて記す。

④作業の流れ

調査と撮影は、科学研究費基盤研究（A）「画像史料解析による前近代日本の儀式構造の空間構成と時間的遷移に関する研究」（研究代表者 加藤友康、2004 ～ 2007 年度）での研究対象とすることにし、科学研究費基盤研究（A）「荘園絵図の史料学とデジタル画像解析の発展的研究」（研究代表者 林譲、 2004 ～ 2007 年度）で試みていた撮影実験の応用を含んでいる。日程や設備面で制約のあるなか、本所史料保存技術室の写真担当（谷昭佳・中村尚暁）には大変なご助力を得た。図録編集の実質的作業は、藤原の全体統括のもと、版面は平松左枝子が DTP で作成した。表紙デザインは史料保存技術室の村岡ゆかりによる。詳細は『センター通信』に掲載の報告に記した。

本目録の販売は制度上の制約から行わなかったが、美術博物館の活動・運営に対する寄附に対して贈呈し、「駒場友の会」から本所に奨学寄付金 19 万円を受贈した。1000 部作成し、170 部を美術館・博物館へ寄贈、340 部を観覧者からの寄附への謝礼とし、学内外の協力者・関係者にも配布した。若干残部があるので、関係の美術館・博物館や大学・図書館などへ

は、ご要望があればご寄贈したい。

⑺対象史料総量に対する現状データの量・位置づけ

ほぼ全点。（複数ある狩衣などは代表する一点。保存状態などとの関係から、弓と太刀は未撮影・未掲載。）

⑻残された課題・問題点

図版や版面のデジタルデータを保管しており、再利用も考えたいが目下その余裕がない。本所の所蔵史料目録データベースからの画像公開には向いておらず、ギャラリー的なものが適当であろう。装束類は文化学園服飾博物館の所蔵品データベースと補い合う関係になり、京都府立総合資料館の「京都北山アーカイブス」では「大正大禮京都府記事關係寫眞材料」として使用当時の古写真がWEB公開されており、『大礼記録』の写真・図面類も、いずれ国立公文書館のデジタルギャラリーでの素材となりうるから、これらをリンクした大正大礼関係のポータルサイトも制作できるだろう。WEBという敷居の低いメディアにおいては、質を落とさずに近づきやすく提示する工夫にも、意識を働かせてゆきたい。今後は社会的な支援を得るためにも、必要となってくる側面だろう。

⑼今後の展望・終了の見通し・要望

通常のセンタープロジェクトの申請・承認の手続きではスケジュール的に間に合わず、2004年度内に申請・承認をいただく配慮に預かり、実質的な作業は前年度より開始した。現行のプロジェクトの制度では、実質と年度とがずれてしまう場合があるので、臨機の柔軟な運用も望ましい。出版物単位に規定される本所の硬直化した五大部門体制に対して、学内他部局・外部機関や所外研究者との共同研究の受け皿として、センタープロジェクトが機能した事例にはなると考えたい。

⑽関係する研究報告・参考文献など

東京大学教養学部美術博物館・史料編纂所附属画像史料解析センター編『東京大学教養学部美術博物館　資料集二　―有職装束類―』（2005年）

藤原重雄「東京大学教養学部美術博物館特別企画展示「王朝貴族の装束展―衣服を通して見る文化の国風化―」のご案内」（『センター通信』29号、2005年）

藤原重雄「『東京大学教養学部美術博物館　資料集二　―有職装束類―』の刊行（付・正誤表）」（『センター通信』33号、2006年）

33，中国档案プロジェクト

⑴プロジェクト担当者

（代表）保谷　徹

（メンバー）黄　栄光（共同研究員、中国科学院自然科学史研究所）

⑵プロジェクト開始年度（終了年度）

2006年度～（継続中）

⑶プロジェクトの基礎となる史料・対象

中国第一歴史档案館（故宮西華門内）が所蔵する清朝档案1000万件のうち日本関係档案のデジタル撮影を実施する。

⑷プロジェクトの概要

このプロジェクトは、2006年4月に東京大学史料編纂所と中国第一歴史档案館が取り交わした覚書にもとづき、①軍機処録副、②宮中朱批奏摺、③外務部档案など、主要な3つの史料群を対象とする。①②は中央・地方の官吏からの上申に対して皇帝が決済して指示を加えた史料であり、②がそのオリジナルで、①は軍機処で作成したコピーにあたる。③は1860年に設立された総理衙門以降の外交档案である。デジタル化される日本関係档案は、第一歴史档案館によれば、それぞれ①4000件、②5000件、③3000件の計12000件と予想されている。

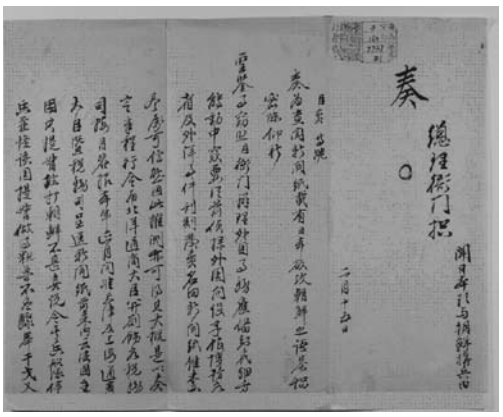
プロジェクトは3年計画であり、この間毎年档案館の研究者を招聘して日本で国際研究集会を開催する。

⑸プロジェクト遂行の目的・意義

中国第一歴史档案館が所蔵する日本関係档案について、総合的な目録が作成され、系統的な調査収集が行われるのはこれが初めてであり、国内では沖縄県が実施した中琉関係史料収集のプロジェクトに匹敵する。現在分析中だが、档案館側は今回提供した日本関係档案の半数以上はこれまで未紹介（未刊行）の史料ではないかと推定している。本プロジェクトによって、日本関係档案の主要部分が目録化され、画像データのかたちで学界が共有できることの意義は大きい。

収集対象となる清朝档案は、18世紀半ばから20世紀初頭（辛亥革命まで）の範囲におよび、後代になるほどその数量は増している。史料編纂所が編纂対象とする時期の史料はおおむね収集史料の5％程度であろうかと思われるが、ここには江戸期の漂流民の処置に関

するものや幕末の派遣船、幕末の征韓論に関するものなど、貴重な史料画像が含まれている。



もちろん、日清修好条規、台湾出兵、日清・日露戦争、義和団事変の関係档案など、一次史料としての清朝档案の発掘が、近代日中関係史に裨益するところは大であり、学界さらにはマスコミからも大きく注目されていることは言うまでもない。

⑹作業遂行に関わる内容

①成果の公開方法および開始年度

〔研究会〕

「第1回日本関係清代档案をめぐる国際研究集会」(2006年7月)

科学研究費基盤研究(A)「前近代東アジアにおける日本関係史料の研究」(研究代表者 保谷徹、2003～2006年度)および科学研究費基盤研究(A)「日本前近代史料の国際的利用環境構築の研究」(研究代表者 石上英一、2006～2009年度)と連携。

「第2回日本関係清代档案をめぐる国際研究集会」(2007年5月)

東京大学史料編纂所と日本学士院による共催(日本学士院の在外未刊行日本関係史料収集事業の一環)。

②遂行経費の概要

2006年度　323万円

撮影機材一式(デジカメ・撮影台・PCほか)	63.5万円
デジタル撮影・目録作成費	133万円
総計	196.5万円(126.5万円を繰越)

※2006年度分の档案画像数が見込みを下回ったため、成果進行基準を適用した。

③作業実施の主体およびその支援体制

プロジェクトメンバー及び本所技術部写真室谷昭佳氏。

④作業の流れ

本所所員谷昭佳氏の同行・協力を得て、現地にデジタル撮影の機材を設置し、現地担当者と撮影手順等について打合せを行い、撮影および目録の作成を依頼した。2007年2月末までに、2006年度分の撮影データおよび目録データ(軍機処録副2367点・撮影数4939コマ)を受理している。

⑺対象史料総量に対する現状データの量・位置づけ

全撮影予想コマ数20000点のうち、現在4分の1強に至っている。

⑻残された課題・問題点

第２年次にあたる2007年度以降のプロジェクトは、科学研究費基盤研究(A)「東アジアの国際環境と中国・ロシア所在日本関係史料の総合的研究」(研究代表者 保谷徹、2007年度～)の一環として行われる予定である。当初見込んだ数量は下方修正される可能性があるが、それでもトータルでは１～２万コマの档案画像が収集されるものと思われる。この档案画像を閲覧するシステムを工夫することは今後のプロジェクト最大の課題である。目録の翻訳とデータベース化を進め、このデータは外部からも検索可能なものとし、画像データそのものは(外部研究者も)史料編纂所の所内端末で閲覧することができるような工夫が必要である。

⑼今後の展望・終了の見通し・要望

撮影すべき史料の総量は変動が予想されるが､数年のうちで目的を完遂する予定である。今後は、中国史研究者や近代史研究者などとの連携・共同によって、档案史料の読解と分析をすすめていくことも大事になる。

⑽関係する研究報告・参考文献など

科学研究費基盤研究(A)研究成果報告書『前近代東アジアにおける日本関係史料の研究』(研究代表者　保谷徹、2007年３月)

檔號	文種	官職	責任者	題名	具文時間
03-7750-028	錄副奏摺	福建巡撫	劉鴻翔	奏為循例撫恤咨送赴粵商船搭載日本國難夷歸國事	道光二十一年五月初六日
03-7750-029	錄副奏摺	護理浙江巡撫	管遹群	奏為撫恤日本遭風難夷並護送附搭銅商船歸國事	道光二十三年七月十七日
03-7750-030	錄副奏摺	浙江巡撫	管遹群	奏為撫恤日本遭風難夷並護送附搭歸國事	道光二十三年十月十五日
03-7750-031	錄副奏摺	浙江巡撫	梁寶常	奏報江蘇省送到日本國遭風難夷附搭銅船回國日期等事	道光二十六年七月初八日
03-7750-032	錄副奏摺	浙江巡撫	吳文鎔	奏為撫恤遭風日本難夷並護送附搭回國事	道光三十年十一月二十九日
03-7750-033	錄副奏摺	江蘇巡撫	楊文定	奏為遭風日本難夷漂收內地循案護送附搭回國事	咸豐元年八月二十日
03-7750-034	錄副奏摺	浙江巡撫	黃宗漢	奏為撫恤遭風日本難夷並循例護送附搭回國事	咸豐三年六月十七日
03-7817-072	錄副奏摺	署理江蘇巡撫	許乃釗	奏為琉球日本二國遭風難夷吉太郎等漂至崇明妥為撫恤並委員送赴浙聞分別交辦回國事	咸豐三年十月十九日
03-9518-017	錄副奏片	浙江巡撫	晏端書	奏為日本國向無船舶駛乍浦銷售銅斤並官商民商銅船難以擬運到京事	咸豐七年八月初十日*
03-9657-014	錄副奏片	出使日本使臣	何如璋等	奏為刊用理事官鈐記事	同治四年十一月十五日*
03-7737-021	錄副奏摺	總理各國事務	奕訢等	奏為密陳日本欲攻朝鮮請旨可否密咨朝鮮備防事	同治六年二月十五日
03-7737-022	錄副奏摺	禮部尚書	全慶等	奏為朝鮮國王為密咨預防日本滋擾請轉奏謝恩事	同治六年四月二十四日
03-7737-023	咨文	禮部		照錄朝鮮國王為查閱日本欲攻朝鮮新聞紙飭令預防致謝事咨文	同治六年四月二十四日
03-7737-026	錄副奏摺	禮部尚書	全慶等	奏為朝鮮國王查明日本欲攻朝鮮並抄錄日本平義達回書等咨請轉奏事	同治六年十二月二十二日
03-7737-027	咨文	禮部		照錄朝鮮國王為聞日本欲攻朝鮮委探並抄錄日本太守平義達回書請禮部轉奏備鑒事咨文	同治六年十二月二十二日
03-7737-028	信函	禮部		照錄日本對馬州太守拾遺平義達為日本欲攻朝鮮為偽妄無根事致朝鮮禮曹參判李沇信函	同治六年十二月二十二日

第４頁

3.　資料集

研究組織

センタースタッフ

1997(平成 9)年度　黒田日出男(教授・センター)・宮地正人(教授・センター)・鶴田啓(助教授・近世)・高橋典幸(9 月～、助手・センター)

1998(平成 10)年度　黒田日出男(教授・センター)・井上聡(助手・センター)・鶴田啓(助教授・近世)・高橋典幸(助手・センター)

1999(平成 11)年度　黒田日出男(教授・センター)・井上聡(助手・センター)・馬場章(助教授・近世)・高橋典幸(助手・センター)

2000(平成 12)年度　黒田日出男(教授・センター)・井上聡(助手・センター)・杉本史子(助教授・近世)・木村直樹(助手・センター)

2001(平成 13)年度　黒田日出男(教授・センター)・井上聡(助手・センター)・杉本史子(助教授・近世)・木村直樹(助手・センター)

2002(平成 14)年度　黒田日出男(教授・センター)・井上聡(助手・センター)・保谷徹(助教授・近世)・木村直樹(助手・センター)

2003(平成 15)年度　黒田日出男(教授・センター)・西田友広(助手・センター)・保谷徹(助教授・近世)・木村直樹(助手・センター)

2004(平成 16)年度　石上英一(教授・センター)・西田友広(助手・センター)・小宮木代良(助教授・近世)・保谷徹(助教授・近世)・林譲(教授・特殊)

2005(平成 17)年度　石上英一(教授・センター)・西田友広(助手・センター)・保谷徹(助教授・近世)・小宮木代良(助教授・近世)・林譲(教授・特殊)

2006(平成 18)年度　石上英一(教授・センター)・末柄豊(助教授・中世)・保谷徹(教授・近世)・山口和夫(助教授・近世)・高橋敏子(助教授・古文書古記録)

2007(平成 19)年度　石上英一(教授・センター)・末柄豊(准教授・中世)・保谷徹(教授・近世)・山口和夫(准教授・近世)・高橋敏子(准教授・古文書古記録)

客員教官・教員

1997(平成 9)年度　米倉迪夫(10 月 1 日～)(東京国立文化財研究所情報資料部文献資料室長)

1998(平成 10)年度　米倉迪夫(東京国立文化財研究所情報資料部長)

1999(平成 11)年度　島尾新(東京国立文化財研究所情報資料部写真資料研究室長)

2000(平成 12)年度　島尾新(東京国立文化財研究所情報資料部写真資料研究室長)

2001(平成 13)年度　久留島浩(国立歴史民俗博物館歴史研究系助教授)

2002(平成 14)年度　久留島浩(国立歴史民俗博物館歴史研究系教授)

2003(平成 15)年度　鈴木廣之(東京文化財研究所美術部日本東洋美術研究室長)

2004(平成 16)年度　鈴木景二(富山大学人文学部助教授)
2005(平成 17)年度　鈴木景二(富山大学人文学部助教授)
2006(平成 18)年度　青山宏夫(国立歴史民俗博物館歴史研究系助教授)
2007(平成 19)年度　青山宏夫(国立歴史民俗博物館歴史研究系准教授)

センター長

1997(平成 9)年 4 月 1 日～　黒田日出男
1997(平成 9)年 9 月 1 日～ 1998(平成 10)年度　宮地正人
1999(平成 11)年度～ 2002(平成 14)年度　黒田日出男
2003(平成 15)年度～ 2006(平成 18)年度　加藤友康
2007(平成 19)年度～　林譲

センター運営委員会

別表参照(109 頁参照)

共同研究員

2003 年度　斉藤研一・七海雅人・小野寺淳
2004 年度　黒田智・斉藤研一・石川寛夫・吉田成・七海雅人・小野寺淳
2005 年度　石川寛夫・吉田成・七海雅人・小野寺淳
2006 年度　吉川真司・石川寛夫・吉田成・小野寺淳・千葉真由美・黄栄光
2007 年度　石川寛夫・吉田成・伊藤宏之・小野寺淳・黄栄光

非常勤職員

1997 年度～　安達千鶴子
1998 年度　　三戸信恵
1999 年度～　太田まり子

研究成果

構築データベース

所外公開(インターネット)

○所蔵史料目録データベースを介しての成果公開
　「画像史料による近世儀礼の空間構造と時間的遷移に関する研究」プロジェクトによる
　「奏者番手留」「諸公事指図」書誌情報と画像
　「萩野家旧蔵古写真資料の調査研究・整理」プロジェクトによる書誌情報
　「本所所蔵益田家の文書の古文・公開書画像公開」プロジェクトによる画像
　「史料編纂所所蔵貴重書のデジタル化・公開」プロジェクトによる画像
○古文書フルテキストデータベースを介しての成果公開

「台明寺文書フルテキストデータベース化」プロジェクトによる画像
○入来院家文書（本所 HP 所蔵史料紹介デジタルギャラリー、1997 年 9 月～）
○史料編纂所所蔵肖像画模本データベース（1999 年 4 月～）
○摺物データベース
○錦絵データベース（本所 HP 所蔵史料紹介デジタルギャラリー、1997 年 9 月～）
○古写真データベース（1999 年月～）
○肖像情報データベース（2000 年 3 月～）
○歴史絵引データベース（2001 年月～）
○史料編纂所所蔵荘園絵図模本データベース（2002 年月～）
○電子くずし字字典データベース（2006 年度～）
所外公開（図書閲覧室）
○『一遍上人絵伝』（清浄光寺蔵）高精細デジタルデータ閲覧システム（2005 年 9 月～）
所内公開
○地図・絵図所在情報アンケートデータベース
○金石文拓本データベース（2001 年度～）
○花押彙纂データベース（花押類似検索システム）（2000 年度～）
その他
○「万寿寺地蔵菩薩坐像胎内文書画像解析」プロジェクトによるビデオ「古文書の画像処理と解読―伊賀万寿寺の地蔵菩薩坐像胎内文書―（増補版）」（1997 年）

出版物
『日本荘園絵図聚影』4 近畿三（1998 年度）
『日本荘園絵図聚影』5 上西日本一（2000 年度）
『日本荘園絵図聚影』5 下西日本二・補遺（2001 年度）
『東京大学史料編纂所所蔵入来院家文書 CD-ROM 版』（2000 年 2 月）
『東京大学教養学部美術博物館　資料集　二　有職装束類』（2005 年 5 月）
『日本荘園絵図聚影』釈文編古代（2007 年度）
『風説留中画像史料一覧（稿）』（1999 年 3 月）
『摺物総合編年目録（第 2 稿）』（2000 年 7 月）
『神田家文書目録』（2005 年 3 月、DVD 添付、国立歴史民俗博物館共編）
『画像史料解析センター通信』第 1 号～第 38 号

センター研究集会（国内・国際）
「古写真研究プロジェクト第一回研究会」「中世画像史料への展望―北から南から―」（2000 年 2 月）
「歴史学のためのウェブサイト第四回経験交流会―マルチメディア・プレゼンテーションの可能性―」（2001 年 3 月）

「画像史料とデータベース―新規三データベースの課題と利用―」（2002 年 3 月）
「iPalletnexus ユーザーズカンファレンス　画像史料の可能性」（2004 年 1 月）
「『日本荘園絵図聚影』古代ワークショップ」（2004 年 1 月）
「八瀬童子の空間認識と歴史意識」（2004 年 2 月、科学研究費基盤(C)「八瀬童子の空間認識と歴史意識」（研究代表者 小野寺淳）との共催）
「『日本荘園絵図聚影』古代ワークショップⅡ」（2005 年 1 月）
「『日本荘園絵図聚影』古代ワークショップⅢ」（2006 年 1 月）
「『日本荘園絵図聚影』中世ワークショップⅠ」（2006 年 2 月）
「歴史のなかの地図・空間描写Ⅰ　測量」（2006 年）
「第 1 回日本関係清代档案をめぐる国際研究集会」（2006 年 7 月）
「『日本荘園絵図聚影』中世ワークショップⅡ」（2007 年 1 月）
「第 2 回日本関係清代档案をめぐる国際研究集会」（2007 年 5 月、日本学士院との共催）

史料展示・展覧会等

「時を超えて語るもの―史料と美術の名宝―」（2001 年 12 月、東京国立博物館との共催、本所 HP 所蔵史料紹介デジタルギャラリー参照）
「王朝貴族の装束展―衣服を通して見る文化の国風化―」（2005 年 5 月、東京大学教養学部美術博物館との共催）
「ひらめき☆ときめきサイエンス　史料からみる日本の歴史」（2005 年 12 月、本所 HP 所蔵史料紹介デジタルギャラリー参照）

外部資金

プロジェクト研究の推進のため、各プロジェクトメンバーが中核となって、科学研究費等の外部資金を獲得し、それぞれのグループと有機的に連携・協同して、研究を推進している。ここでは、プロジェクトメンバーが研究代表者となっているもののみを掲載した。

1996～1997 年度特定研究経費「東京大学史料編纂所所蔵文書の伝来過程についての研究」（研究代表者 保立道久）
1996～1998 年度科学研究費基盤(B)「綸旨・院宣の網羅的収集による帰納的研究」（研究代表者 近藤成一）
2000～2001 年度科学研究費基盤(B)「荘園絵図史料のデジタル化と画像解析的研究」（研究代表者 黒田日出男）
2000～2004 年度科学研究費特別推進研究(COE)「前近代日本史料の構造と情報資源化の研究」（研究代表者 石上英一）
2002～2003 年度科学研究費基盤(C)「内務省地理局における地図蓄積＝管理構造の復原的研究」（研究代表者 横山伊徳）
2002～2004 年度科学研究費基盤(A)「禅宗寺院文書の古文書学的研究」（研究代表者 保立道久）

2002～2004 年度科学研究費基盤(A)「第二定型洛中洛外図屏風の総合的研究」(研究代表者 黒田日出男)

2003～2006 年度科学研究費基盤(A)「前近代東アジアにおける日本関係史料の研究」(研究代表者 保谷徹)

2004～2007 年度科学研究費基盤(A)「荘園絵図の史料学とデジタル画像解析の発展的研究」(研究代表者 林譲)

2004～2007 年度科学研究費基盤(A)「画像史料解析による前近代日本の儀式構造の空間構成と時間的遷移に関する研究」(研究代表者 加藤友康)

2005～2007 年度科学研究費基盤(C)「日本金石文の編年史料化と史料学的分析方法に関する研究」(研究代表者 高橋慎一朗)

2005～2008 年度科学研究費基盤(A)「日本前近代史料の国際的利用環境構築の研究」(研究代表者 石上英一)

2006～2009 年度科学研究費基盤(A)「地図史料学の構築―前近代地図データ集積・公開のために―」(研究代表者 杉本史子)

画像史料解析センター運営委員会委員一覧

（○印専任教員・●印センター長）

	1997 年度	1998 年度	1999 年度	2000 年度	2001 年度
委員長（2 号委員）	近藤成一	近藤成一	宮崎勝美	宮崎勝美	榎原雅治
1 号委員 （センター教授・准教授）	○●黒田日出男 ○●宮地正人 ○鶴田啓	○黒田日出男 ○鶴田啓	○●黒田日出男 ○馬場章	○●黒田日出男 ○杉本史子	○●黒田日出男 ○杉本史子
2 号委員 （研究所教授・准教授）	加藤友康 山口英男 横山伊徳	加藤友康 山口英男 横山伊徳 ●宮地正人	久留島典子 宮地正人 鶴田啓	久留島典子 宮地正人 鶴田啓	宮地正人 鶴田啓
3 号委員 （所長が必要と認めた者）	○高橋典幸	○高橋典幸 ○井上聡	○高橋典幸 ○井上聡 菊地大樹	高橋典幸 ○井上聡 菊地大樹 ○木村直樹	高橋典幸 ○井上聡 菊地大樹 ○木村直樹 藤原重雄

2002 年度	2003 年度	2004 年度	2005 年度	2006 年度	2007 年度
榎原雅治	吉田早苗	吉田早苗	佐藤孝之	佐藤孝之	尾上陽介
○●黒田日出男 ○保谷徹	○黒田日出男 ○保谷徹	○石上英一 ○保谷徹 ○小宮木代良 ○林譲	○石上英一 ○保谷徹 ○小宮木代良 ○林譲	○石上英一 ○保谷徹 ○末柄豊 ○山口和夫 ○高橋敏子	○石上英一 ○保谷徹 ○末柄豊 ○山口和夫 ○高橋敏子
高橋敏子 鶴田啓	高橋敏子 ●加藤友康	高橋敏子 ●加藤友康	箱石大 ●加藤友康 山口和夫	箱石大 ●加藤友康	箱石大 ●林譲
高橋典幸 ○井上聡 菊地大樹 ○木村直樹 藤原重雄	○西田友広 井上聡 金子拓 ○木村直樹 藤原重雄 川本慎自	○西田友広 井上聡 金子拓 木村直樹 藤原重雄 川本慎自	○西田友広 金子拓 小野将 松澤克行 川本慎自	金子拓 小野将 松澤克行 川本慎自	井上聡 須田牧子 小野将 松澤克行

東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター開設 10 周年記念報告書

画像史料解析センターの成果と課題

2007（平成 19）年 6 月 25 日
東京大学史料編纂所
東京都文京区本郷 7－3－1
TEL：03－5841－5997
FAX：03－5841－5956